

東北アジア研究センター叢書 第58号

モンゴル牧畜社会を  
めぐるモノの  
生産・流通・消費

風戸真理・尾崎孝宏・高倉浩樹 編

---

CNEAS

東北大学東北アジア研究センター



## 目次

はじめに	高倉 浩樹	1
モンゴル国における住居フェルト生産の変遷 —工業製品と手作業の製品—	風戸 真理	5
近現代モンゴルにおける畜産物利用の変化 —乳・乳製品の域外販売と域内消費に着目して—	富田 敬大	29
内モンゴルおよびモンゴル国における乳酒をめぐる 生産・流通・消費	尾崎 孝宏・森永 由紀	61
運転手からみた自動車輸送 —モンゴル国西部の零細業者による輸送経路の形成と維持—	寺尾 萌	99
モノの流通と消費にみるモンゴル遊牧民の生存戦略	堀田あゆみ	131
結論—国家規模あるいはグローバルな流通にみる モンゴルの文化的指向性—	尾崎 孝宏・風戸 真理	161
著者紹介		171
あとがき	風戸 真理・尾崎 孝宏	175
英文要旨		178

## Contents

Preface .....	Hiroki Takakura	1
Change of Felt Production in Mongolia: Industrial Products and Hand Work Products .....	Mari Kazato	5
Reconsidering of Pastoral Products Use in Modern Mongolia: Focusing on Distribution and Consumption of Dairy Products .....	Takahiro Tomita	29
Production, Distribution and Consumption of Fermented Milk in Inner Mongolia and Mongolia .....	Takahiro Ozaki, Yuki Morinaga	61
Transport as the Drivers' Life: A Case Study for the Formation and Maintenance of the Transit Routes by Micro Business Drivers in Western Mongolia. ....	Moe Terao	99
Living Strategy of Mongolian Nomads Observed in Distribution and Consumption of Goods .....	Ayumi Hotta	131
Conclusion: Mongolian Cultural Orientation Found in National or Global Scale Distribution .....	Takahiro Ozaki, Mari Kazato	161
Epilogue .....	Mari Kazato, Takahiro Ozaki	175
Summary .....		178

---

---

## はじめに

高倉 浩樹

(東北大学東北アジア研究センター)

本書「モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費」は、モンゴル牧畜にみられる畜産物に焦点をあてた文化・社会人類学的研究である。牧畜の畜産物といえば、家畜の乳と肉、さらに毛や皮を使った衣食住に関わる物質文化が想起される。ここでは馬乳酒、フェルトやカシミヤ等が取り上げられている。

日本の日常生活のなかで暮らしていると、そもそも牧畜生活そのものが遠い世界である。とはいえ、家畜を伴い遊牧する生活はテレビなどで放送されることあり、想像可能である。しかしその地の人々が放牧地の生活のなかで何を作り出すかとなると、乳や肉以外にはなかなか思いつかないのではないだろうか。というのも、そもそも現代日本の生活では、食料にしても日常雑貨や道具を含めたモノは第一義的には購入する商品であり、あるいは家族や友人から贈られるものだからである。生活に必要なものを自分たちで作り出すという経験を得ることはなかなかない。

こうしたなかで、牧畜という伝統的生活を送る人々が、その生活のなかで果たして何を作り出し、それはどのような技術によって実践されてきたのか、というのはとても興味深い問いである。とりわけここでは、馬乳酒という飲料でありかつ彼らの食文化のなかではむしろ食料という範疇にはいるモノの歴史と現在が紐解かれている。日本のカルピス生産のヒントとなったといわれる馬乳酒がモンゴル地域でどのような文化的意味をもつのか、そしてそれはどのような社会的文脈のなかで必要とされるものなのかが説得力を持って描かれている。また多くの読者はフェルトがモンゴル牧畜と結びついているという事実そのものを知らないの

ではないかと思う。フェルトの原料は羊毛やラクダ毛であり、モンゴルでは古くから日常生活にとけこんだものである。フェルトは防寒着以外に、遊牧天幕の壁として利用される。フェルトによって住宅の素材となること自体が驚きだが、むしろ消耗品として常に補充される対象であるという本書での指摘は新鮮である。日本の木造家屋の例えば屋根が補修され使い続けられていく。これと同じように、天幕のフェルトも補充され部分的に更新されていくというのがモンゴルでの日常なのである。

本書の著者達の関心は畜産物が直接作られ、そして利用される放牧地の現場だけで留まっていない。ある意味では当たり前だが、伝統的牧畜は産業化され外部世界と連なっているからである。モンゴル国は1924年に世界で二番目に社会主義国として独立し、その後社会主義的な工業化を進めてきた。1990年に市場経済化したのが、いずれにしても独自の近代化と開発を進めてきた地域である。その意味では伝統的牧畜は畜産業として近代化され、農村ならぬ牧畜地域以外の都市部にも食料供給を行うという歴史を経てきた。この点で、乳製品の工業化はそれ自体重要な研究対象である。ただ乳製品の商品化はソ連との貿易を前提として実施され、社会主義時代には世帯経済そのものには影響しなかったという指摘は興味深い。そうした過程は先に記したフェルトも同様であり、工業製品化されたフェルトは遊牧生活の維持にどのように用いられていたか、その背後で製作されてきた世帯レベルでの自家製フェルトが社会主義体制崩壊後の文化の維持にどのように役だったのか詳細に記述されている。

関心を惹くのは、市場経済化後のなかでの牧民の世帯経済レベルの生存において畜産物がどのような役割を果たしてきたのかである。この調査分析はまさに参与観察に基づくフィールドワークを方法論の中核に据える人類学ならぬ解明である。そのなかでおそらく本書が開拓した当該研究領域の新機軸は、市場経済化で商品化された畜産商品を販売するためにそれを運搬する零細運送業者と道路の民族誌であろう。伝統的な物質文化だけでなく、工業製品の文化的分析や解釈が重要であることが指摘されて久しいが、それがどのような交通や物流のシステムのなかで

人々の日常生活を支えているのか、この点について人類学的研究は端緒についたばかりである。長距離トラックドライバーと同乗する形での調査というフィールドワークのなかで得られた民族誌的事実と人類学的考察は極めて刺激的である。

というように本書はこれまでモンゴル人類学で積み重ねられてきた中心的テーマである牧畜文化すなわち家畜管理や移動生活に関わる領域を飛び越えた点を明らかにしようと試みるものである。この点は極めて刺激的でかつ民族誌的な読み物としても大変おもしろい。重要だと思うのは、こうした現代的テーマの開拓が、流行の人類学理論を適用して行われるというのではなく、あくまで放牧地でのフィールドワークの地続きのなかで切り開かれていることである。したがって読者は、モンゴルの文化的伝統とその現代化の連続性を十分意識しながら読み進めることが可能なのである。

と同時に本書の価値は、モンゴル以外の牧畜地域の研究者にも開かれている。というのも、畜産物の現代生活における役割と商品化・市場化、そしてそれを取りまく社会システムというのは、いずれの牧畜社会においても同様に問いかけることができる視座だからである。いうまでもなく、世界のいずれの地域でも伝統的牧畜がそのまま維持されていることはない。農業開発や資源開発のなかで土地争い、様々な要因に基づく武力紛争によって難民化した状況など、世界の牧畜社会をめぐる現状は、現代世界の矛盾の最前線というべきものである。そのあり方を解明する人類学ならではの、視座が本書には内包されていると思うのである。

なお、本書は東北大学東北アジア研究センター公募共同研究「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」(2014年度)「モンゴルとカザフにおけるモノの域外流通と域内流通」(2015年度) [いずれも代表は風戸真理(北星学園大学)]の成果論文集である。筆者はモンゴルの北方の位置するシベリアの狩猟採集や牧畜の人類学者としてこれまで調査研究を進めてきた。文献調査や短期の訪問としてモンゴルの牧畜を見聞したことはあるが、本格的な調査研究はまだできていな

い。そんな筆者がなぜ「はしがき」を書いているのかといえば、上記の共同研究の受け入れ研究者だったからである。東北アジア研究センターの公募共同研究の目的は外部の研究者を巻き込んで、当センターの研究者ができない東北アジア研究を開拓することである。この意味で、この共同研究は大変な成功だったのではないかと、考えている。

代表者の風戸真理さんとは古くからの知り合いだったこともあり、彼女がモンゴルの伝統牧畜の文化やその変容について関心を基軸に研究をすすめていることは知っていた。しかし、この共同研究に図らずも参加することで、モンゴルの牧畜研究の最前線を垣間見ることができた。またモンゴル社会の文脈のなかから彼女が見いだした研究のシーズとそれを育てていく、そして他の研究者と共有していくあり方からは、方法論という意味も含めて多くのことを学んだ。このような経験が、本書の読者と共有できるのではないかと考えている。

なお本書では、モンゴル語のラテン字転写およびカタカナ表記の方法については統一せず、各章の著者に判断に委ねている。

---

---

# モンゴル国における住居フェルト生産の変遷

## —工業製品と手作業の製品—

風戸 真理

(北星学園大学短期大学部)

### I はじめに

本章では、モンゴル国の畜産物のなかでも毛をとりあげ、羊毛製品の代表であるフェルトに焦点をあてる。羊毛の流通とフェルトの生産は、20世紀以降の国家の政治経済体制の変化のもとで、どのような影響を受け、どのように変化してきたのだろうか。とくにモンゴルの近代化にともなう工業化とフェルト生産はどのような関係にあるのだろうか。

フェルトとは、原則として、獣毛を縮絨（しゅくじゅう）させて作られた不織布である。縮絨（あるいはフェルト化）とは、獣毛に熱・水分・摩擦・圧力などを加えることで、獣毛のキューティクルを開かせて繊維どうしを互いに絡み合わせ、その後、キューティクルが閉じてこれがほどけなくなる変化である。人類が最初に発明したフェルト生産技術は、獣毛に水分や摩擦などを加えて縮絨させる「ウェット・フェルティング」(wet felting) 技術であり、モンゴルでも昔からこの方法でフェルトが作られてきた<sup>1)</sup>。

モンゴル高原では紀元前からフェルトが利用されてきた[Myagmar

---

<sup>1)</sup> 20世紀のアメリカ合衆国で、化学繊維を含む多様な繊維を不織布に仕上げることのできる工業技術として、ニードルパンチ(needle punch)製法が発明された。ニードルパンチ製法の原理は、返しのついた針で繊維を繰り返し刺すことで繊維を絡みあわせるものである。モンゴル国でも首都の一部の工場ではニードルパンチ製法によってフェルトが生産されているが、地方の工場ではウェット・フェルティング技術による生産が主流であるため、本章ではウェット・フェルティング技術で作られたフェルトに焦点をあてる。

2006 : 13]。また、13～14 世紀の元朝期には、住居の覆いとしてのフェルトが、ほとんどの家族によって生産されると同時に、交易や課税のための通貨の役割をも果たしていた [Batchuluun 2009 (2000) : 36]。

モンゴル国では現在、さまざまなフェルト製品が生産されているが、牧民の生活の中でもっとも重要な位置を占めているのは、移動式住居「ゲル」(ger) (写真 1) の壁や屋根、床等となる巨大で厚いフェルトであろう。モンゴル国では現在でも、牧畜地域と都市部との両方でゲルが住居として用いられており、ゲルは実用品の座を占めている<sup>2)</sup>。その一方で、2013 年には「モンゴル・ゲルの伝統的職人技とそれに関連する慣習」がユネスコの無形文化遺産に登録された [UNESCO 2013]。このことにより、羊毛の刈り取り (写真 2) から始まるフェルトの生産過程は無形文化遺産の一部となっているのである。

本章では、ゲルの壁や屋根に用いられるフェルトをまとめて「住居フェルト」とよぶ。生産過程からみれば、すべての住居フェルトは最初に長方形に作られ (写真 3)、壁用にはほぼそのまま使用され、屋根用



写真 1 ゲル

---

<sup>2)</sup> ゲルの詳細、とくにゲルの歴史については松川 (1998) を、移動とサイズ変化については風戸 (2015) を参照されたい。



写真2 家族総出でヒツジの毛刈り



写真3 長方形に作られたフェルト(中央)と扇形に加工されたフェルト(左)

には切ったり縫い合わせたりすることで扇形に加工される。このため本章では、とくにことわりなく「住居フェルト」もしくは「フェルト」という場合、縫製加工される前の長方形のフェルトを指すものとする。なお、モンゴル語でフェルトは「エスギー」(*esgii*)とよばれる。

住居フェルトを工業用品として生産する場合には、そのサイズや原料が「モンゴル国家規格」[MNS : Mongolian National Standards]によって定められている。たとえば、2008年改定の「ゲルのフェルト、技術的要請」[MNS 0296 : 2008]では、住居フェルトのサイズは約1.8 m×5.2 m×12 mmとされている。ただし、牧民が自家消費用に住居フェルトを作る場合には国家規格は適用されないため、モンゴル国でゲルの壁として実際に使われている住居フェルトのサイズにはバリエーションがみられる。しかしながら、日本の畳に換算するとおおむね6畳分にも相当する巨大な一枚物のフェルトが長らく手作業と畜力によって生産されてきたことは注目に値する。

## II モンゴルのフェルトに関する先行研究と本章の課題

モンゴルの住居フェルトの生産はどのようにおこなわれてきたのだろうか。本節では、住居フェルト生産の技術、これに関連するフォークロア、そして社会との関係について先行研究に依拠して検討する。

モンゴル国の研究者たちは、古代からのフェルトの利用やフェルト生産の技術、そしてフェルト生産にまつわる慣習やフォークロアについて記述してきた[例えば、Sampildendev 1985 ; Batchuluun 2000 (2009) ; Myagmar 2006]。これらの文献にはフェルト生産に関連する祝詞やことわざが多数収録されており、フェルト生産の各工程が豊かなフォークロアの世界と繋がっていることが示唆されている。同時に、フェルト生産は社会的な営みでもあった。H. サンプルデンデウによれば、フェルト生産は単一世帯の労働力だけでは対応できない重労働であり、そのため、作業日程を事前に近隣のびとに知らせることで協業を組織する工夫がなされてきた[Sampildendev 1985 : 65]。このように、フェルト生産は

モンゴルの文化、社会に埋めこまれていたといえる。

モンゴル国以外の研究者は、文化比較の視点をもって、モンゴル高原各地でみられるフェルト生産の過程を記述してきた。まず、ハンガリーの人類学者である A. ロナ=タス（1963）は、1957年と1958年に社会主義期のモンゴル国スフバートル県をたずね、そこでフェルト生産を観察した。当時は社会主義期で、フェルトは主に半機械化された工場生産されていたはずであるが、彼が見たのは、手作業で羊毛を処理し、畜力によって羊毛を縮絨させる方法であった。次に、内モンゴル人の人類学者である楊海英（1996；1999）は1991～1993年に中国・新疆ウイグル自治区で、また、1996年には民主化したモンゴル国の南部ゴビ草原におけるフェルト生産を調査した。ロナ=タスと楊の研究により、モンゴル系の人びとはフェルトを作る時に「母フェルト」とよばれる既存のフェルトを用いることもわかった<sup>3)</sup>。

これらに続いて著者は、2001年のモンゴル国ドンドゴビ県と2004年のザブハン県においておこなった調査にもとづき、フェルト生産には、一時的に多くの労働力と畜力を必要とするため、世帯=核家族を越えた労働交換の組織が規範化されていること、生産に関わる知識・技術は人びとの記憶や身体に埋め込まれていて、これが共同作業のなかで他者に継承されること、などを明らかにした（写真4）[風戸 2011-a；2011-b；2012；Kazato 2011]。

以上のように、住居フェルトの生産技術とそれに関わる文化的な慣習および社会との関係については、モンゴル国とその周辺地域での観察資料が蓄積され、その特徴が明らかにされてきた。ただし、社会主義期以降には住居フェルトは主に半機械化された工場で作られてきたのにもかかわらず、これまでの住居フェルト生産の研究は伝統的な手作業にのみ注目してきたのであり、モンゴル国のフェルト文化における工場生産の

<sup>3)</sup> 母フェルトは、既存のフェルトと同じサイズと厚さのフェルトを作るために不可欠な「型」である。母フェルトの上にふわふわの羊毛を並べ、これを母フェルトごと巻いて水分や摩擦などを加えて縮絨させることで母フェルトと同じサイズの娘フェルトを得ることができる。詳しくは別稿を参照されたい [風戸 2011-a；2011-b；2012；Kazato 2011]。



写真4 共同作業でおこなわれるフェルト生産

位置づけは把握されてこなかった。そこで本章は、住居フェルト生産の機械化をはじめとして、モンゴルの羊毛流通とフェルト生産が国家の政治経済変化によってどのような影響を受けてきたのか、とくに、社会主義化と市場経済化によってフェルト生産はどのように変化したのかを分析する。そのうえで、伝統的な手作業によるフェルト生産と半機械化された工場でのフェルト生産を、1920年代から2010年代までの約100年間のマクロな政治経済の変化のもとに位置づけ、両者の関係を示す。

### Ⅲ 研究対象と研究方法

本章が対象とする時期は主に、1920年代～1980年代の社会主義期と、1990年代以降の市場経済化期（移行期）である。分析に用いる資料はモンゴル国の国家統計である。

モンゴル国のフェルト製品には、(1)住居フェルト（写真5）の他に、(2)昔ながらの家畜管理用品や生活雑貨（その代表はフェルト長靴、写真6）、(3)外国人観光客向けのみやげもの、がある。これらのうち、(1)と(2)はモンゴルのとくに牧民の生活必需品であり、いわば「伝統的な



写真5 ゲルを新築するために作ったフェルトの縁を補強する



写真6 フェルト長靴

フェルト製品」である。これに対して、(3) は外国人観光客の増加に合わせて増えてきた、比較的「新しいフェルト製品」であるといえるだろう。以下では、伝統的なフェルト製品のなかでも、とくに研究蓄積と参照可能なデータの多い住居フェルトに着眼して分析を進める。

#### IV フェルト利用の歴史

本節ではモンゴル高原周辺におけるフェルト利用の歴史を紹介したい。まず、先史時代に関しては、ノイン・ウラ遺跡（モンゴル国、紀元前後）からフェルトのラグや、男性用のフェルト製靴下<sup>4)</sup>が出土している [Myagmar 2006 : 13]。つまり、紀元前後からフェルトがインテリアや服飾に用いられていたのである。また、バジリク遺跡（アルタイ共和国、紀元5世紀頃）の柳室の床と壁面はフェルトで覆われおり [加藤 2002 : 65]、古くから居住空間とフェルトが関連していたことがうかがえる。

モンゴル帝国期には、「フェルトは各家族の必要を満たすためだけでなく、交易や課税のための通貨の一形態としての役割を果たし」、「オゴダイ、グユク、モンケ・ハーンの時代<sup>5)</sup>には、すべてでないにしろほとんどの家族がフェルト生産に従事していた」 [Batchuluun 2009 (2000) : 36]。当時、ほとんどの人がフェルトを生産して自身の住居に用いており、それと同時に、フェルトは交易や徴税のさいの貨幣のような役割を担うほど、帝国経済においては重要な物資であった。

清朝期においても、フェルト生産と国家との密接な関係がうかがえる。たとえば、モンゴル国立中央アルヒーフの目録検索で「*esgii* (フェルト)」+「*alba* (貢租・賦役)」で検索すると約70件がヒットした (Undesnii Tov Arhivyn Barimtyн Hailт、2015年3月6日現在)。その文書のタイトルは、たとえば、「駅所の公務所にゲルを準備させてそのフェルト用の羊毛を繁殖ヒツジ群から供出させることについて」 [M-3/1/733, 1877, pp.2]、「(前略) 役所の財産、官吏の駅所のためのゲルのフェルトを出さ

<sup>4)</sup> ブーツの上縁から模様が見える装飾性の高いもの。

<sup>5)</sup> 1229～1259年に当たる。

せる文書」[A-33/1/606, 1914, p.1] などであり、フェルトの材料となる羊毛の提供やフェルトの生産が貢租・賦役となっていたことがわかる。

このように、遅くとも 13 世紀から 20 世紀初頭まで、多くの牧民が自身の住居を覆うためにフェルトを自作していたと同時に、フェルトが「納税における重要な役割」[Batchuluun 2009 (2000) : 36] を果たしたり、フェルトの生産が貢租・賦役の役割を果たすなど、フェルトの生産と流通は国家の統制の下にあった。それと同時に、フェルト生産は饗宴、遊び、儀礼的な祝詞をとまなう重要な文化行事でもあった [前掲書 : 20]。

## V 社会主義期における住居フェルトの生産 | 1920 年代～1980 年代

モンゴルは 1921 年に中華民国から独立し、1924 年に社会主義国としての近代化の歩みを始めた。その初期にあたる 1930 年代前半の初期工業発展は、軽工業・繊維部門に重点をおいていた [モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) : 328-329 ; 351-354]。具体的な政策としては、第一に、党・政府が一般人による個人手工業を奨励するとともに減税し [前掲書 : 337]、家内制手工業を増強させた [前掲書 : 329]。この家内制手工業に住居フェルトの生産も含まれていたと考えられる。第二に、家畜頭数を増加させるとともに、牧民経営を生業でなく商品経営体として発展させる努力と、畜産物の国外輸出を開始した [前掲書 : 345-347]。このため流通も盛んになり、一般商人<sup>6)</sup> が畜産原料の買い上げなどの面で活躍した [前掲書 : 345-347]。

1930 年代も後半になると状況が逆転した。バトチョローンによれば、それは牧民による伝統的で小規模・手作業のフェルト生産が、工場ベースの半機械化システムにおきかえられていったからであり、その背景にはソ連に指導されたモンゴルの経済政策があった [Batchuluun 2009 (2000) : 20]。

---

<sup>6)</sup> 一般商人は「おもに国家から商品を買って商売を行い、牧民からは畜産原料を買って国家に供出していた」[モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) : 347]。



写真7 羊毛と肉を生産するヒツジの群れ

1950年代後半からは、「すべての羊毛が各地の農牧業協同組合『ネグデル』によって回収され、ウランバートルに送られてフェルトや生地加工された。そして牧民は、何世紀も続いたフェルトの生産や刺し子をすることを続けることができなくなった」[Batchuluun 2009 (2000) : 20]。この時期にモンゴルは、ネグデル支配による畜産物流通の時代に入ったのである。ネグデルは羊毛(写真7)にとどまらず牧民が生産したすべての畜産物に生産ノルマを課して、経済計画に従ってこれらを買上げる体制を整備していった。1980年代中頃には、G. ミヤグマルによれば、住居フェルトとフェルト長靴を製造する2つ目の工場が操業開始し、そのことにより伝統的なフェルト生産は中断期に入った[Myagmar 2006 : 53]。

ここで、1940年～1990年における、全羊毛に占めるフェルト生産の割合をみてみよう。ネグデルが生産した全羊毛のうちフェルトに加工された羊毛の割合を、フェルト1mあたり4.0kgの羊毛を必要とするものとして計算したところ<sup>7)</sup>、1940年～1990年のあいだにフェルトに加工さ

<sup>7)</sup> 算出根拠は、モンゴル国家規格「MNS0296 : 2008(ゲルのフェルト、技術的要請)」に準じた。

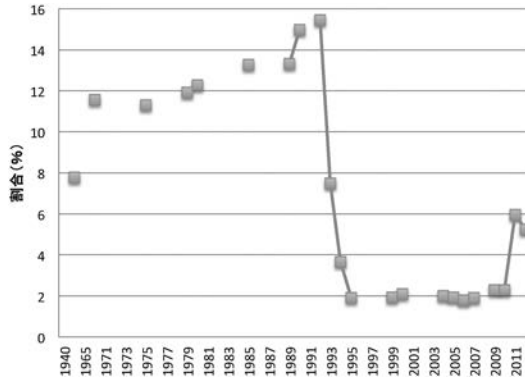


図1 フェルトにされた羊毛が生産された全羊毛に占める割合  
 出典：Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR (1981),  
 National Statistics Office of Mongolia (1981, 1998, 2001, 2010, 2013) ; State Sta-  
 tistical Office of Mongolia (1996).

れた羊毛はおおむね増加傾向にあり、その割合は全羊毛の約7～16%に達していた(図1)。このことは、モンゴルが畜産物を生業経済の一環として自家消費したり、あるいは原料のまま輸出する国から、これを自国内で加工して製品化する工業国に変わってきたことを意味している<sup>8)</sup>。

以上をまとめると、社会主義期におけるフェルト生産は、初期に限っては牧民の手作業と畜力に頼る方法での増産が図られたが、1930年代後半以降には、半機械化された工場で工業製品として大量生産されるようになっていった。原料については、1950年代後半に牧畜業の集団化が完成してからは、羊毛のすべてがネグデルに回収されてウランバートルの工場での加工に供されるようになったことから、牧民は昔ながらの方法でのフェルト生産を続けることができなくなった。この時期、牧民は羊毛を生産してネグデルに納め、そしてネグデルから得た給料で工場製のフェルトを購入して、使用していたのである。このように、社会主義期を通して住居フェルトは、生業から工業の領域へ、手作業で生産さ

<sup>8)</sup> 羊毛を原料とした工業製品としては住居フェルトの他に、洗った羊毛(スカード)・絨毯・フェルト長靴・生地(ニットと織り物)・衣類(コートとスーツ)などがあった [National Statistical Office of Mongolia 1996: 182-185]。

れるモノから機械で生産されるモノへ、自給自足のモノから都市の工場  
で生産されて国家規模で流通する商品へ、と変わってきた。

## Ⅵ 移行期における住居フェルトの生産 | 1990 年代～

### 1 工業部門の住居フェルト生産の減退

1990 年、モンゴルは社会主義を放棄し、民主主義・市場経済への転換を始めた。これにともない、それまでに羊毛生産の中心組織であったネグデルが解体され、羊毛の流通を担っていた畜産物調達制度が機能しなくなった。このため、国营のフェルト工場の稼働が止まってしまった。

その結果、国全体のフェルト製品（住居フェルトとフェルト長靴）の生産量は 1990 年をピークに、以後、激減した（図 2）。具体的にいうと、住居フェルトは 1990 年には 74 万 5100 メートル生産されていたが、体制転換を挟んで 7 年後には 7 万 5000 メートルと、その生産量は 10 分の 1 に落ち込んだ<sup>9)</sup> [National Statistical Office of Mongolia 1998 : 184]。

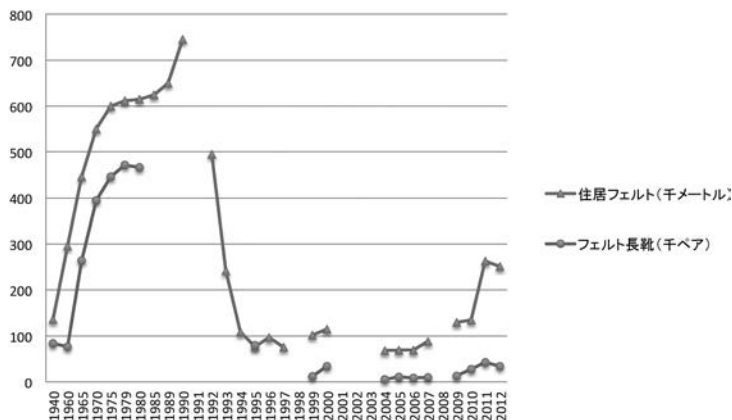


図 2 フェルト生産量の推移

出典 : Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR (1981),  
National Statistical Office of Mongolia (1998, 2001, 2010, 2013)

<sup>9)</sup> フェルト長靴の生産減少はより顕著であり、1980 年の 46 万 5800 ペアから 2004 年の 4900 ペアへと約 100 分の 1 に減っている [National Statistical Office of Mongolia 1998 ; 2009]。



写真8 何重にもつぎあてされた住居フェルト

同時期の、全羊毛中フェルトにされた羊毛の割合をふりかえてみると（図1）、1991年から1995年にかけて約16%から約2%まで落ちこみ、その後、2013年に至るまで全羊毛の約2~6%を占めるにとどまっている。これは、ネグデル期の半分以下の割合である。

ここで注意しておきたいのは、これらのデータは、モンゴルにおいて住居フェルトの需要がなくなったことを意味するものではないということである。図1のもととなったデータは、工場で生産されたフェルトの量のみを表したものである。これ以外に、ある者は自宅でフェルトを自作し、ある者は中国からフェルトを輸入して転売することを始めた。なぜなら、ゲル居住者にとって、ゲルの部品としての住居フェルトは不可欠だからである。そして、住居フェルトは日常的な使用・風雪・日光などによって絶えず劣化するので、メンテナンスや交換が必要な消耗品なのである（写真8）[風戸2015]。

## 2 牧民による住居フェルト生産の再興

このような事情を背景に、再び牧民自身の「手」によって住居フェルトが生産されるようになった。とはいえ、牧民の手作業によるフェルト

生産には、前節で述べたようにブランクがある。

このブランクについて検討したい。図3に、1960年から2013年までの「工業部門のフェルト生産」と「牧民のフェルト生産」の変遷を示した。社会主義期には「工業部門のフェルト生産」が急増したことが読みとれるが、「牧民のフェルト生産」に関するデータはない。その理由は、1960年～1980年代には牧民によるフェルト生産が奨励されていなかったこと、1980年代中頃以降には牧民によるフェルト生産がほぼ断絶していたからであると考えられる<sup>10)</sup>。ただし、第2節で述べたとおり、人類学者のロナ=タスは1957年と1958年にスフバートル県で牧民の手作業によるフェルト生産を観察している。この時期はネグデル制度の完成期にあたるため、牧民による慣習的なフェルト生産の残存を外国人研究者が見たとは考えにくい、学術ないしは観光目的で特別に手作業によるフェルト生産がおこなわれる機会があったことが推察される。

次に、1991年以降の「牧民のフェルト生産」について詳しくみていこう。モンゴル国家統計局によれば、1991年には、約11万5000世帯

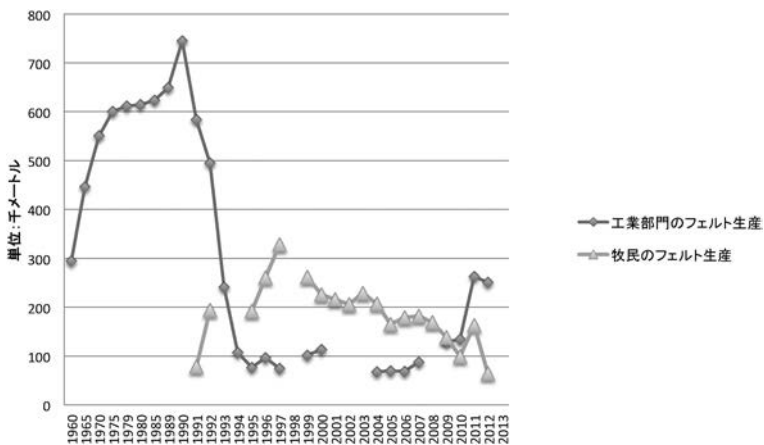


図3 工業部門と牧民によるフェルトの生産

出典: National Statistical Office of Mongolia (2013, 2008, 2005, 2001, 1999)

<sup>10)</sup> 社会主義期には、牧民がフェルトを製作することが家内制手工業として抑制されていたと話す牧民もいた。

あった牧畜世帯の約 10.5% (約 1 万 2100 世帯) が住居フェルトを作った [USG 1993, 1996]。その後、1990 年代前半には都市・定住地で仕事を失った人びとが草原に移動したこともあり、牧畜世帯が約 1.5 倍に増えたが (約 17 万世帯)、その約 19.5% (約 3.3 万世帯) が住居フェルトを作っている [前掲書 1993, 1996]。さらにいえば、草原では、複数の世帯が集まって居住集団が作られることや、フェルト生産のさいには近隣の人びとが作業を手伝うべきだという規範があることを考慮すると、多くの牧民がフェルト生産に関与したものと考えられる。

牧民によって作られたフェルトの量も、1991 年の 7 万 890 メートルから、1995 年には約 2.7 倍の 19 万 2300 メートルに伸びた。ここで注目すべき事実として、1995 年に、牧民が作った住居フェルトの量が、工場生産の住居フェルトの量を上回ったことがあげられる (図 3)。工業部門の住居フェルト生産量ももっとも大きく減退し、これを受けて、牧民によるフェルト生産が急増した時期である。

1990 年代以降の牧民によるフェルト生産は文字どおり試行錯誤によるものであった。筆者は 2000 年代前半のドンドゴビ県とザブハン県において牧民のフェルト生産を観察したが、人びとは過去の記憶をたどり、断片的な知識を提示しあい、それらを寄せ集めることでフェルトを作っていた。フェルト生産に欠かせないと言われる祝詞についても、「なんだっけ?」「『トムバイ』では?」などと言ひ合い、弱々しい声で祝詞を唱えていた (写真 9)。

### 3 フェルト工場の再稼働

ところが、2010 年になると、再び、工場製のフェルト生産量が牧民によるフェルト生産量を上回るという転換が起きた (図 3)。これは、牧民によるフェルト生産量が 1990 年代の後半以降に、漸減する一方で、工業部門のフェルト生産が 2000 年代後半に回復したことによるものである。

フェルト工場は、2000 年代には、ウランバートルの他に郡の中心地などにも多くみられるようになった。ドンドゴビ県デルゲルツォクト郡



写真9 羊毛を牛革で包んだ時に「トムバイ、トムバイ」と祝詞を唱える

のフェルト工場を訪ねると、建物と機械が古びていたので、その由来を問うと、その設備はもともとネグデルのものであったという。ネグデルのフェルト工場の建物や機械は、1990年代初頭の民営化のさいに、組合員である従業員らに分割して分配された。後にそれらをまとめて買った者が設備をメンテナンスし、工場を再稼働させたということであった。

市場経済化期のフェルト工場におけるフェルト生産の技術は、基本的には、社会主義期の工場で採用されていたのと同じ「半機械化されたウェット・フェルティング技術」である。つまり、一部の工程は手作業でおこなうが、一部の工程で動力機械を使用するのである。たとえば、羊毛を型どおりに並べる工程は手作業でおこなわれるが、羊毛を縮絨させるために摩擦や振動を加えるのには動力機械が使用される(写真10)。

なお、牧民によるフェルト生産は、「すべての作業を手作業と畜力でおこなうウェット・フェルティング技術」によっている。工場との違いがきわだつ工程としては、羊毛に摩擦や振動をかけるさいに、工場ではこれを動力機械でおこなうが、牧民はラクダ(写真11)やウマ(写真12)の畜力で引かせるのである。



写真10 羊毛工場の作業台と輪転機（右奥）



写真11 ラクダで羊毛を転がして縮絨させる

社会主義期の工場と市場経済化期の工場の設備や技術はおおむね連続しているものと考えられる。また、牧民のフェルト生産と工業部門のフェルト生産も、違いは動力が人や家畜であるのか機械であるのかだけであり、羊毛を扱う順序や縮絨のプロセスなどは変わらない。



写真 12 ウマで羊毛を転がして縮重させる

## Ⅶ おわりに

このように、住居フェルトの生産は一貫して続いてきたが、その生産のありかたは国家の政治済体制の変化のもとで影響を受け、変わってきた。では、なにが、どう、変わり、なにが持続してきたのかをここでまとめておきたい。

まず、変化したのは、住居フェルトの生産方法、つまり手作業か、機械化か、である。つまり、ネグデル期以前は牧民の手作業による生産が主であったが、ネグデル期になると半機械化された工場での工業的な生産に移行した。そして、民主化直後は工場生産の減退にともない、一時的ではあるが、手作業による生産が需要に応えた。そして近年、再び工場製のフェルト生産が活発になり、生産の中心を担うようになったというわけである。

一方で、住居フェルトの生産においては時代を通して持続してきた諸要素がみいだせる。第一に、原料についてである。工場製の住居フェルトには羊毛以外の繊維が混ぜられることもあるが、住居フェルトの主要原材料は天然の羊毛であり続けてきた。第二に、20世紀以降の住居フェ

ルト生産は工場生産がメインであるが、牧民のあいだでは手作りの技術が、細い回路を通じてではあっても、継承されてきたようである。それが証拠に、国家の混乱期には牧民が住居フェルトを試行錯誤しながらも自作し、そのことが遊動的な牧畜生活をハード面で支える結果となった。第三に、住居フェルトのおおまかな仕様やデザインも長らく変わりがなかった。

以上からいえるのは、工業部門のフェルト生産と牧民のフェルト生産は相補的な関係にあるということである。既存の研究は、牧民のフェルト生産を伝統的で文化本質的なものとして時代状況や社会的な文脈と無関係に論じてきた側面があるが、本論は工場生産と牧民によるフェルト生産の両方に焦点を当てることで、両者の相補的な関係を明らかにした。

最後に、このような住居フェルト生産の変化と持続、そして工業製品と手作業の製品の補完性からうかがえる、現代モンゴル社会の特徴を検討したい。

一つめに、理念の側面、つまりフェルトをめぐるモンゴル国内の文化的イデオロギー、またフェルト製品をめぐるグローバルな視線について考慮する必要があるだろう。バトチョローンによれば、社会主義の公式イデオロギーは、民衆の生活のなかに埋めこまれたフェルト作りを「文化」としては過小評価してきた。このため、2000年以降、社会主義的な「文化観」に対抗して伝統的な「文化の復興」を産む意図でフェルトへの強い関心が集まった [Batchuluun 2009 (2000) : 21]。つまり、モンゴルにおけるフェルト工芸全般への新たな関心はモンゴルのナショナリズムとリンクしていたのである。このような文脈のなかで、2013年、「モンゴル・ゲルの伝統的職人技とそれに関連する慣習」がユネスコの無形文化遺産に登録された<sup>11)</sup>。このことは、フェルト生産をはじめとするゲルを生産する技術とそれともなう慣習が、モンゴル文化の重要な部分を担うという認識が国際社会において承認されたということの意味

<sup>11)</sup> 2014年に「キルギスとカザフのユルタ製造の伝統的な知識と技術」もユネスコの無形文化遺産に登録された。

する。ユネスコのホームページにはフェルト生産に関する紹介文や映像作品が掲載され [UNESCO 2013]、モンゴル国内でもフェルト生産に関するフォークロアや歴史、フェルト生産の技術に関する書籍が出版されている [Batchuluun 2000 (2009) ; Myagmar 2006]。これらは、フェルト生産がグローバルで標準化された文化項目のひとつと位置づけられると同時に、フェルト生産に関わる慣習や技術が記録・文字化され、ある意味では固定化される動きであるとみなすこともできるだろう。

二つめに、実践の側面、つまりモンゴル国においては現在も多くの人がゲルに住み続けていて、住居フェルトはモンゴルのローカルな住文化に支えられた実用品であるという点に着眼し、工場製と手製のフェルトの価値のもつれあいと併存のあり方を指摘したい。というのは、住居フェルトは、国家の経済体制の影響のもとで、その原材料となる羊毛の流通のあり方、フェルトの生産量、作り手、生産方法が変化してきたが、変化しながらも一貫して生産され続けてきたという事実がある。そのなかで、モンゴルのゲル居住者たちは、手製と工場製のフェルトを状況に合わせて使い分けてきた。たとえば、工場製のフェルト（写真 13）は軽いので移動の多い夏に使い、手製のフェルト（写真 14）は厚くて



写真 13 薄くて軽い工場製のフェルト



写真 14 厚くて暖かい手製のフェルト

暖かいので移動の少ない冬になったらその上に重ねるといった語りが多く聞かれた。他方で、「未熟に作った手製のフェルトよりも工場製の方が高品質で耐用年数が長い」[風戸 2015 : 123] と話す工業製品愛用者もいた。人びとは季節、ライフスタイル、好みなどに合わせて手製と工場製の住居フェルトをその時々によって価値づけ、使い分け、併用しているのである。つまり、モンゴルの人びとは国家の政治経済状況に合わせてその都度可能な技術を用いて住居フェルトを作り続けてきたし、また、新しい技術や製品を柔軟に選択して自らの生活の便宜を高めてきたのだといえる。

#### 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP23720425 「生産現場における人とモノの関係性みる社会主義経験の多様性と普遍性」(研究代表：風戸真理)、2011 年～2015 年(若手 B)の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Batchuluun, L.  
2009(2000) *Felt Art of the Mongols*. Bembi San.  
Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR  
1981 *1921-1981 National Economy of the MPR*.
- 加藤定子  
2002 『古代中央アジアにおける服飾史の研究——パジリク文化とノイン・ウラ古墳の古代服飾』東京堂出版。
- Kazato, Mari  
2011 Unique Technique of Felt Making in Mongolia using Ekhe Esgii (mother felt), *The 10th International Congress of Mongolists, International Association for Mongol studies*, August 9-13 (12) 2011, Ulaanbaatar, Mongolia.
- 風戸真理  
2011-a 「母フェルトがはぐくむフェルト1: モンゴル国ドンドゴビ県の住居フェルト作り」『染織情報α』9月号: 2-3。  
2011-b 「母フェルトがはぐくむフェルト2: モンゴル国ザブハン県の住居フェルト作り」『染織情報α』染織と生活社、11月号: 4-5。  
2012 「母フェルトがはぐくむフェルト3: 母フェルトとは何か」『染織情報α』1月号: 4-5。  
2015 「時空を超えて暮らしを包む住居: モンゴル・ゲルのフレキシビリティ」佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳(編)『世界の手触り—フィールド哲学入門』pp.109-127、ナカニシヤ出版。
- 松川節  
1998 「移動と定住のはざままで」佐藤浩司(編)『住まいをつむぐ』pp.196-214、学芸出版社。
- モンゴル科学アカデミー歴史研究所(編)  
1988(1969) 『モンゴル史1・2』二木博史・今泉博・岡田和行訳、田中克彦監修、恒文社。
- Mongolian National Standards  
2008 *MNS 0296 : 2008 Mongol Geriin esgii*.
- National Statistical Office of Mongolia  
1994 *Mongolian Statistical Yearbook 1993*.  
1998 *Mongolian Statistical Yearbook 1997*.  
1999 *Mongolian Statistical Yearbook 2008*.  
2001 *Mongolian Statistical Yearbook 2000*.  
2002 *Mongolian Statistical Yearbook 2001*.  
2005 *Mongolian Statistical Yearbook 2004*.  
2008 *Mongolian Statistical Yearbook 2007*.  
2010 *Mongolian Statistical Yearbook 2009*.  
2013 *Mongolian Statistical Yearbook 2012*.
- Myagmar, G.  
2006 *Mongolyn Esgii, Esgii Edleliin Uusel, Hogjil*. Bitpress HHK.

Rona Tas, A.

1963 Felt-Making in Mongolia. *Acta Orientalia* XVI : 199-215, Academiae Scientiarum Hungaricae, Budapest.

Sampildende, H.

1985 *Malchin Ardyn Zan Uiliin Ulamjal*. Ulaanbaatar.

State Statistical Office of Mongolia

1996 *Agriculture in Mongolia 1971-1995, A Statistical Profile*. Ulaanbaatar.

Undesnii Tov Arhivyn Barimtyн Hailт

2015 M-3/1/733, A-33/1/606 (<http://202.179.8.163/uta>) .

USG (Undesnii Statistikiin Gazar)

1993 *1992 Ony Mal Toollogo*.

1996 *1995 Ony Mal Toollogo*.

UNESCO

2013 *Traditional craftsmanship of the Mongol Ger and its associated customs*. (<http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?lg=en&pg=00011&RL=00872>).

楊海英

1996 「モンゴルにおけるフェルト造り—方法論と儀礼性を中心に」『繊維製品消費科学』37(5) : 14-23。

1999 「モンゴルのフェルト作り—『母』から『娘』へ—」鈴木清史・山本誠(編)『装いの人類学』人文書院。



---

---

# 近現代モンゴルにおける畜産物利用の変化 —乳・乳製品の域外販売と域内消費に着目して—

富田 敬大

(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構)

## I はじめに

現代のモンゴル国に相当する地域で 20 世紀に行なわれた二つの大きな変革、すなわち、社会主義化と民主化が、そこで営まれる牧畜にどのような変化をもたらしたのか。この問いに対して、国内外の研究者がさまざまな角度から議論を展開してきた。なかでも、1999 年にデイビッド・スニースが発表した二重の生産様式 (dual productive modes) をめぐる論文 [Sneath 1999] が広く知られている。スニースは、革命以前のモンゴルにおいて、家畜の増産を目指して特定の種類の大規模家畜群を飼育する「収益追求的な (yield-focused)」または「専門的な (specialist)」ものから、衣食住など家庭内の需要を満たすために多種類少数の家畜群を維持する「生業的な (subsistence)」ものまで、さまざまなタイプの牧畜があったと考えた。そして、この二つの対照的な生産様式の比重の違いとして、社会主義化、民主化による牧畜社会の変化を説明した。彼の議論を単純化して示せば、社会主義時代 (特に牧畜の集団化が完了した 1950 年代後半以降) には、革命以前に封建領主や寺院のもとで行なわれていた収益追求的な (専門的な) 生産様式が、すべての牧民と大多数の家畜を覆い尽くすほどに拡大した。これに対し、民主化後は、協同組合が解体され、個別世帯による牧畜経営が中心になるなかで、より生業的な生産様式が強まるだろうと結論づけている。

スニースの議論は、伝統・社会主義・現在という旧ソ連および旧社会主義諸国が経験した歴史的な変化 [高倉 2008 : 6] を、牧畜社会の内的

論理を通じて、つまり二つの生産様式の比重の違いとして描いた点で重要である。もちろん、現実はそのほど単純ではなく、社会主義が単純な過去の復元ではなかったことや [尾崎 2010 : 152-153]、市場経済への移行期を経て、現在はむしろポスト移行期というべき状況にあることなど [小長谷 2010 : 66]、スニースが提起した理論モデルの再考をうながす、いくつかの重要な指摘がなされている。

しかし、スニースをはじめ、これまでの検討の中心はあくまで肉（家畜生体）の生産であって、変容のモデル化に乳や毛の生産が十分に反映されてきたとはいえない。社会主義時代には、毛や乳などそれまで家庭内の需要にあてられることの多かった畜産物が、食品・工業原料として地域外に向けて生産されるようになったにもかかわらず、である。そこで、本論文では、20世紀の社会経済変動（農牧業の集団化および脱集団化、都市・工業開発など）のもとで、畜産物の生産、消費、流通が、どのように変化したのかを、乳・乳製品に焦点を当てて明らかにすることを目的とする。ここでは、社会主義化と民主化による影響を、乳・乳製品の域外販売と域内消費の関係に着目して検討を行なうことで、モンゴル牧畜社会の変容を新たな視座から理解することを目指す。

本論文で用いる資料は主に、ボルガン県オルホン郡（2008年11月から2015年3月）およびセレンゲ郡（2012年12月から2014年8月）で断続的に行なった調査により得られたものである。調査方法は、聞き取りを中心としながら、必要に応じて直接観察も実施した。さらに国立中央文書館（2011年10月、2015年10月）およびボルガン県庁公文書室（2011年12月、2012年12月）において、社会主義時代（とくに集団化期）の行政文書や統計資料などの文献資料の収集も行なった。

本論文は、以下の四つの部分から構成される。まず、モンゴルにおける乳文化の特徴を説明する。次に、社会主義時代の乳・乳製品の生産と流通の実態を、資料分析の結果明らかになった情報と人びとの語りをつき合わせて検討する。そして、社会主義崩壊後、乳・乳製品の生産と流通がどのように再編されつつあるのかを、牧民への聞き取りと直接観察により得られたデータをもとに考察する。そのうえで最後に、モンゴル

における乳・乳製品の生産および流通の変容と、そこにおける域外販売と域内消費の関係について議論を行なう。

## II モンゴルにおける乳利用の文化

牧畜民にとって、乳・乳製品は、肉と並んで重要な食料資源である。モンゴルにおいても、「白い食べもの」と総称される乳製品類と、「赤い食べもの」と総称される肉類が二大食品として食生活を支えてきた。搾乳がピークを迎える夏には、乳が盛んに加工され、新鮮な乳製品が食卓に並ぶ。一方、冬には、秋までに太らせた家畜が屠られ、肉が多く食べられるようになる。もっとも、ここでいう乳と肉の季節的な食べ分けとは、あくまで比重の違い程度のものであって、夏に肉、あるいは冬に乳製品を食べないというわけではまったくない。冬・春にも、秋に保存食としてつくっておいた乳製品が食べられる。

世界の牧畜民のなかでモンゴルほど多様な乳製品をつくる民族はいない [小長谷 1992 : 218] といわれるほど、モンゴルの人びとは複雑な乳加工技術をもっている。乳にはさまざまなミネラルや栄養素が含まれるが、水以外の主な成分として、乳脂肪、乳たんぱく質、乳糖があげられる。モンゴルの乳加工はこの三つの栄養素を順次分離する方式 [小長谷 1997 : 130] をとっている。ヒツジ・ヤギ・ウシの乳の場合、最初に生乳から乳脂肪を取り出したあと、残った脱脂乳を乳酸発酵させてたんぱく質を凝固させたり、乳糖を発酵させてアルコールに変えたりするのが一般的だ<sup>1)</sup>。モンゴルでは、これらの工程が柔軟に組み合わせられることによって、複雑な乳加工体系がつくり出されている。その根底にあるのは、乳を完全に利用するという思想である。

歴史的にみて、ユーラシアに広く展開したモンゴルは、さまざまな技術を取り入れながら、乳加工技術体系をつくりあげていったと考えられ

<sup>1)</sup> ウマの乳の成分は他の家畜種に比べて、乳糖が多く、脂肪は少ない。そのため、ウマの乳は、脱脂処理を経ることなく、攪拌して乳酸発酵を進めて（乳糖からアルコールがつくれる）、馬乳酒にする [小長谷 2005 : 111-112]。

るが、その変化のプロセスを明らかにすることは容易ではない<sup>2)</sup>。乳・乳製品利用の歴史的変化の解明には、現在の状況から類推するほかに、文献や図像のなかに断片的に存在する情報を収集し、それらを相互に検討する方法、土器や土器に付着した有機物を分析する方法などが考えられる [平田 2013 : 24-30]。いずれの方法をとるにせよ、現物が残っていない以上、地域差の大きい乳製品を比較し同定するだけでも、きわめて困難な作業となるはずだ。今後この方面での研究の進展に期待しつつ、ここでは、革命以前から現代にかけての乳利用の変化として、ごく簡単に三点を指摘するにとどめる。

第一に、現在主要な搾乳対象となっているのはウシであるが、かつての搾乳の中心は、ウシよりもヒツジであった可能性が高い<sup>3)</sup>。地域差はあるだろうが、ウシが搾乳の主たる対象となったのは社会主義時代以降であったと考えられる [小長谷 2005 : 110]。

第二に、搾乳の中心がヒツジとヤギから泌乳量の多いウシに変わったことで大量に処理しなければならなくなったことや、小麦など他の食材が普及したことで保存食としての乳の位置が相対的に低下するなかで [小長谷 2005 : 122]、乳加工技術が単純化していく傾向にある。

そして第三に、鮮度が重要であり、かつローカルフードとしての性格が強い乳・乳製品は、少なくとも革命以前には基本的に家庭内での自足的な消費の対象であったと考えられる。自身も牧民として育ち、農牧業協同組合の建設に尽力したレンチンギーン・ミンジュールは、小長谷が行なった聞き取りのなかで、1920年代のアルハンガイ県では乳製品を外部に販売するための市場はなく（そもそも中国人商人は、モンゴル人

---

<sup>2)</sup> 松原 (1992) は、フィールドデータと文献に残された情報を組み合わせて、トルコ系牧畜民ユルククの乳加工技術の変遷を、モンゴル・トルコ系の牧畜民の歴史的展開と関連付けながら議論している。

<sup>3)</sup> 革命以前の家畜利用については不明な点が多い。チンギス・カン時代の首都のひとつであったと考えられるアウラガ遺跡では、近年の発掘調査によりウシやウマといった大型獣がかなりの高率で利用されていたことが分かった [白石 2015 : 193]。大型獣の利用は、宮廷行事や宗教儀式との関連もあることから、この事実が庶民の食生活をどの程度反映していたのかは議論が分かるところであり、今後の研究が俟たれる。

がつくった乳製品を食べなかったという)、自分たちで食べるためだけに乳製品をつくっていたと回想している [小長谷 2013 : 13]。もっとも、このような限られた資料だけで、革命以前の乳・乳製品の生産と流通の実態を明らかにすることは困難である。

重要なことは、社会主義による近代化が、こうした乳利用の変化をうながす契機となったという点である。社会主義時代の乳製品生産について、次項で詳しくみていくことにしたい。

### Ⅲ 社会主義時代の乳・乳製品の生産と流通

#### 1 社会主義下の牧畜開発：乳・乳製品を中心に

肉や毛・皮革、乳など畜産品の国家調達が始まったのは 1940 年代初めである。ソ連との同盟関係にもとづき、第二次世界大戦に参戦したモンゴルは、国家経済のあらゆる部門を戦争目的に再編した<sup>4)</sup>。工業方式での乳製品加工がはじまったのもちょうどこの頃で、全国にバター製造網が形成された。政府は、1940 年にバター<sup>5)</sup>を生産するザボード (*zavod*) とよばれる組織を 82 カ所、その下部組織として生乳の集荷、加工を行なうスーニー・タサグ (*süünii tasag*) とよばれる組織を 200 カ所ほど設置し、初年度にはおよそ 264 t のバターを生産した [ダムディンスレン 2014 : 76]<sup>6)</sup>。同年には、ソ連による援助のもと、ウランバートルに先進国型の保存・加工施設を備えた近代的な乳加工工場 (スーニー・ウィルドウェル) がはじめて建設された。さらに、1942 年にはボルガン県をはじめとする 10 の県中心地で食品コンビナートが操業を開始した。

<sup>4)</sup> それまで、モンゴルには畜産品を義務的に供出する制度はなかったが、1941 年に毛を納入させる法律、1944 年には家畜を納入する法律が相次いで制定された。

<sup>5)</sup> バターは、ツツギー・トス (*tsötsгий tos*) ないしはロシア語からの借用でマスロー (*maslo*) とよばれる。モンゴルでは、社会主義時代に入ってから、ソ連の影響のもとバターがつくられるようになったと考えられる。

<sup>6)</sup> 『モンゴル史』では、1941 年時点で、92 のザボードが操業し、282t のバターを生産したとあり、数値に若干の違いがみられる [モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) : 15]。

その結果、バター生産量は、年々増加し、1948年には3888.0t、1950年のピーク時には5182.6tのバターを生産した〔前掲書：77-78〕。モンゴルの食品工業（乳製品分野）の専門家であるロブサンスレンギーン・ダムディンスレンは、『乳・乳製品の科学とテクノロジー』（2014）のなかで、このようにきわめて短期間にバター生産の集約化がなされた要因として、戦時下というきわめて困難な状況のなかで、国内の食品産業を振興するインセンティブが強く働いたこと<sup>7)</sup>、家畜所有者から乳を調達する制度が強い法的拘束力をもって機能していたことを指摘している。

戦後、バター生産を核として乳生産が急速に発展したモンゴルであったが、協同組合化が完了した1950年代末以降、バターの生産量は緩やかに減少し、1970年には2995.2tとピーク時のおよそ5分の3にまで低下した。これにはいくつか理由が考えられる。まず、1950年代半ばから協同組合員の私有家畜に対する畜産品の供出義務の緩和がなされ、1959年に乳の供出義務が撤廃されたことで、全体として乳の収量が減った。次に、1962年のコメコン（経済相互援助会議）加盟などにより輸出産品としての肉や毛の重要性が高まるなか、家畜頭数の増加を優先するようになり、家畜の成長に悪影響をおよぼす恐れのある過剰な乳利用が抑制されるようになったことである。

一方、都市インフラの整備や工業化が進められたことで、ウランバートルを中心に都市人口が急激に増加し、都市部への食料供給が大きな課題となった<sup>8)</sup>。乳・乳製品も例外ではなく、1960年代半ばから、主に農業部門を担当した国营農場（サンギーン・アジ・アホイ）で、首都圏を中心に機械化した酪農場が設立され、ウランバートルやダルハン、エルデネット、チョイバルサンといった主要都市に牛乳を供給するようになった〔小宮山2006：91-92〕。1970年代に入ると、先進国型の保存・加工施

<sup>7)</sup> バターは、ソ連から来た労働者や技術者、都市住民を中心に広まっていたものと考えられる。1940年に政府が外国からのバターの輸入を停止したことで〔モンゴル科学アカデミー歴史研究所1988（1969）：15〕、国内の需要を自国でまかなう必要が生じた。

<sup>8)</sup> 1956年（11万8387人）から1963年（22万3695人）にかけて都市人口が2.2倍に増加し〔小宮山2006：89〕、この傾向は現在に至るまで続いている。

設を備えた乳加工工場が、ウランバートル以外の都市や県中心地にも次々とつくられていった<sup>9)</sup>。

こうした動きは、地方にも波及し、低迷する乳生産の立て直しがはかられた。それまで軽工業・食品工業省の指導のもと、県中心の食品コンビナートで行なっていた乳製品（主にバター）の加工が、1972年から73年に、農牧業省の管轄となり、主に牧畜部門を担当した農牧業協同組合（ネグデル）が、家畜の飼育、搾乳、乳の集荷、加工までを一括して行なうようになった。こうした背景には、乳の生産と加工を同一の組織がなうことで、生産性の向上と責任の強化をはかるという政府のねらいがあったと考えられる。政府は、報奨制度の導入や乳の買い取り価格の上昇などにより牧民の生産意欲の向上をはかる一方で、1970年代末からふたたび個人所有の家畜に対して乳の供出義務を課すなど牧民への締め付けを強めた。このいわば「アメとムチ」の政策によって、バターの生産量は次第に増加し、1990年には1950年のピーク時に近い水準まで回復した。

以上のように、社会主義時代のモンゴルでは、畜産業としての乳製品の生産流通は、1940年から1991年まで大部分が国家に独占されてきた。1950年代後半以降は、旧ソ連のソフホーズとコルホーズに相当する国营農場と農牧業協同組合が、乳生産をになった。国营農場には、機械化された酪農場が新たにもうけられ、ホルスタイン種やシンメンタール種、カザフ産のアラタウ（*alatau*）種などの純血種や交雑種の乳牛を飼育し、都市に牛乳を供給した。都市の近代的な保存・加工設備を備えた乳加工工場では、バターや伝統的な乳製品のほかに、飲用乳や粉ミルクなどがつくられた。これに対し、農牧業協同組合では、ザボードとその下部組織であるスーニー・タサグのもとに遊牧民を再組織化し、乳生産を行なった。1970年代初頭からは、農牧業協同組合が、家畜の飼育、搾乳、乳の集荷、加工を一括して行なうようになった。農牧業協同組合のなかには、小規模ながら乳製品生産所（モンゴル・ツァガン・イ

<sup>9)</sup> 1990年には、国内の乳生産の半分近くをこれら近代的な乳加工工場が占めるようになったという [ダムディンスレン 2014: 63]。

デーニー・ウィルドウェル) がもうけられたところもあった<sup>10)</sup>。以下では、このうち、農牧業協同組合による乳・乳製品の生産・流通を取り上げる。

## 2 統計から把握される乳生産の特徴

農牧業協同組合のもとの乳生産の具体的な様相をみる前に、畜産物としての乳製品の特徴を説明しておきたい。モンゴルでは、1962年コメコン加盟以降、他の社会主義諸国に対する食品・工業原料としての畜産品の輸出がより一層拡大した。肉、毛・皮革、乳などの輸出量をめぐっては、参照する統計データによって数値にばらつきがあるものの、少なくとも1960年代以降、こと畜産物に関する限り、肉および毛が主要な輸出品であったことは間違いないだろう。比較的まとまったデータがある『コメコン諸国統計年鑑』を参考にすると、肉とその加工品の輸出量は、1980年代初頭をピークに減少に転じるものの、概ね右肩上がりに増加してきた。羊毛や皮革の輸出量には大きな変動は認められず、一定量を安定して輸出していた。これに対し、乳製品(特にバター)は、1960年代初頭をピークに急激に減少し、1973年以降は輸出量が記載されていない。乳製品の輸出そのものがなくなったわけではないはずだが<sup>11)</sup>、輸出量は大幅に低下したことが統計の数値から推測される。つまり、社会主義時代を通じて、肉や毛が主要な輸出品であったのに対して、乳・乳製品はどちらかという国内の食料需要にあてられる傾向が強かった。

ここで素朴な疑問として、農牧業協同組合では、一年にどのくらいの畜産物を生産していたのか、またそのなかで乳・乳製品はどのくらいの

---

<sup>10)</sup> アルハンガイ県イフタミル郡、ウブルハンガイ県ホジルト郡などの乳製品生産所が全国的に有名であった。

<sup>11)</sup> モンゴルにおける乳製品の輸出量の推移については、残念ながら資料の不足により不明である。おそらくカゼインは外国へ輸出するために生産されていたのではないだろうか。ダムディンスレンは、1980年代末頃にカゼインが東南アジア諸国や日本に輸出されていたと指摘している [ダムディンスレン 2014: 72]。

表1 畜産物の生産量（1983年）

郡名	肉類		毛類		乳		乳製品	
バヤンアクト	1412.4 t	3,696,400₮	92.5 t	653,400₮	637.3 t	173,000₮	49.2 t	553,900₮
ボガト	1022.9 t	2,045,400₮	37.3 t	148,100₮	611.8 t	469,500₮	23.4 t	245,400₮
ブレグハンガイ	1310.7 t	2,487,200₮	70.4 t	573,700₮	918.9 t	158,500₮	55.7 t	641,900₮
ゴルワンボラダ	1328.7 t	2,608,900₮	116.8 t	548,800₮	723.3 t	363,800₮	47.1 t	517,800₮
ダシンチレン	1585.5 t	3,087,200₮	97.4 t	583,300₮	647.5 t	335,400₮	56.9 t	615,700₮
モゴト	1617.8 t	4,023,700₮	109.6 t	566,900₮	918.4 t	489,000₮	70.3 t	696,400₮
オルホン	1498.0 t	3,437,400₮	102.0 t	1,191,100₮	986.9 t	550,100₮	63.7 t	714,800₮
サイハン	1508.9 t	3,388,900₮	78.5 t	457,600₮	572.5 t	436,000₮	28.3 t	306,000₮
テシグ	1195.8 t	2,642,700₮	30.5 t	175,500₮	1219.8 t	558,600₮	97.6 t	1,071,100₮
ハンガル	818.8 t	1,953,300₮	35.3 t	173,200₮	600.5 t	364,000₮	33.9 t	480,100₮
ヒシグウンドゥル	1039.3 t	2,328,700₮	60.1 t	374,900₮	601.3 t	385,000₮	40.4 t	437,900₮

出典：注12を参照

割合を占めていたのであろうか。以下では、これらの点を、ボルガン県の事例をもとに考えてみることにしたい。

国立中央文書館に所蔵されている農牧業協同組合関連の統計資料<sup>12)</sup>にもとづき、1983年のボルガン県内の11の郡（すべて農牧業協同組合）における畜産物の生産量をまとめたものが表1である。

いずれの農牧業協同組合でも、肉（家畜生体）の生産が収入の大半を占め、次いで、毛、乳の順となっている。ここで注意すべき点は、乳の多くが、乳製品の加工に回されていたことである。金額ベースでみると、この乳製品による収入は、毛に匹敵するかまたはそれを上回るものであり、1970年代以降の乳製品生産の振興策の成果だと考えられる。

それぞれの畜産物について、もう少し詳しく検討してみる。表2は、肉類および毛類の生産額を主な品目別にまとめたものだ。まず、肉類の内訳をみると、ヒツジとウシによる収入がほとんどを占めているのが分かるが、これはヒツジとウシの増加を重視した第3次五カ年計画以降の牧畜政策を反映している。ただし例外的に、サイハン郡やモゴト郡といった馬乳酒の生産が盛んな地域では、ウマの販売が多い。次に、毛類においては、羊毛とカシミアによる収入が中心であった。このうち、オルホン郡は、毛用に品種改良したハンガイ (*khangai*) 種のヒツジの飼

<sup>12)</sup> 出典は、モンゴル国立中央文書館での農牧業協同組合連合協議会保管文書『ボルガン県の農牧業協同組合の1983年決算総括』(X.356 Ⅱ.2 XH.492)。

表2 肉類・毛類の主要品目別生産額（1983年）

郡名	肉類				毛類		
	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	羊毛	カシミア	大家畜の毛類
バヤンアクト	125,100円	1,115,500円	2,176,400円	267,300円	449,700円	188,000円	12,600円
ボガト	25,000円	1,060,700円	868,400円	38,900円	104,500円	33,000円	9,900円
ブレグハンガイ	82,200円	1,254,200円	936,700円	165,500円	402,200円	159,900円	10,100円
ゴルワンボラグ	237,600円	814,600円	1,413,900円	109,700円	370,900円	153,200円	22,100円
ダシンチレン	118,600円	1,262,000円	1,468,000円	193,600円	402,500円	159,800円	19,000円
モゴド	1,145,700円	1,233,200円	1,455,300円	171,000円	378,500円	162,900円	22,600円
オルホン	159,700円	1,450,300円	1,597,000円	183,900円	1,053,300円	120,000円	15,700円
サイハン	419,700円	1,189,600円	1,570,800円	164,000円	288,100円	140,100円	27,400円
テシグ	89,100円	1,734,500円	666,400円	137,500円	81,500円	80,100円	12,400円
ハンガル	66,900円	1,077,200円	721,100円	70,000円	99,200円	63,800円	9,300円
ヒシグウンドゥル	246,100円	1,134,700円	899,300円	43,600円	290,800円	65,500円	18,000円

出典：注12を参照

表3 乳・乳製品の品目別生産量（1983年）

郡名	乳				乳製品	
	ウシの乳	馬乳(酒)	ヒツジの乳	ヤギの乳	バター	カゼイン
バヤンアクト	609.0 t	13.1 t	13.0 t	2.2 t	30.5 t	12.3 t
ボガト	558.8 t	53.0 t			15.3 t	8.1 t
ブレグハンガイ	872.1 t	31.8 t		15.0 t	38.3 t	17.2 t
ゴルワンボラグ	672.2 t	48.2 t	2.0 t	0.9 t	31.6 t	14.3 t
ダシンチレン	615.5 t	13.5 t	8.5 t	10.0 t	35.5 t	18.5 t
モゴド	763.8 t	136.4 t	9.0 t	9.2 t	40.9 t	22.2 t
オルホン	758.2 t	197.6 t	31.1 t		41.1 t	19.2 t
サイハン	425.3 t	104.0 t	25.9 t	17.3 t	20.3 t	8.0 t
テシグ	1212.9 t	0.9 t	2.0 t	4.0 t	59.4 t	33.5 t
ハンガル	554.9 t	45.6 t			26.2 t	7.7 t

出典：注12を参照

育に積極的に取り組み、羊毛からより多くの収入を得ていた。

一方、乳・乳製品の生産は、やや複雑である。はじめに確認しておきたいことは、ボルガン県では、四種類の家畜すべてを搾乳していたということだ。表3からも分かるように、大部分を占めたのは牛乳だが、他の家畜の乳も利用していた。ただし、ウシ以外の乳利用には地域差がみられる。ウマの乳の利用は、現在も馬乳酒の産地として有名なサイハン郡やモゴト郡などで多かった。また、ヒツジやヤギの乳は、少なくとも公的には利用していない農牧業協同組合がいくつかあった。

つまり、農牧業協同組合における乳製品収入の中心はあくまで、牛乳

からつくられるバターであり、次いで脱脂乳を加工してつくるカゼインであった<sup>13)</sup>。これらはともに国家調達にあてられ、郡内で消費されることはほとんどなかった。また、表にはないが、農牧業協同組合では、ウルム (*öröm*) やアールール (*aaruul*) といった伝統的な乳製品もつくられていた。バターに比べて生産量は少なく、郡内での消費にあてられていたようだ。

### 3 乳・乳製品の生産と流通の実態

では引き続き、農牧業協同組合による乳生産をより詳しくみていくことにしたい。以下で取り上げる資料は、ボルガン県オルホン郡 (旧チョイバルサン農牧業協同組合) に関する行政文書および統計資料と、元組合員への聞き取りにもとづくものである。

#### (1) ウシ群の管理と畜産物利用

農牧業協同組合において、ウシの飼育、搾乳、乳の集荷、加工は、どのように行なわれていたのであろうか。農牧業協同組合が所有する共有家畜は、種、性、年齢などに応じて細かく分けられ、各群をソーリ (*suuri*) とよばれるグループが管理し、畜産物を生産した。これらは、家畜群を均質な群れに分けて管理することで、少ない労働力で多数の個体を飼育することを目指すものであり [風戸 2009: 204]、革命以前に寺院や封建諸侯など大規模家畜所有者のもとで用いられた飼育方法とも重なる部分が多い [Sneath 1999: 225-232]。

ウシは、性・成熟度により、五つの群れに分けられた。具体的には、(1) 出産するメス (出生後3年以上) と当歳仔 (0~1年)、(2) 二歳オス (1~2年)、(3) 二歳メス (1~2年)、(4) 三歳メス (2~3年)、(5) 種オス (3、4年以上) である。(2) 二歳オスは、原則として三歳 (出生後3年以上) になる春に肉用に出荷された。肉の供出ノルマを達成した場合

<sup>13)</sup> 表3のように、馬乳酒は、乳製品のカテゴリーに含まれてはいない。馬乳酒の生産が盛んな地域 (モゴト郡やサイハン郡、オルホン郡など) では、馬乳酒による収入がバターに次いで多かった。

には、三歳以上飼育することがあったが、群れが常につくられるわけではなかったようだ。

調査結果を総合すると、(1) 出産メスウシとその仔を担当する牧民は、乳加工を行なう作業員らとともに、スーニー・タサグとよばれるグループを組織し、おおむね5月から9月にかけて搾乳および乳加工を行っていたようだ。期間中、(5) 種オスウシを群れに入れて種付けさせた。11月になると、タサグごとに、冬・春の宿営地に移動し、出産と仔畜の育成に取り組んだ。翌春、二歳に達した仔畜は、(1) 出産メスウシの群れから分離し、オス・メス別々に分けて飼育する。(2) 二歳オスウシは、一年ほど飼育した後、トーバルとよばれる家畜を放牧し肥育しながら輸送する作業を担当する組織に引き渡し、半年ほどかけて都市に運ばれた。一方、二歳メスウシは、二年間飼育した後に、(2) 出産メスウシの群れに入れられた。オルホン郡では、(3) 二歳メスウシと (4) 三歳メスウシの群れを分けて管理していたが、それは妊娠可能な三歳メスウシに種付けをさせて、搾乳可能な（すなわち、妊娠ないし出産した）状態で、出産メスウシの群れに入れるためであった。

ウシの飼育方法は、場所や時期によって多少異なるが、基本的には以上のようなサイクルで行なわれた。肉として利用されるオスは、若い時点で出荷されたのに対し、メスは、出産と仔畜の育成率を向上し、できるだけ長期間搾乳できるようにしていた。年老いた家畜は、群れから取り出され、食肉として主に郡内で消費された。屠畜の対象は、種オスは5年以上種付け作業に利用した個体、メスは8~10頭出産した個体（ただし、老いてもまだまだ妊娠可能なメスは残しておく）というのが、おおよその目安であった。

## (2) 乳生産の労働組織

農牧業協同組合において、牛乳の生産およびバターなど乳製品の加工をになったのが、ザボードとその下部組織のスーニー・タサグであったことは、すでに述べたとおりだが、その活動内容は時期によって異なる。なかでも大きな転機となったのが、1972年に農牧業協同組合がウシの

飼育、搾乳から、乳の集荷、加工までを一括して行なうようになったことである。

オルホン郡は、五つの行政区からなり、このうち郡中心地にあたる第5行政区を除き、第1～4までのすべての行政区にスーニー・タサグが組織された。1972年時点で、スーニー・タサグの数は、第1行政区は4(搾乳者28人)、第2行政区は2(搾乳者12人)、第3行政区は1(搾乳者7人)、第4行政区は2(搾乳者14人)であった<sup>14)</sup>。第1行政区でスーニー・タサグの数が多いいのは、在来種の外にアラタウ種との交雑種を飼育するなど、ウシ飼育に重点的に取り組んでいたことと関係している。これに対し、第3行政区では、毛用のハンガイ種のヒツジの飼育が中心であったため、他の行政区に比べて数が少ない。スーニー・タサグには、6～7人の搾乳者がおり、それぞれがメスウシの飼育と搾乳を担当した。搾乳者一人当たり割り当てられるメスウシの頭数は、年齢や経験によって異なるが<sup>15)</sup>、おおむね十数頭程度であったと考えられる。

搾乳者は、朝夕2回搾乳を行なう。一頭当たりの搾乳ノルマは、成熟度や妊娠の有無などに応じて細かく設定されていた。搾乳した乳はすぐにタサグへと送られた<sup>16)</sup>。タサグでは、専門の作業員が手動の遠心分離機 (*süüniü mashin*) を使って、生乳をクリームであるツツギー (*tsötsgii*) と脱脂乳であるシンゲン・スー (*shingen süü*) に分けた。このうち、半完成品であるツツギーを行政区の中心地にあるザボードでバターに加工した。バターは、脱脂乳から抽出したカゼイン (*eedemtsel*) とともに、輸送拠点となるボルガン市に運ばれた。

<sup>14)</sup> 出典は、モンゴル国立中央文書館の農牧業省保管文書『ボルガン県オルホン郡チョイバルサン農牧業協同組合において組織するモンゴル乳製品生産所および乳生産の状況について』(X.15 Д.3 XH.234)。

<sup>15)</sup> 搾乳者一人当たり割り当てられる頭数は、最も多い者で21頭、最も少ない者で6頭と差があった(出典：注14を参照)。

<sup>16)</sup> 1970年代末から個人所有の家畜に乳の供出ノルマ(メスウシ一頭当たり100ℓ)が課されるようになった。家畜所有者は自ら搾乳した乳を、スーニー・タサグのもとに運んだ。バター生産期間中にノルマを達成できなかった者は、冬に凍らせた乳や乳製品により補填しなければならなかったという。

### (3) 乳生産組織の変遷

オルホン郡では、1971年以前はウシの飼育と搾乳のみを行ない、バターなどへの加工は隣接するボルガン市の食品コンビナートで行なっていた。ところが、1972年に農牧業協同組合がウシの飼育、搾乳から、乳の集荷、加工までを一括してになうようになり、このザボードとスーニー・タサグからなるネットワークがつけられたのである。

しかし、このようなやり方は、1980年代初頭に、郡の中心地に乳製品生産所が建設されたことで、大きく変わる。それまでのように行政区でバターに加工することはなくなり、1971年以前と同様にスーニー・タサグでは搾乳と牛乳の集荷だけを行なうようになった(図1)。GAZ53という集乳車が、毎日朝夕2回スーニー・タサグのもとにやってきて牛乳を集荷し、郡中心地にある乳製品生産所に届けた。生産所では、牛乳をバターやカゼインなどに加工し、都市へと搬出したという<sup>17)</sup>。

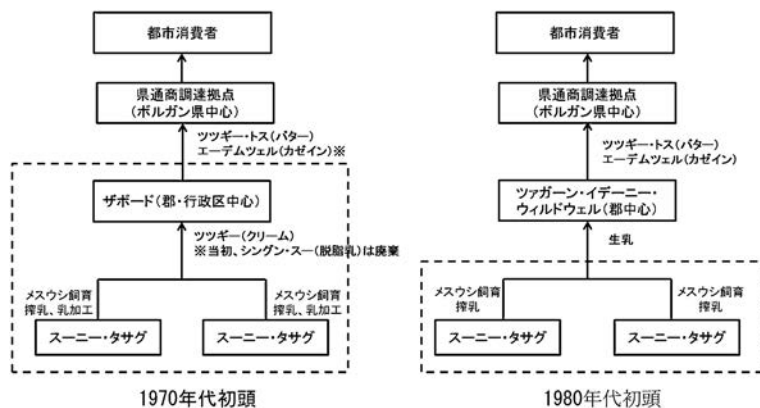


図1 オルホン郡における乳生産組織および流通経路

<sup>17)</sup> こうした牛乳の集荷・加工ネットワークは、同時期にウブルハンガイ県ブルド郡でフィールドワークを行なった小貫(2000)の報告のなかにもみられる。

#### 4 乳加工技術からみた乳生産の特徴

農牧業協同組合では、メスウシから得られる乳の多くを、バターやカゼインに加工していたが、無論、モンゴルの伝統的な乳製品づくりが行なわれなくなったわけではない。バターやカゼインが、地域外で販売するためにつくられたのに対して、ウルムやアーロールなどの乳製品は、地域内での消費にあてられる傾向にあった。以下では、農牧業協同組合のもとでの乳加工の全体像とその特徴を、具体的に示す。

##### (1) 乳加工作業の季節サイクル

5月から9月にかけては、国家調達のためのバターづくりが行なわれた。スーニー・タサグに集められた乳は、まず十分に温めたあと、手動の遠心分離機にかけられた。抽出したツツギー（クリーム）は、加熱消毒したあと冷水でさまし、ザボードの拠点がある郡または行政区の中心に運ばれた。ここで、ツツギーを回転式のチャーン（*tos tsokhigch*）を使って攪拌し、バターに加工した。バターは100kgごとに木箱に詰めて輸送した。一方、ツツギーを抽出した後のシンゲン・スー（脱脂乳）からは、工業原料となるカゼインがつくられた。カゼインは、シンゲン・スーを酸により凝固したのち乾燥させてつくったと考えられるが、残念ながら、詳しいことは分らない。

オルホン郡では、バター生産を開始した1972年当初、バターを加工した時に分離する脱脂乳をうまく活用できていなかったことが、当時の資料から確認できる<sup>18)</sup>。元組合員に話を聞くと、当初はシンゲン・スーの多くが廃棄されていたようだ。なかには、不要になったシンゲン・スーを持って帰って、自家消費用の乳製品づくりに用いるものもいたそうだが、大部分は使い道のないままであった。その後、1970年代半ばごろから、カゼインに加工されるようになった。しかし、バター製造時に大量に出るシンゲン・スーをすべて加工するには至らなかった。当時

<sup>18)</sup> 注14の資料のほか、ボルガン県庁公文書室のオルホン郡・チョイバルサン農牧業協同組合保管文書『チョイバルサン農牧業協同組合会議資料』（X.31 Д.1 XH.32）。

を知る人の話では、せいぜい半分ほどであったという。仕方ないので郡中心地では、余ったシンゲン・スーをブタのエサに混ぜて与えていた。バター生産の終了後、10月以降は、郡内で消費する牛乳・乳製品の生産を行なった。この頃にはスーニー・タサグを解散しており、出産メスウシを担当する牧民たちはタサグごとに宿営していた。この秋から春にかけても、牧民たちには搾乳ノルマが課された。気温はすでに氷点下を下回っており、牛乳は凍らせた状態で、郡中心地に運ぶことができた。また、生乳のまま出荷する以外にも、例えば、第二行政区では、10～11月の二ヶ月間で、牛乳およそ30000ℓ分のウルム、ツァガー (*tsagaa*)、アールツ (*aarts*) といった乳製品がつくられた。ウルムとは、生乳を大なべで加熱脱脂してつくるクリームのこと、ウルムをつくる際に出る脱脂乳 (*bolson süü*) を数日間乳酸発酵させた後、加熱したものがツァガー、これを脱水したものがアールツである。

オルホン郡では、夏から秋にかけてのこれら乳製品づくりに、ヒツジとヤギの乳があてられていた。ヒツジとヤギの出産メスの飼育を担当する牧民が、忙しい放牧作業の合間をぬって、搾乳と乳製品の加工を行なった。また、記録には残っていないが、もちろん個人所有のウシからも、自家消費用の乳製品がつくられたはずだ。

## (2) 技術指導書に記された乳加工法：加熱法・静置法・機械法

以上は、乳製品生産所が組織される以前の1970年代にオルホン郡で用いられていた方法であり、1980年代以降、これがどのように変わったのかは、資料がなく詳細は不明である。そこで、ここでは参考として、ウブルハンガイ県ホジルト郡とアルハンガイ県イフタミル郡の乳製品生産所で行なった調査をもとに、1976年にまとめられた、「モンゴル乳製品生産技術」と題する技術指導書の内容を紹介する<sup>19)</sup>。

この文書では、三つの乳加工法が記されている。すなわち、大なべに

<sup>19)</sup> この技術指導書は、農牧業科学協議会の1976年の第10号決定として批准された。残念ながら、全文を参照することはできなかったが、当該文書の一部が注14に示した資料で引用されており、本論文ではこれを参照した。

よる加熱脱脂を基点とする乳加工（加熱法）と、非加熱・静置による脱脂を起点とする乳加工（静置法）、そして機械を用いた遠心分離による脱脂を起点とする乳加工（機械法）の三つである。ここでは、ヒツジ・ヤギ・ウシの乳のおよそ10%を加熱法、15%を静置法で加工し、残りの75%を機械法で加工するように定めている。

まず、加熱法では、乳を大なべて加熱脱脂して、クリームであるウルムを分離する方法は先ほどと同じだが、残ったボルスン・スー（脱脂乳）は酸乳を加えて加熱し、ビヤスラグ（*byaslag*）やエーズギー（*eezgii*）とよばれるチーズに加工する（図2）。

次に、静置法では、乳を加熱することなく静置し乳酸発酵を進め、ズーヒー（*zöökhi*）とよばれるクリームを抽出する。ズーヒーはさらに加熱して、バターオイルであるシャル・トス（*shar tos*）などに加工した。ズーヒーを分離した後の乳酸発酵が進んだ脱脂乳であるエードスン・スー（*eedün süü*）は加熱・脱水して、スーン・ホロート（*süün*

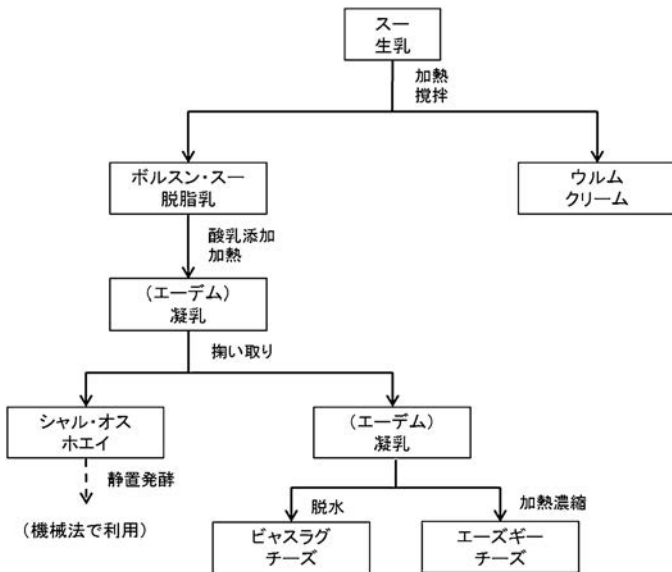


図2 加熱法の乳加工体系

*khuruud*) とよばれるチーズに加工した (図 3)。

そして、機械法では、遠心分離機とチャーンをつかってバターに加工する方法は同じだが、シンゲン・スー (脱脂乳) を加工するやり方が異なる。ここでは、シンゲン・スーに、加熱法と静置法の作業過程で出るホエイであるシャル・オス (*shar us*) を混ぜて、乳酸発酵させた後、加熱・脱水し、アールツをつくった。このアールツに、風味を整えるためにクリームであるツツギーを混ぜたあと、天日乾燥させてアールロールとよばれるチーズをつくった。脱水時に得られたシャル・オスは、蒸留を繰り返してアルコールを抽出した (図 4)。

この技術指導書に記載された乳加工法が、そのままオルホン郡の乳製品生産所で用いられたことはおそらくなかったであろう。むしろ、この文書からは、従来の乳加工技術体系に、機械を用いたバターの加工技術をいかに組み込もうとしたか、その一端をうかがい知ることができる。大きな課題となったのは、バター加工時に出るシンゲン・スー (脱脂乳) をいかに利用するかということであった。バターを分離したあとの

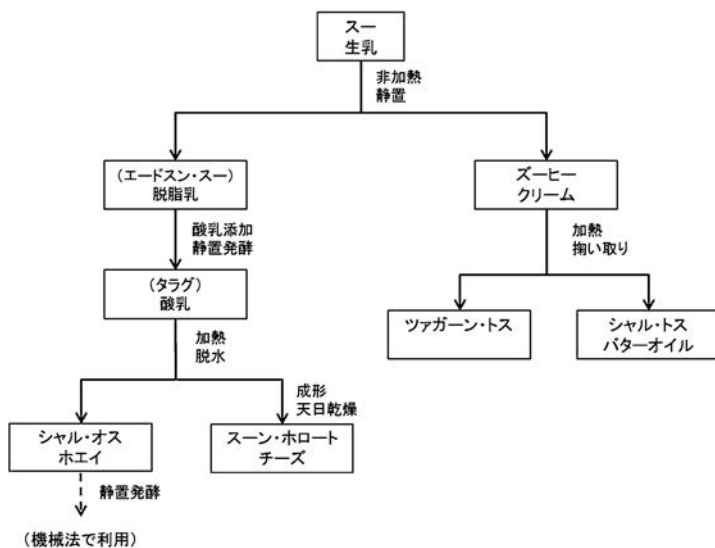


図 3 静置法の乳加工体系

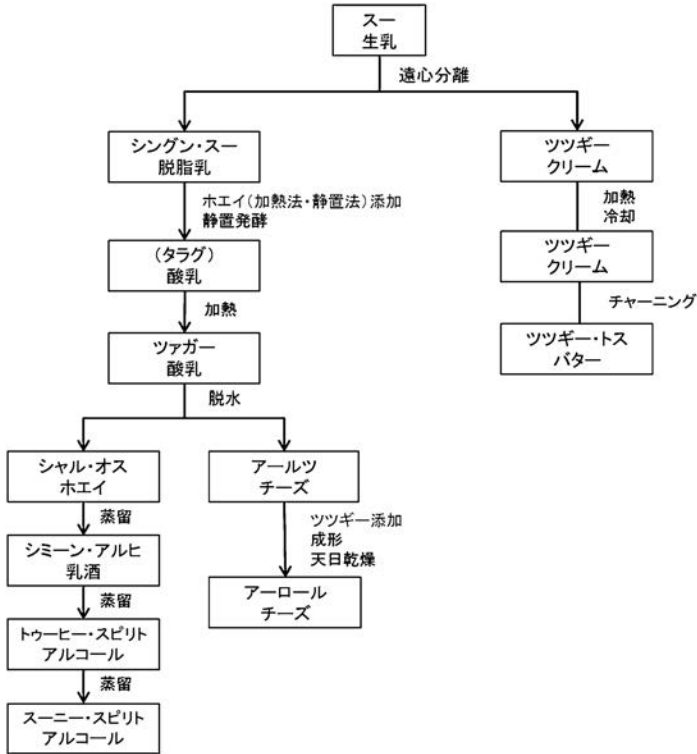


図4 機械法の乳加工体系

シングン・スーを、ウルム（加熱法）や、ズーヒー（静置法）を抽出したあとに残るボルスン・スーやエードスン・スー（いずれも脱脂乳）と同じように乳酸発酵させてチーズに加工することは技術的には可能だが、心理的に抵抗のあったことが、シングン・スーに対する加工工程の複雑さから読み取ることができる。つまりここでは、都市消費者向けのバター生産と、地域内で消費するその他乳製品の生産を両立させ、乳の完全利用を実現することが模索されたのであった。

(3) 農牧業協同組合のもとでの乳製品の域内消費と域外販売の関係  
鮮度が重要な乳・乳製品は、肉や毛とは異なり、輸出品にはなりに

くく、基本的には国内、地域内での消費にあてられた。農牧業協同組合では、乳・乳製品の域内消費と域外販売を併存させるための独自の仕組みがあり、そのポイントは次の三点にまとめられる。

第一は、加工法による違いである。5～9月に搾乳した牛乳のほとんどを、ソ連製の遠心分離機やチャーンを用いて、バターやカゼインに加工していた。一方で、郡内で消費する乳製品づくりには加熱脱脂を基点とする伝統的な加工法（加熱法）が用いられた。後者は基本的に自家消費のための乳製品づくりの方法と同じであった。

第二に、季節によって牛乳の用途が異なる。ウシの泌乳量が多い5～9月にかけては搾乳した乳をバターの生産にあて、その後、10月以降は、郡内で消費する牛乳・乳製品の生産にあてた<sup>20)</sup>。

第三に、家畜種による違いがある。搾乳が盛んな夏季には、牛乳がバター生産に回されたため、ヒツジ・ヤギの乳で、郡内で消費するウルム、アーロールなどの乳製品づくりを行っていた。当初、ヒツジ・ヤギの飼育を担当する牧民が、メス家畜の搾乳、乳製品の加工、販売までを行っていた。ところが、乳製品を転売し不正に利益を得る者が続出したため、1970年代後半からは郡中心地に一旦集荷したのち、各行政区で販売するようになった。

以上のような、オルホン郡の事例からは、域内での自足的な消費の対象であった乳・乳製品が、域外での販売が拡大するなかで、その生産・流通が次第に組織化され、集約的なやり方で行なわれるようになったことが分かる。

#### Ⅳ ポスト社会主義時代の乳・乳製品の生産と流通

##### 1 民主化後の畜産物取引、特に乳・乳製品

1980年代末以降の経済自由化の流れのなかで、国営農場と農牧業協同組合が民営化されて、それまでの集団化された牧畜労働から、各世帯

<sup>20)</sup> おおよその比率として、牛乳の72%がバター生産に、残りの18%が牛乳・その他の乳製品の生産にあてられた（出典は：注18を参照）。

が個別に牧畜経営を行なうようになった。地方では、国内流通システムの崩壊、保存・加工施設の閉鎖などの影響で、他の畜産品と同じく乳・乳製品を都市で販売するための回路がなくなり、協同組合期のような集約的なやり方で乳製品の加工・販売を行なうことはなくなった。

こうしたなか、市場経済化後のモンゴル牧畜社会を対象とした民族誌的研究において、畜産物取引、特に乳製品の生産・販売はどのようにとらえられてきたのであろうか。従来の研究は、家畜私有化で家畜の割り当てを受けた所有家畜頭数の少ない世帯が、家畜頭数を増やすために、出産による増加分以上の家畜を売ることを避けつつ、羊毛やカシミアを売って現金を得るなど〔尾崎 2003 : 591-592 ; 稲村ほか 2001 : 136-138 ; Martin 2008 : 318〕、畜産物取引を多角化することによって経営の安定化をはかっていることを想定してきた。それゆえ、例えば、極端に家畜頭数が少ない世帯の場合、カシミアへの依存度が高く、経営が不安定であることが指摘されている〔小長谷 2007 : 41〕。

一方、牛乳や乳製品は傷みやすいために、市場から遠い地域では販売が困難である。それゆえ、遠隔地では、乳製品はもっぱら自家消費や贈答品として〔尾崎 2004 : 98-101〕、あるいはごくまれに行商人が訪れた際の日用品との交換物として〔風戸 1999 : 31-33〕利用されてきた。これに対し、大都市の周辺地域では、市場が近いために、肉や毛・皮革とともに乳製品をコンスタントに販売することが可能であり〔尾崎 2008 : 485〕、畜産物取引を多角化するうえで重要な役割を果たしている。しかし、都市近郊での乳製品の生産・販売をめぐるのは、小規模酪農業者に関する報告〔小宮山 2006、Zolzaya 2005、トウシンバットほか 2008〕はあるものの、牧民世帯に関しては不明な点が多く、研究の余地を多く残している。

食品・農牧業省の発表によると、2012年の乳生産は全家畜で約 51.1 万 t と、社会主義時代の水準を上回った。ただし、国内の工場で加工している乳製品は、仔畜摂取分と自家消費分を差し引いた全国消費量 (391.6 t) のわずか 10.7% (4.2 t) に過ぎず、それを上回る量 14.4% (5.6 t) を外国からの輸入品に頼っている。ということは、全国消費量の 74.9%

(29.2t) を、個人および小規模酪農業者が生産する生乳や乳製品が占めているわけだが、その実態は必ずしも明らかではない。これらは、牧民と仲買人や小売業者のあいだで、あるいは個人同士で直接取引がなされるため、その実態を把握することが難しく、統計に反映されてこなかったからだ [ダムディンスレン 2014: 286]。

そもそも、どのような人びとが、いかなるやり方で、都市消費者向けの乳製品の生産、販売を行なっているのか。この問題を解明するためには、牧民による乳製品の生産・流通の実態を、まずもって理解する必要がある。

## 2 都市近郊における乳製品の生産・販売

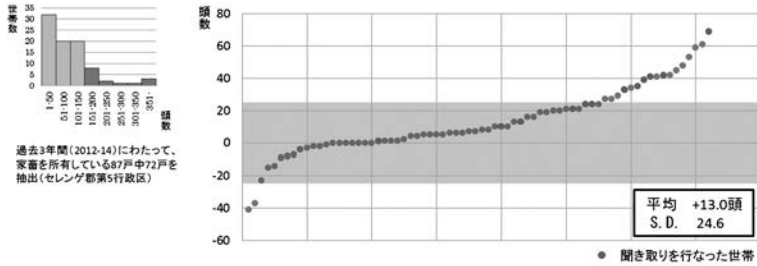
ここで取り上げる資料は、ボルガン県セレンゲ郡での調査にもとづくものである。セレンゲ郡は五つの行政区で構成されるが、このうち第五行政区で牧畜を営む 22 戸に対して、乳の利用状況をたずねた。実は、前項で事例としたオルホン郡でも同様の調査を行なったが、当該地ではセレンゲ郡のような個人による乳製品の販売は少なくとも一般的には行なわれていないことが分かった<sup>21)</sup>。このような違いはなぜ生じたのであろうか。以下では、セレンゲ郡の事例をもとに、都市近郊における乳製品の生産・流通のあり方について考えてみたい。

### (1) 国営農場解体後の牧畜活動の現状

セレンゲ郡には、社会主義時代、インゲトトルゴイ国営農場があった。全国でも比較的早い時期に設立されたこの国営農場は、小麦耕作と肉用の混雑種のウシの飼育を中心に行なったが、1991 年に民営化され、いくつかの小農場に分割された。国営農場解体後、小麦生産が大きく落

---

<sup>21)</sup> 筆者がオルホン郡の第二行政区で行なった調査で、多くの牧民がエルデネットなど近隣の都市に行くついでに牛乳や馬乳酒を売って現金を得ていることは確認することができたが、定期的に牛乳を乳製品に加工して販売しているという事例はほとんどみられなかった。ただし、例外はある。近年、集約的牧畜の普及を後押しする国際機関や政府の援助により組織されたいくつかの酪農場で、乳製品の生産・販売が行なわれるようになった [富田 2014: 55-57]。



※出産可能なメスの頭数から、家畜消費頭数(販売と自家消費の合計)を引いたもの

図5 2012～2013年における家畜所有頭数150頭以下の世帯別の年間家畜収支

ち込んだのに対して、家畜生産は個別世帯を中心に大幅に拡大しており、こうしたなかで個人による乳製品の生産・販売が広く行なわれるようになった。

調査地とした第五行政区の北端にはセレンゲ川が流れ、その沿岸に郡中心地が置かれている。この郡中心地から南北におよそ65km離れたエルデネットへは、人やモノの日常的な行き来がある。調査地のセレンゲ郡第五行政区では、全世帯のおよそ3分の1(330戸中113戸)が家畜を飼育している。一世帯当たりの平均所有家畜頭数は93.8頭と少なく、隣接するオルホン郡第二行政区の一世帯当たりの平均所有家畜頭数229.6頭の半分にも満たない。図5は、家畜所有頭数150頭以下の世帯の2012年から2013年にかけての家畜収支(出産可能なメスの頭数から、販売と自家消費分を合わせた家畜消費頭数を引いたもの)を示したものである。図からは、彼らが基本的にはできるだけ家畜を売らないという方針のもとで、畜産物取引を行なっていることが分かる。それでも家畜の所有頭数が多ければ、自然増加分の販売・消費だけで経営を維持できるだろうが、家畜の所有頭数が150頭以下の経営規模の小さい世帯がほとんどを占める調査地では、再生産ラインぎりぎり(あるいは超過して)家畜の売却を行なわざるを得ない世帯も少なくない。そこで彼らは、少ない家畜頭数でできるだけ多くの収益を得るために、畜産物取引の多角化を選択し、経営の安定化をはかっている。乳製品の生産・販売は、そうした方向性を持った活動の一つとして重要である。

調査地では、ウシが主要な搾乳の対象となっている。ヒツジやヤギ、ウマも搾乳されるが、頭数がそれほど多くないことや、搾乳のために母畜と仔畜を分けて放牧するのが面倒だという理由で搾乳しない世帯が多い。

搾乳期間は、草や気象の状況、個体の状態などによって変わる。ウシは、ほかの家畜種に比べて搾乳する期間が長く、6月から11月、というのが平均的な搾乳期間である。もっとも泌乳量が多いのは、7月から9月にかけての夏営地に滞在中の期間である。一方で、搾乳を終える時期は世帯ごとに異なる。次の出産に備えて早々に搾乳をやめる世帯もいれば、乳がでるかぎり搾乳を続けるという世帯もいた。

ウシの搾乳は通常朝夕2回行なわれる。泌乳量が低下すると、日に1回の搾乳となる。聞き取りを行なった8月上旬は、メスウシの乳の出が良い時期にあたるが、一頭当たりの一日の平均搾乳量は4ℓほどであった（当然、秋以降、搾乳量はさらに低下する）。それぞれの世帯で搾乳しているメスウシの頭数は、4～20頭と差があるものの、一日の搾乳量は50ℓほどが上限であった。メスウシの頭数が多い世帯の場合、出産により増加した分の家畜を売るだけで十分な収入が得られるため、乳は家庭内で自足的に利用する傾向が強く、乳製品の販売にはそれほど積極的ではないことが、理由としてあげられる。

いずれの世帯も牛乳を自家消費、接客・贈答用に用いる。一方で、生乳あるいはそれを加工してつくった乳製品を販売するかどうかは世帯によって異なる。一般的な傾向としては、年金受給者や定職を持つ人びとが多い郡中心地では、牛乳をもっぱら自家消費用、接客・贈答用にあてている。これに対し、草原で専業として家畜飼育を行なっている世帯のほとんどが、乳・乳製品の販売を行なっていた。

## (2) 都市近郊における乳生産の再編とその特徴

搾乳可能なメスウシが、数頭から十数頭程度の小規模な牧民世帯では、一日に得られる牛乳の量は限られる。搾乳が盛んな夏季は牛乳の市場価格が低下するため、輸送費用を考えると、牛乳の販売だけで採算を

とすることは難しい。そこで牧民は、牛乳を保存性が良く、価格の高い乳製品に加工して売却している。

主な売却先は、エルデネトのフレグ食品市場である。この食品市場内には、乳製品を専門的に扱う小商店が集まったコーナーが二つある。商店経営者のほとんどは女性で、仕入れから販売までを一人で取り仕切っている。牧民たちは、乳製品を商店経営者のもとに直接持ち込んで販売している。エルデネトまでは、自家用車（自動車・オートバイ）や乗合タクシーを使って輸送するケースが多い。なかには、顔なじみのタクシー運転手に頼んで代わりに販売してもらうという事例もあった。いずれにせよ牧民自身が輸送費用を負担しなければならず、乳製品を販売する頻度は多くとも四日に一度、少なければ二週間に一度であった。

夏季に売却される主な乳製品は、牛乳から抽出したクリームと、残った脱脂乳を乳酸発酵したのち、脱水・乾燥させてつくるチーズである。この地域では、牛乳を大なべに入れて加熱脱脂し、ウルム（クリーム）を抽出する方法が一般的である。しかし、ここ数年、調査地では、牛乳を手動の遠心分離器を使って、ツツギー（クリーム）を抽出する方法が急速に普及している<sup>22)</sup>。

生乳からクリームと脱脂乳を分離するのに、従来方式では大なべによる加熱脱脂を行なうのに対し、新しい方法では手動の遠心分離器を用いるのが最大の違いである。クリームを取った後のボルスン・スーおよびシンゲン・スー（いずれも脱脂乳）を、乳酸発酵させたのち、加熱・脱水、天日乾燥させて、アーロール（チーズ）に加工する作業は、両者とも共通している。

調査地では、牛乳・乳製品の販売を行なっている15戸のうち11戸が遠心分離器を用いた乳製品づくりを行なっていた。15戸のうち、2戸は乳製品メーカーに生乳を販売している酪農業者であるから、乳製品を販売しているほとんどの牧民が遠心分離を起点とする製造法を選択してい

---

<sup>22)</sup> このほかにも、生乳・脱脂乳に酸乳を加えて、ピヤスラグやエーズギーと呼ばれるチーズをつくることもあるが、頻度は多くないので、ここでは説明を省略する。

ることになる。これに対し、自家消費あるいは贈答・接客用にのみ用いる7戸のうち6戸は、従来通り大なべを用いた加熱脱脂を起点とする乳製品づくりを行っていた。遠心分離器を用いた脱脂処理方法は、より短時間に多量のクリームを抽出することが可能である。炉や大なべを用いたやり方だと、どうしても一度に加工できる量に限界がある。さらに、ウルムを商品として販売するためには、見た目を良くするのに、均一に整形したり、作業過程で混入するハエやゴミを除去しなければならぬが、遠心分離器を用いたやり方だとそうした手間がかからない。ただし、遠心分離を起点とする乳加工は、風味の点では伝統的な加熱脱脂法に劣ると考えられている。牧民たちによれば、遠心分離機を使ってクリームを抽出した後の脱脂乳（シンゲン・スー）は、脂肪分が少なく、それを加工してつくったアーロールは、ポルスン・スーからつくったものに比べ、おいしくない（味が薄い）という。そのため、販売用には遠心分離法で、自家消費用、接客・贈答用には加熱法でというように、目的に応じて乳製品を作り分けている世帯もいた。

以上のことから、この遠心分離による脱脂を起点とする乳加工が、市場での販売を前提に普及してきたことは明らかである。例えば、ここでは、脱脂乳からチーズをつくる際に、酸味を抑える目的で乳酸発酵の度合いを低くしたり（乳酸発酵期間を短くする）、砂糖を添加するなど、市場に受け入れられやすくなるための独自の工夫もみられる。

### (3) 都市近郊の零細規模の牧畜経営における乳製品の域外販売と域内消費の関係

民主化後、モンゴルの都市近郊では、経営規模の小さい牧民が畜産物取引の多角化を選択しており、調査地のセレンゲ郡ではとくに乳製品の販売が重要な役割を果たしていることが分かった。こうした市場での乳製品販売の拡大は、乳利用だけでなく、牧民の季節移動や生産サイクル、労働編成といった牧畜経営全体に影響を及ぼしている。

搾乳が最盛期を迎える夏（6月から9月）には、郊外および道路沿いに集中し、販売用の乳製品づくりを中心に行なう。ウシの搾乳や乳製品

の加工作業には、多くの労働力が必要となる。個別家族経営が大半を占める調査地では、通常は定住地に住む個人や家族を労働力として活用することで対処している。その後、秋（10月以降）になりメスウシの乳の出が悪くなると、都市からは遠いが良好な牧地に移動し、冬に食べるための乳製品づくりに専念する。その際、大なべを用いた加熱脱脂を起点とする加工法で乳製品づくりを行なう世帯が多い。ただし、乳製品の販売をやめてしまうわけではなく、余分な牛乳を凍らせておいて、町に訪れた際に売るといったことは続けられる。

この販売用と、自家消費、接客・贈答用とで乳加工法を使い分け、あるいは季節によって牛乳の用途が異なる、といった点は、農牧業協同組合のもとで用いられていた域外販売と域内消費を併存させるための仕組みと重なる<sup>23)</sup>。しかし、ここでは、遠心分離器を用いた乳加工が、バターをつくる最初の工程としてではなく、生乳からクリームをより効率的に抽出するための方法として用いられている点に注意すべきであろう。つまり、ここで売却の対象となるのは、あくまでもクリームやチーズであって、労働の集約化や生産・流通の組織化を必要とするバターやカゼインではないということだ<sup>24)</sup>。現状では、都市近郊の乳製品の生産・販売は、あくまで個別世帯による経済活動として行なわれている。

## V 乳・乳製品をめぐる生産と流通のローカリティ

本論文では、社会主義化と民主化が、地方での畜産物の生産、消費、流通にどのような変化をもたらしたのかを、乳・乳製品に焦点を当てて検討を行ってきた。

<sup>23)</sup> 一方で、家畜種による乳の使い分けはほとんどみられない。家庭内で消費する乳・乳製品は、夏季にもつくられるが、一日に消費するのは数ℓほどで、大部分が販売用の乳製品づくりにあてられた。また、ヒツジ・ヤギの搾乳は、そもそも頭数が少ないことや、人手が不足しているため、これを避ける世帯が多い。

<sup>24)</sup> 自家消費のために、クリームを攪拌してバターに加工する、あるいはウルムと同様に保存しておいたものを加熱してシャル・トス（バターオイル）に加工することはあるが、売却の対象となるのはあくまでクリームである。

社会主義時代には、あらゆる畜産物が食品・工業原料として、地方から都市へと送られるようになった。1950年代後半に農牧業の集団化が完了したことが重要な画期となったことは間違いない。しかし、肉以外の畜産物へと目を転じれば、畜産業化のプロセスは決して一様ではなかったことが分かる。乳・乳製品に関していえば、1970年代初頭から原則としてすべての農牧業協同組合が、都市消費者向けのバター生産をになうようになり、乳の生産、集荷、加工までを一括して行なった。また、1970年代末からは乳の収量を増加させるために、私有家畜からも乳の供出がなされるようになった。このように、農牧業協同組合では、1970年代初頭前後を境として、「肉中心」の牧畜生産から「肉・乳中心」の牧畜生産への明らかな転換がみられる。

しかしながら、乳の過剰な利用は、母畜の体力の低下や仔畜の成長を阻害する要因となり、畜群の再生産に悪影響を及ぼす恐れがある。そのため、農牧業協同組合は、「家畜頭数の増加」と「乳製品生産の拡大」を同時に実現するための仕組みを新たにつくり出す必要があった。具体的に、ウシの育成にあたって、種付けの管理や固定畜舎・飼料の利用など主に定着化によるリスク回避がはかられた。一方で、乳の生産、集荷、加工までを一括して行なう組織づくりとより効率的なシステムの構築が段階的に進められていった。調査地のオルホン郡の事例からは、当初は乳の生産・出荷だけであったのが、各行政区を単位として乳加工を行なうようになり、その後郡中心地に乳を集荷し一括して加工するシステムが構築されていく過程を詳細に跡付けることができた。

こうしたなか、ソ連製の機械を用いたバター加工という外来の技術と、伝統的な乳加工技術とを組み合わせたハイブリットな技術体系が生み出され、そのなかで域外販売と域内消費を併存させるための独自の論理が働いていたことが明らかとなった。

一方、1990年代初頭の民主化・市場経済化によって、社会主義体制のもとで集団化された牧畜生産システムが崩壊した。調査地のセレンゲ郡では、国营農場解体後、多くの住民が家畜飼育を行なうようになった。社会主義時代には、小麦耕作を中心に行なっていたこの地域では、

家畜頭数の急激な増加に対して、土地が相対的に不足しており、その結果、牧畜経営の小規模化・定着化が進行している。このような状況に、牧民たちは、畜産物取引を多角することで対処しており、なかでも乳製品の販売が重要な役割を果たしている。都市の近郊にあるとはいえ、輸送費用を考えると、牛乳の販売だけで採算をとることは難しい。そこで彼らは、牛乳を保存性が良く、価格が高い乳製品に加工して売却している。

こうしたなか、牧民たちは、市場に相対的に適したやり方（手動の遠心分離器を用いた脱脂処理やチーズの酸味を抑える工夫、乳加工法の季節的な使い分け）で、乳製品の生産・加工を行なっている。それは集団化期の域外販売と域内消費を併存させる仕組みをそのまま適用しているかのようであるが、実際は必ずしもそうではない。彼らは、遠心分離による脱脂処理を、生乳をクリームと脱脂乳に分ける作業を省力化する目的で行なっており、そこからバターやカゼインへの加工に結びつくことはほとんどない。あくまで伝統的な乳加工を、労働力の少ない個別世帯でより効率的に行なうための手段として普及していたのであった。ここでは、域外販売と域内消費という二つの生産領域が、集団化期のように明確に分かれておらず、両者の区別は曖昧で、重なり合っている。

ここで注意すべきは、都市近郊にあるとはいえ、すべての牧民が乳製品の販売を行なっているわけではないということだ。セレンゲ郡では、乳製品販売が拡大しているが、隣接するオルホン郡では、乳製品をつくって販売することは少なくとも一般的ではない。その背景として、オルホン郡では、セレンゲ郡に比べて一世帯あたりの所有家畜頭数が多く、自然増加分の販売・消費だけでも経営を維持できることがあげられる。乳製品の加工・販売には、移動する時期や場所、あるいは労働力を確保しなければならないなどの制約があり、家畜の増産をはかるうえで負担となるため、これを避ける世帯が多い。セレンゲ郡で、乳製品販売が急速に拡大しているのは、市場からの物理的な距離に加えて、少ない家畜頭数でいかに多くの収入を得るかという牧民自身の戦略によるところが大きい。ここでは、「肉・乳中心」の牧畜生産が、個別世帯の経営

規模の拡大のための暫定的、あるいは過渡的な戦略として機能しているのだ。つまり、同じ都市近郊という条件下でも、経営規模に応じて個別世帯がとりうる戦略に差があることが了解されよう。

最後に、このような零細規模の牧畜経営の維持に寄与している乳製品の生産・販売であるが、市場への輸送費用の高さや労働力の不足、そして乳製品価格の不安定さなどさまざまな問題を抱えており、非常に脆弱な基盤のうえに成り立っていることを付け加えておきたい。

## 付記

本論は平成 27 年度科学研究費助成金若手研究 (B)「近現代モンゴルにおける人間＝環境関係の変容に関する研究」(代表：富田敬大)の成果の一部をなすものである。

## 参考文献

- ボルガン県庁公文書室所蔵資料  
『チョイバルサン農牧業協同組合会議資料』(X.31 Д.1 XH.32)
- 平田昌弘  
2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店。
- 稲村哲也・古川彰・結城史隆・渡辺道斉・O・スフバートル。  
2001 「市場経済化過程におけるゴビ地方遊牧社会の現状と社会・経済変動」『リトルワールド研究報告』17、pp.127-139。
- 風戸真理  
1999 「遊牧民と自然と家族—遊動と家畜管理」『モンゴルの家族とコミュニティ開発』島崎美代子・長沢孝司(編)、pp.21-50、日本経済評論社。  
2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌—ポスト社会主義を生きる』世界思想社。
- コメコン書記局  
1975 『コメコン諸国統計年鑑』国際事情研究会訳、ジャパン・プレス・サービス。  
1980 『コメコン諸国統計年鑑』国際事情研究会訳、ジャパン・プレス・フォト。  
1985 『コメコン諸国統計年鑑』国際事情研究会訳、ジャパン・プレス・フォト。  
1990 『コメコン諸国統計年鑑』国際事情研究会訳、ジャパン・プレス・フォト。
- 小宮山博  
2006 『モンゴル国における定住・半定住型畜産業の経済分析：酪農経営の可能性』東京国際大学経済学研究科。

小長谷有紀

- 1992 「モンゴルの乳製品」『乳利用の民族誌』石毛直道・和仁皓明(編)、pp.218-233、中央法規。
- 1997 「加工体系からみたモンゴルの「白い食べ物」」『モンゴルの白いご馳走』石毛直道(編著)、pp.129-184、チクマ秀版社。
- 2003 『モンゴル国における20世紀—社会主義を生きた人びとの証言(国立民族学博物館研究報告41)』国立民族学博物館。
- 2005 『世界の食文化モンゴル』農山漁村文化協会。
- 2007 「モンゴル牧畜システムの特徴と変容」『E-journal GEO』2(1): 34-42。
- 2010 「モンゴルにおける農業開発史—」『国立民族学博物館研究報告』35(1): 9-138、国立民族学博物館。

Лувсансүрэнгийн Дамдынсүрэн (ロブサンスレン ダムディンスレン)

- 2014 *Сүү, Цагаан Идээний Шинжлэх Ухаан, Технологийн Тайлан. Мөнхийн Үсэг ХХК* (乳・乳製品の科学とテクノロジー)。

Martin, Andrei

- 2008 *Between Cash Cows and Golden Calves: Adaptation of Mongolian Pastoralism in the 'Age of Market'. Nomadic Peoples* 12(2): 75-101.

松原正毅

- 1992 「トルコ系遊牧民ユルックの乳製品」『乳利用の民族誌』石毛直道・和仁皓明(編)、pp.25-43、中央法規。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所(編)

- 1988(1969) 『モンゴル史2』二木博史・今泉博・岡田和行訳、田中克彦監修、恒文社。

モンゴル国立中央文書館所蔵資料

- 『ボルガン県の農牧業協同組合の1983年決算総括』(X.356 Д.2 ХН.492)  
『ボルガン県オルホン郡チョイバルサン農牧業協同組合において組織するモンゴル乳製品生産所および乳生産の状況について』(X.15 Д.3 ХН.234)

小貫雅男

- 2000 『遊牧社会の現代』青木書店。

尾崎孝宏

- 2003 「遊牧民の牧畜経営の実態：モンゴル国南東部の事例より」『科学』73(5): 589-593。
- 2004 「南北モンゴルの間—内モンゴルとモンゴル国の生業論敵比較」『中国21』19: 81-107。
- 2008 「モンゴル牧畜社会における郊外化現象—ポスト「ポスト社会主義」的牧民の出現に関する試論」高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程(国立民族学博物館調査報告78)』pp.481-499、国立民族学博物館。
- 2010 「社会主義から民主化へ」『チンギス・カンの戒め』白石典之(編)、pp.141-159、同成社。

白石典之

- 2015 「動物遺存体にみる食生活」『チンギス・カンとその時代』白石典之(編)、pp.186-194、勉誠出版。

Sneath, David

- 1999 Spatial Mobility and Inner Asian Pastoralism. *The End of Nomadism?*, C. Humphrey and D. Sneath (eds), pp.218-277, Duke University Press.

高倉浩樹

- 2008 「ポスト社会主義人類学の射程と役割」高倉浩樹・佐々木史郎(編)『ポスト社会主義人類学の射程(国立民族学博物館研究報告78)』、pp.1-28、国立民族学博物館。

富田敬大

- 2013 「モンゴル牧畜社会における二つの近代化—開発政策の転換と都市近郊の牧畜経営をめぐって」『体制の歴史』天田城介・角崎洋平・櫻井悟史(編著)、pp.540-590、洛北出版。
- 2014 「牧畜開発の動向—進む政策転換と集約的牧畜の導入」『現代モンゴルを知るための50章』小長谷有紀・前川愛(編著)、pp.53-57、明石書店。

トウシンバット ダワースレン・新沼勝利

- 2008 「市場経済移行に伴うモンゴル農業経営の変化」『農村研究』106 : 96-107。

Zolzaya, Zundui

- 2005 「モンゴル国の酪農業の現状と将来展望—酪農場と乳牛所有牧家を対象とした聞き取り調査結果を中心に」『畜産の研究』59(11) : 1235-1241。

---

---

# 内モンゴルおよびモンゴル国における 乳酒をめぐる生産・流通・消費

尾崎 孝宏・森永 由紀

(鹿児島大学法文教育学域・明治大学商学部)

## I はじめに

本章では、中国内モンゴル自治区及びモンゴル国<sup>1)</sup>における乳酒をめぐる生産・流通・消費の現状を、現地の牧民が現在採用している牧畜戦略との関連から分析することを目的とする。本章で主として取り上げる乳酒は、馬乳を攪拌して乳酸菌発酵およびアルコール発酵を進行させた醸造酒である馬乳酒（アイラグ、チェゲー）および、主として牛乳を原料とし、上記の馬乳酒と同様に製造した醸造酒を蒸留して製造する蒸留酒（シミーンアルヒ）の2種類である。後述するように、こうした乳酒は長期間にわたり、自家消費あるいは広くても地域コミュニティの範囲で流通・消費される畜産品であったが、近年の市場経済の浸透あるいは輸送・通信テクノロジーの発達に伴い、馬乳酒に関してはそれが商品として都市部まで長距離輸送されるなど、市場を介して売買されることを目的とする流通網に取り込まれつつある状況が見いだされる。こうした乳酒が流通されうる現状の中で、牧民がどのような牧畜戦略に基づいて乳酒を生産・流通・消費しているのか、本章では筆者らの調査データに基づいて論じたい。

さて、まずは乳酒の生産方法について見てみよう。世界的な観点から

---

<sup>1)</sup> 本論では煩雑さを避けるため、現在の中国内モンゴル自治区やモンゴル国が政治単位として成立する以前の事象に関しても、特に断りなく現在の政治的単位に即して記述している。

見て、こうした乳酒が製造されているのはモンゴル高原のほか、カザフスタン・キルギスなどの中央アジア地域、ロシアのサハ・タタールスタンなどユーラシア大陸北方域に限られており、平田によれば、その原因は乳文化の発祥地となった温暖な西アジアと比較して、酵母の活発な活動を可能とする冷涼性にあると指摘する [石井 2011 : 23 ; 平田 2013 : 381-386 ; 高倉 2012 : 212, 250]。筆者らの実見でも、こうした乳酒は搾乳後に数時間静置し常温に冷やしてから発酵に回されるため、高温の環境下では容易に腐敗するなど乳酒の製造が困難であると思われる。なお発酵に用いられる容器はフールと呼ばれる皮袋 (モンゴル国)、プラスチック製の円筒状の容器 (モンゴル国)、木製の円筒状の容器 (内モンゴル)、陶器製の甕 (内モンゴル) などであり、スターターとしてはすでに出来上がった乳酒のほか、穀物を発酵させたものや市販のイーストを利用するケースもある [小長谷 1992 : 193]。

乳酒が生産される季節は搾乳が盛んにおこなわれる夏季から秋季にかけてであり、冬季になると乳酒は生産されないが、翌年に再び乳酒を作るシーズンになった際には必ずしも乳酒をスターターとして生産を開始する必要はないため、必ずしも乳酒を越冬保存しておかなくても良い。つまり乳はシーズンごとに飲みきってしまっても構わないものであるが、後述するように地域によっては凍結保存した乳酒を融かして旧正月を祝う際に飲んだり、一部を春まで保存しておいたりするケースも見受けられる。なお、乳酒の生産には 1000 回オーダー (1 日で最低 1000 回、最高 6000 回程度) の攪拌が必要であるが、これは酸素を供給して乳酸菌と酵母菌数を増やすためである [平田 1993 : 151-152]。また馬乳酒の場合には 1 回に 1 頭の母ウマから搾乳できる乳量が 500 g 程度と少ないため、昼間は 2 時間おきに搾乳する手間も必要となる。この搾乳と攪拌の手間により、乳酒の中でも馬乳酒は特に大規模に生産しようとすると相当な労働力を割く必要のある乳製品である (写真 1)。

一方、常温で作られる醸造酒としての乳酒が当該地域のより古い文化であるのに対し、蒸留酒としての乳酒は後代にもたらされた技術によると考えられており [平田 2013 : 157]、後藤によれば、モンゴルにおける



写真1 馬乳酒の攪拌作業（モンゴル国ボルガン県）

蒸留酒は名称・実体ともに元代（13世紀）以降の所産であるという〔後藤 1968 : 85〕。蒸留は鍋に乳酒を入れ、鍋の上に円筒形の器具をかぶせてその上に冷水の入った半球状の容器（ブリキの洗面器などを転用可能）を乗せ、さらに容器の下に椀などを離して設置する（写真2）。鍋に入った乳酒を熱するとアルコール分が蒸発し、上の冷水で冷やされるとアルコール分が容器の表面で再度液化し、容器の表面を伝って下ってきたアルコールが最終的には椀の中に溜まるという形で蒸留酒が採取される。石毛は 12-13 $l$  の醸造酒から 2 $l$  の蒸留酒を採取すると報告しており〔石毛 1997 : 40〕、原料の醸造酒のアルコール度数が 3% 程度とすると、原料に含まれるアルコールを完全に蒸留酒へ採取できたと仮定しても 20% 程のアルコール度数となり、これは筆者らのフィールドでの実感とも大きな祖語のない数値である。モンゴル国では蒸留は一般に朝に行われ、その場で出来たてを味わうこともあり、また保存して客の接待や旧正月を祝う際に飲まれることもある〔野沢 1991 : 111〕。



写真2 蒸留器（モンゴル国スフバートル県）

## II 乳酒生産の地域的偏り

こうした乳酒は、以前よりモンゴル高原内部でも生産状況に地域的な偏りが存在することが指摘されてきた。例えば平田は、モンゴル国中部のドンドゴビ県サインツァガーン郡・デレン郡において蒸留酒を生産しない事例を報告しており〔平田 1993 : 153-157〕、また東部内モンゴルでは、蒸留に加えて醸造酒としての乳酒も生産しない事例を報告している〔平田 1993 : 166〕。また内モンゴルに関しては、馬乳酒の生産が 20 世紀前半より極めて地域限定的であったことがいくつかの報告より伺われる。

例えば東部内モンゴルに関する初期の網羅的な概説書である『蒙古地誌』の下巻では、現地で生産される乳製品が列挙されているが、そこに

は「奶酒」として蒸留酒への言及、および「酸奶」として牛乳を原料とする乳酒への言及はあるが、馬乳への言及はみられない〔柏原・濱田 1919 : 285-286〕。

また 1940 年代に張家口の西北研究所をベースに内モンゴル中部で現地調査を行った梅棹も、夏になれば牛乳を原材料とする蒸留酒の製造が盛んであり、冬まで貯蔵して旧正月になれば泥酔するほど飲む者が至る所で見られると述べるのに対し、馬乳酒に関してはほとんど生産されておらず、確実な生産事例として「(西スニト旗の) 徳王府、東スニト旗の活仏、アバガ旗」などを挙げるに過ぎない。このうち、王府や寺院では宗教儀礼と結びついた特殊な用途のために馬乳酒を用いると述べ、一般の飲用とは異なる点を指摘している。ただし先行研究やモンゴル人からの伝聞情報で生産地として挙げているアバガ旗に関しては「馬群を持つ家でこれを作る家がよくある」、「比較的さかんにつくるらしい」と述べ、日常的な飲用の可能性を示唆している〔梅棹 1990 : 376-377〕<sup>2)</sup>。

なお、水谷は 1996 年に内モンゴルで乳製品の生産に関する調査を行っているが、そこでは内モンゴルで馬乳酒を生産しているのはシリンホト市のみであると述べており、シリンホト市東部のモドン牧場で馬乳酒の生産を実見している〔水谷 1997 : 58〕。ただし水谷は調査行程の都合上、アバガ旗は訪問していない。ただし、現在のシリンホト市は清朝～民国期<sup>3)</sup>のアバガ左翼旗の領域を含み、現在のアバガ旗は同じくアバガ右翼旗の領域を含むため〔柏原・濱田 1919 : 地図 26, 779-792〕、内モンゴルで馬乳酒を生産しているのが「シリンホト市のみ」であるという認識は厳密には問題があるものの、梅棹の記述と大きく齟齬があるわけではない。なお、同じシリンゴル盟でも、シリンホト市の東隣にある東西ウジュムチン旗も水谷は訪問しているが、少なくとも水谷が訪問した牧民に関する限り馬乳酒は生産されていなかった〔水谷 1997 : 63-68〕。

<sup>2)</sup> アバガの住民には 17 世紀に現在のボルガン県から移住させられたタブナングードと呼ばれる人々が含まれており、彼らが馬乳酒生産と関連を有する可能性がある（東北アジア研究センター岡洋樹教授の個人的教示による）。

<sup>3)</sup> 厳密には 1948 年までである〔陳潮・陳洪玲（主編）2003 : 55〕。

一方、モンゴル国側に関しては、乳酒生産の地理的偏差に関して直接的に言及した古い資料は存在しない。ただし馬乳酒の用途に関しては、小長谷が20世紀初頭に活躍した画家シャラブの「モンゴルの日・馬乳酒のまつり」（モンゴル国立ザナバザル美術館蔵）という絵への言及を通じ、当時の馬乳酒の生産に寺院という宗教的権威が関与しており、また消費形態についても儀礼と密接に関連している点を示唆している〔小長谷 1992 : 228-231〕。

むしろ、モンゴル国における馬乳酒の日常的な飲用が近代以降の産物であるとは考えにくいのもまた事実である。例えば石井は2008年8月にウブスハンガイ県の牧民宅で現地調査を行い、そこでは1日に4ℓの馬乳酒が1人の牧民によって消費され、当該牧民は1日のエネルギー摂取量の70%前後を馬乳酒から取っていたと報告している。このような消費の在り方に対し、石井は馬乳酒を嗜好品ではなく、夏季の食料として位置付けている〔石井 2010 : 539-541〕。

また民族誌データから、20世紀前半の乳酒の生産・消費の一端をうかがい知ることも可能である。グリーンランドが1950年に、現在のゴビアルタイ県タイシル郡にあった旧ナルバンチン寺領の状況についてインタビューを行った記録である *Mongol Community and Kinship Structure* では、現地の牧民出身であるティルワ活仏が1920年代の乳酒の生産状況について、「ウマの騎乗に次ぐ重要な用途は乳利用で、馬乳はほとんどが馬乳酒の形で消費される」、「乳酒用として最も適しているのは馬乳である」〔Vreeland 1953 : 28-29〕と述べている。

ここでは乳酒の消費される具体的な機会について言及はないが、馬乳酒に限定した言及ではないため、儀礼に限定された用法であると理解するには無理があるだろう。石井の調査地と同様、森林ステップの辺縁地域としての同地では乳酒が夏季の食材として消費されていたと想像される。また同様の生態環境に位置するウブスハンガイ県北東部のブルド郡で社会主義時代の1983年に現地調査を行った小貫は、馬乳酒が旧正月に甕に入れてふるまわれていたことに触れている〔小貫 1985 : 148〕。なお当時、ブルド郡の馬乳酒は味が良いことで有名であり、夏季になると

農牧業協同組合（ネグデル）の管理下で生産された馬乳酒が、首都ウランバートル市のレストランや公共施設との契約に応じ、盛んに出荷されていたという [小貫 1985 : 162-164]。乳酒の流通については後で議論するが、モンゴル国では社会主義時代の後半期、農牧業協同組合という公式的な生産・流通ルートに乗って馬乳酒が流通していたことをここで確認しておきたい。

### Ⅲ モンゴル国における地域的偏差の要因検討

モンゴル国における馬乳酒生産の地理的偏差については、筆者らの共同研究プロジェクトにおいてバトオヨンが 2012 年冬に、自身が所属する気象水文局のネットワークを通じてモンゴル全国の 329 郡から各地の馬乳酒生産に関する質問紙調査を実施した [Batoyun et al 2015]。図 1 は各郡の生産状況について 4 地域に分類、図化を行ったものであり、Region I は「ほとんど生産しない」に、Region IV は「ほとんどの牧民

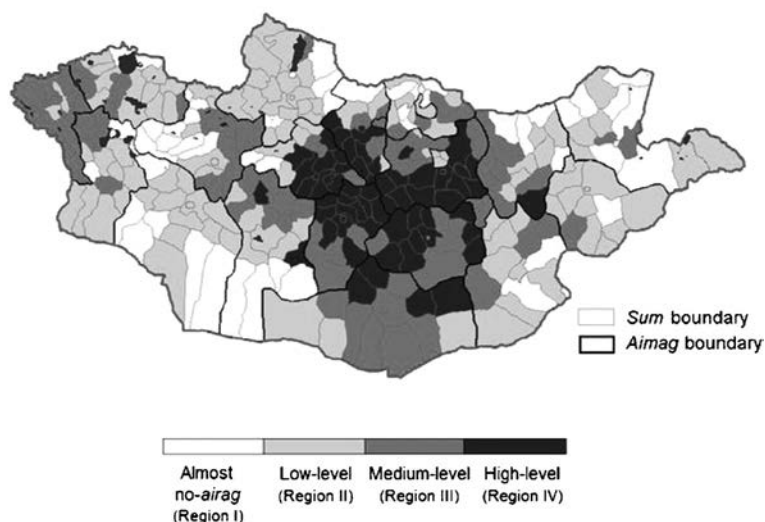


図 1 モンゴル国における郡別の馬乳酒生産状況  
 出典 : Batoyun et al. 2015 : 15

が生産する」に対応している。

また生産状況は生産期間の長短とも対応しており、生産開始はいずれの地域においても6月もしくは7月であるのに対し、生産終了はRegion Iでは約8割が9月までに終了するのに対し、Region IVでは8割以上が9月末を過ぎても生産を継続しており、11月に終了する牧民も1割以上存在する(図2)。

こうした生産の空間的偏差は、単純にウマの飼育頭数の多寡から説明できるとは限らない。図3はモンゴル国各郡のウマの密度(頭数/平方km)

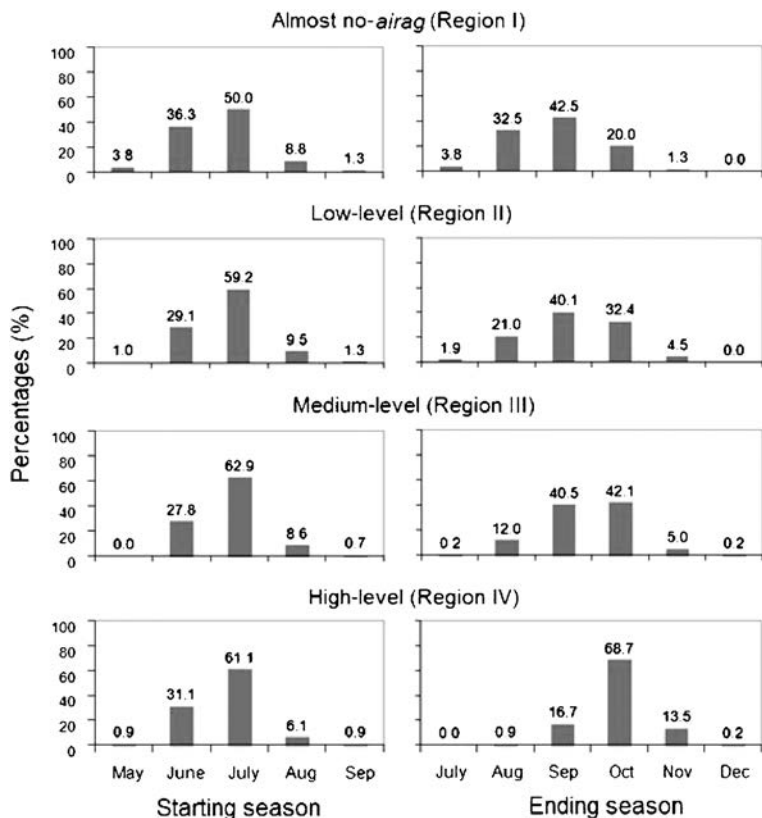


図2 地域別の馬乳酒生産開始・終了時期  
出典: Batoyun et al. 2015: 18

を示したものであるが、この密度分布は、首都ウランバートル近辺から西へ広がる、前述した森林ステップ地域に関しては馬乳酒の生産状況と正の相関を示すと思われる一方、東部の草原地域ではウマの密度が高いにもかかわらず馬乳酒の生産は盛んではなく、逆に南部のゴビ地域はウマが少なくにもかかわらず盛んに馬乳酒生産を行っている。これらは、単にウマの多寡という環境的要因のみならず、現地の文化的嗜好性によって馬乳酒の生産が左右されていることを示唆している。

東部の草原地域でウマの密度が高いのは、当地がモンゴル競馬の盛んな地域だからであるが、彼らは競馬用のウマの調教に夏季の労働力の相当部分を割いているため、それに加えて馬乳酒生産の労働力を確保するのは容易ではない。また乳製品一般に言えることだが、乳製品の生産は幼畜に飲ませる乳を人間が奪取することで可能となるので、幼畜の成長を第一に考える立場とは相いれないと考えられている。そのため、競馬用のウマの育成を優先する彼らは、無理をして馬乳酒を生産する必要はないと考えている。なお、東部地域では牛乳の乳酒から蒸留酒が盛んに生産されている。

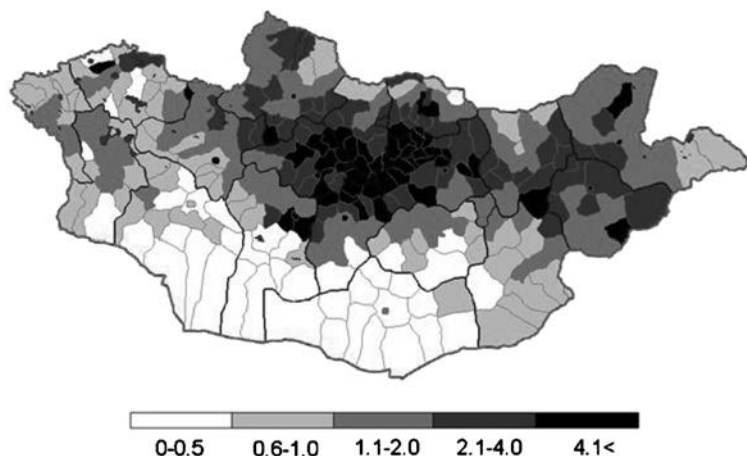


図3 モンゴル国における郡別のウマ密度

出典：Batoyun et al. 2015 : 16

一方南部のゴビ地域は元来、馬乳の搾乳開始に伴う儀礼が盛んに行われており、1970年代以降に社会主義政権がナショナリズムの高揚のために目指した全国規模で標準化された新しい民族文化の創造過程の中で、モンゴル国標準の儀礼形態として再定義されていった経緯が上村によって明らかにされている [上村 2002: 285]。このように、馬乳酒が民俗的な儀礼と密接な関連を有していた地域においては、東部地域とは反対に多少の無理をしても馬乳酒が盛んに生産されていたのだと理解する。なおゴビ地域では、ラクダの乳を原料とする醸造酒としての乳酒も盛んに生産されている。

既に見たように、内モンゴルにおいては馬乳酒の生産地域は今も昔も非常に限られているのに対し、モンゴル国においては Region I にせよ、曲りなりにも馬乳酒は全国で生産されている。こうしたモンゴル国の状況を説明する要因も、儀礼が大きな影響を与えていると思われる。すなわち、7月11日に行われている革命記念ナーダムである。

このナーダムは人民革命の記念として社会主義政権によって始められたナーダムであり、首都で行われる国家ナーダムをはじめ、下級行政単位である各県、各郡の中心地でも同一の趣旨で行われる、国家儀礼と呼んでも差し支えない競技会である。ここでは競馬の表彰に馬乳酒が必須である。モンゴル語で「アイラギーン・タブ (馬乳酒の5頭)」と呼ばれるが、競馬ではそれぞれのレース<sup>4)</sup>で5着までに入ったウマと騎手を務めた子供、そして馬主が表彰の対象となり、表彰式の際には司会者が「マクタール」と呼ばれる祝詞を唱えながら腕に入った馬乳酒を騎手に渡して飲ませるとともに、馬乳酒をウマにもかけて入賞を祝福するスタイルが確立している。事実、革命記念ナーダムの直前ともなれば郡政府の建物前に馬乳酒の入った大きな樽が並べられることもある。また後述するように馬乳酒を生産している牧民も、7月のナーダム前に一つの生産のピークが出現する。ナーダムのために馬乳酒を生産するという状況は Region I であっても Region IV であっても同様であり、モンゴル国全

<sup>4)</sup> レースは年齢別に行われるほか、種馬も別のレースで競われる。そのため、1つのナーダムで6種類ほどのレースが行われることになる。

体で量はともあれ馬乳酒が生産されており、しかも生産開始時期には大きな差がない理由は、この革命記念ナーダムを目指して馬乳酒が生産されているためであると解釈可能である。

そして Region IV で遅くまで馬乳酒を生産している牧民においては、二番目の生産のピークは秋季、旧正月用の作り置きを生産する時期である。いうまでもなく、Region IV は夏季の日常食用としても馬乳酒が大量に生産される地域であるが、そこでは同時に、旧正月の儀礼食としての馬乳酒生産が盛んなのである。これは Region III と Region II の境界<sup>5)</sup>に位置する旧ナルバンチン寺領に関して、旧正月の儀礼食としての用途が記載されていない点とも整合的であると思われる。

ただし注意しなければいけないのは、いかなる儀礼でも、またいかなる地域でも無条件に儀礼には馬乳酒が選択されるわけではないという点である。尾崎がモンゴル国スフバートル県オンゴン郡 (Region II) で 2001 年 8 月に実見したウスニイ=バヤル (3 歳になった男の子の髪の毛を初めて切る儀礼) では、主催者は牛乳の蒸留酒であるシミーンアルヒを儀礼前よりいくつかの牧民世帯から買い集め、儀礼後の宴会で振る舞われていた。また、同地域では旧正月の祝いの席でもシミーンアルヒが提供され、馬乳酒が生産・提供されるのはナーダム時期に限定されていた。

#### IV 乳酒の流通

ところで乳酒の流通については現在、醸造酒とくに馬乳酒は市場流通が普及しているのに対し、蒸留酒は市場を通じての入手は不可能である。これは中国内モンゴル自治区・モンゴル国を問わず同様の状況であり、モンゴル国に関しては社会主義時代の末期も同様で、馬乳酒は都市でも売られているが、シミーンアルヒは売られていないと野沢は述べている [野沢 199 : 111]。

---

<sup>5)</sup> 現在のタイシル郡は Region II に分類されるが、旧ナルバンチン寺領はタイシル郡の最北部に位置している。またタイシル郡の北東隣に隣接するザブハン県シルーステイ郡は Region III に分類されている。

一方、さらに時代をさかのぼった 20 世紀前半の状況についてみると、少なくともモンゴル高原から域外への流通品目の中に、乳製品全般が含まれていなかったことが明らかになる。後藤の 1930 年代の調査によれば、モンゴルにおける商取引に従事する商人「蒙古行」の取引形態としては、家畜や毛・皮などと引き換えに雑貨その他を信用取引で売り込むとある〔後藤 1968 : 372-375〕。こうした家畜は中国内地まで歩いて移送され、肉として消費されるか役畜として利用される。一方乳製品は、消費者である漢人の食生活の中に乳製品が存在しないことから、取引対象とはなっていないことが容易に想像される。さらに本論の対象である乳酒に至っては、液体を収容する容器を必要とするため輸送に向かない点や、醸造酒に関しては日持ちの悪さを考慮すれば、そもそも長距離の移送を試みる対象ではなかったと理解されうる。

ただし、空間スケールを縮小して乳製品の動きを見た場合、必ずしもそれは自家消費ばかりではなかったことが想像される。例えば、バターオイルに関しては寺院への献納<sup>6)</sup>が、馬乳酒に関しても儀礼の主催者となる寺院や王侯への献納が想定される。また蒸留酒に関しても、上述のような家庭内的な儀礼の際にも現在と同様、個人間での融通が行われたことは想像に難くない。これらの要素を勘案すると、乳酒は必ずしも自家消費に限られはしないにせよ、歴史的には極めてローカルな範囲で消費されてきたと考えるべきであろう。

それでは、乳酒がローカルな範囲を超えて移動を始めるに至ったストーリーはどのようなものであろうか。現時点ではまだ実証的な資料が不足する部分も多く、あくまでも仮説の域を出ないものであるが、以下にモンゴル国に関するストーリーについて筆者らなりの考えを示しておきたい。なお内モンゴル自治区に関しては一層資料が不足しているため、その後に比較として言及するにとどめたい。

まず乳酒が広域的な移動を開始する要件として考えられるのは、以下の要素である。1) 乳酒の生産域外に乳酒を需要する人々が存在するこ

---

<sup>6)</sup> 寺院ではバターオイルが燈明用の燃料として利用される。

と、2)生産者が域外の乳酒需要者の存在を知っていること、3)乳酒を輸送するための技術的裏付けが存在すること。これは乳酒の長距離移送を妨げてきた諸要因の裏返しである。まず1)に関してだが、これは歴史的には存在しなかった域外の乳酒需要者が出現することを意味している。モンゴル国に関しては、社会主義時代における都市人口の激増が第一の要因として、加えて馬乳酒を薬として利用する診療所が各地に作られたことが第二の要因として考えられる。第二の要因については、小長谷がすでに馬乳酒による高血圧、結核、胃炎などへの治療法がモンゴル医学における一分野を構成している点、モンゴル国各地には馬乳酒診療所が存在することを言及しているため [小長谷 1992 : 218-221]、本論では第一の要因について詳述したい。

モンゴル国の首都であり、モンゴル国民の日常会話ではしばしば「都市 (ホト)」という単語 1 つで言及されるウランバートルの人口がモンゴル国の総人口に占める比率を示したものが図 4 である。

ここから明らかになることは、ウランバートルの人口比は年々増大しているが、その中でも特に顕著なのが 1950 年～1963 年と、2000 年以降である点である。前者はモンゴル国においてコメコン体制内での計画経

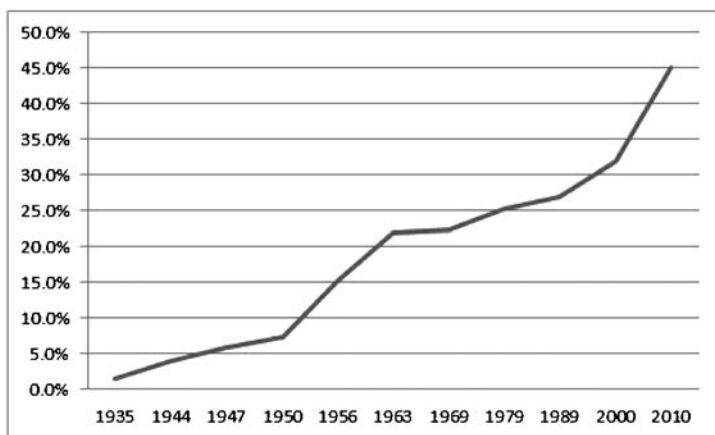


図 4 ウランバートル市人口の対総人口比 (1935-2010 年)  
出典 : Эрдэнэсүрэн ба Бадрах 1993 : 32-118

済の実施が本格化し、農牧業に関しては1950年代末より全国で農牧業協同組合（ネグデル）が組織され、工業化とそれを支える農畜産物の国家調達が加速された時期に相当する。一方、後者は後述の「郊外化」と関連するが、1999年から3年連続で発生した寒雪害（ゾド）などの影響で、経済の疲弊した地方からウランバートルへの人口流入が加速した時期である。

なお、ウランバートルの人口は1950年～1963年の13年間に4倍に、2000年～2010年の10年間には1.6倍に増加しているほか、後者の期間にはウランバートルの人口増加（48万人）がモンゴル国全体の人口増加（38.1万人）を上回っている。こうした人口増加は、地方在住者のウランバートルへの人口流入を抜きには説明がつかない現象である。そして、こうした流入人口の中には当然、乳酒を嗜む地域の人々が含まれていたと考えられる。さらに2)の要素と関連することであるが、彼らの親族のうち一部は、出身地で乳酒へのアクセスを保った生活を継続していたと考えられる。こうした条件は、少なくとも1960年代以降、つまりモンゴル国における社会主義集団化時期には揃っていたと思われる。

1)と2)の条件が揃えば、次に検討すべきは3)となる。ここでは蒸留酒と、非加熱の醸造酒で大きな差が存在する。すなわち前者であれば個人が、工場製品であるウオッカの空き瓶などを利用して乳酒を詰め、公共交通機関などを利用して手持ちで運搬することも困難ではない。それに対し、醸造酒は発酵が継続しているため炭酸ガスを発生する。それゆえに密閉性と耐圧性に加え、時に減圧が可能である容器は、社会主義時代はもちろん尾崎がウランバートルに滞在していた1990年代半ばにおいても個人で入手することは困難であった。

現在であればポリタンクが容易に入手でき、それに詰めて車に積載して運搬することが可能であるが、それでも運搬中の醸造酒が噴出して車内を汚すことを嫌い、運転手は運搬に際してポリタンクの固定や頻繁な減圧を心がけるのが常であり、運転手によっては醸造酒の運搬を快く思わず、可能な限り積載を断ろうとすることも珍しくない。こうした違いが、醸造酒である馬乳酒の流通を農牧業協同組合が担った一因となった

ことは想像に難くない。実際、本書の冨田論文（第2章）や上述の小貫（1983）の記述でも見られるように、馬乳酒の生産が盛んな地域では農牧業協同組合を通じて、例えばウランバートルや県中心地のレストランや学校、診療所などの公共施設と契約を結んで出荷されていたことがうかがえる〔小貫 1983: 164〕。

ただし本質的な問題として、なぜ農牧業協同組合が馬乳酒のみを商品として流通させ、蒸留酒は商品としなかったのかという理由に関しては現状では明らかではない。すでに論じたように、儀礼食という文脈ではむしろモンゴル国全体での馬乳酒生産を推進したと考えられるため、もともと馬乳酒生産の盛んな地域において馬乳酒が流通対象として積極的に選択された理由は、生産における蒸留酒以上の地域的偏差、夏の食材あるいは薬剤としての積極的評価などが考えられる。これは逆に、蒸留酒は生産上の地域的偏差が小さく、また薬剤としての効能はあまり期待されていないこと<sup>7)</sup>、さらにアルコールとして酩酊状態をもたらす機能としては、ウオッカ（麦などを原料とした穀物醸造酒）という度数が高く、より簡単に大量生産可能な代替物が存在したために、農牧業協同組合が商品として流通させようとしなかったのではないかという推測にも応用可能な論理である。しかもウオッカは、大消費地である都市に工場を建設して原材料を運び込み、生産することも可能である。むしろ、こうした推測は現状では具体的な資料的裏付けに乏しいため、今後のさらなる調査が必要である。ただ間違いないことは、乳酒のうち、モンゴル国では社会主義集団化時期に馬乳酒は産地から都市への流通が農牧業協同組合という公的なルートを通じて確立したのに対し、蒸留酒ではそれが起こらなかったということである。

## V モンゴル国における社会主義崩壊と郊外化

そして周知のとおり、モンゴル国では1990年代初頭に社会主義の崩

<sup>7)</sup> アルハンガイ県では外傷薬として使用されているという（共編者・風戸真理氏の個人的教示による）

壊を迎えた。乳酒の生産地域である牧畜社会における社会主義の崩壊は、農牧業協同組合を通じた農畜産物の生産・流通システムの崩壊を意味していた。というのも、社会主義集団化時期の背景となったコメコン体制では、モンゴル国における農畜産物の生産はソ連という買い手の存在に支えられていたため、ソ連という買い手が消失すればその生産・流通システム自体が存在意義を失うためである。そして社会主義崩壊後の1990年代、モンゴル国の牧畜地域においてはある種の緊急避難的な、自給性の高い牧畜が主流となる。というのも自国の貨幣価値が下落しインフレ傾向の強い時代において、家畜は単に食糧源となるだけではなく、インフレに強い安全な資産という機能も果たしていたためである。しかも社会主義崩壊後、家畜は国民へ私有財産として分配され、牧民にとってはほぼ唯一の資産となった。かくして、販売先を失った一方で家畜増殖へのモチベーションだけは維持されたモンゴル国において家畜は増殖を続けたが、その結果は1999年から3年連続で発生した寒雪害により、ほぼ社会主義崩壊後の増殖分に相当する家畜が死亡するという大災害であった〔尾崎 2008 : 483〕。

この寒雪害は、小規模な家畜群しか持たない牧民ほど深刻な打撃をもたらした。というのも、牧民として生活を続けるためには食料確保や現金収入のため、どうしても一定数の家畜を処分しなくてはならない。この最低限処分する家畜数が牧民世帯の家畜の増殖ペースを上回ったとき、牧畜経営は縮小再生産に陥る。つまり将来的には家畜数がゼロとなり、牧民が継続できなくなる事態へと至る。そうなれば都市などへ移住して無産労働者となるほかに、実際に前述した2000年以降のウランバートルの人口激増はこうした事態を背景として発生していると解釈できる。

ただし、2000年以降のモンゴル国の経済状況は、牧地の空間的二極化をもたらした。2000年以降、モンゴル国では社会主義崩壊後の混乱も一段落し、かつて都市が有していた市場機能が回復して消費も旺盛となった。その一方で、社会主義時代には国家によって採算を無視して担われていた牧地＝都市間の輸送が市場原理に即して担われるようになって

た。その結果、市場に近い都市郊外や幹線道路沿いの牧地は輸送コストが低いため、畜産物を販売するにも物資を購入するにも有利な地域として牧民の注目を集めるようになった。しかも都市の郊外であれば牧民に現金収入をもたらす畜産物として、家畜生体やカシミア、皮革に加えて乳酒を含む乳製品が加わることになる。というのも、金を払って乳製品を購入してくれるのは都市住民だけであり、しかも乳酒や生乳などの液体物は、前述したように長距離輸送には不向きなため、都市から離れた牧民との競争が発生しづらいためである。馬乳酒に関してはネグデル崩壊以後、公的な機関が大々的に馬乳酒を生産地から集荷し、都市部へ輸送することもない。一方でウランバートルは一層の地方出身者<sup>8)</sup>を抱え、潜在的な需要は着実に拡大している。こうした状況で、都市郊外での馬乳酒の生産と供給が開始したと思われる。

都市郊外では売れる畜産物が多様であるという点は、かろうじて縮小再生産に陥らない程度の家畜規模で生活している牧民には非常に重要である。なぜなら乳は、肉や皮革と異なり家畜を殺さずに入手可能なので、家畜の乏しい牧民には願ってもない産物であるためである。こうして、都市郊外の牧地への牧民の集中が特に 2000 年以降、顕著に進行した。尾崎らはこれを「郊外化」と呼んでいるが、尾崎のボルガン県およびドンドゴビ県での調査データによれば、この郊外化の担い手の多くは元都市住民と遠隔地<sup>9)</sup>から移住してきた零細な牧民である。郊外は既に家畜の密度が高まっており、大規模家畜所有者にとっては草不足への対応として行う季節移動の余地がないという意味で必ずしも好ましい牧地ではなくなっている。その点零細な牧民であればそもそも草不足に陥りにくく、また年金などの他の現金収入源を持っている元都市市民にとっては乾草を購入することで対応できるため、相対的にデメリットは少ない [尾崎 2013 : 115-116]。

<sup>8)</sup> 地方出身者の中には、地方に家畜を維持しつつウランバートルに物件を購入し、家族の一部がウランバートルに居住している富裕層も含まれるため、地方出身者が必ずしも貧困層ばかりという訳ではない。

<sup>9)</sup> 尾崎のモンゴル高原の牧畜空間類型では「遠隔地」は「郊外」の対概念である。

また上述した馬乳酒の大規模生産地に該当する地域には、首都ウランバートルおよびモンゴル国第3の都市であるエルデネトの郊外が含まれる。そのため、こうした地域の郊外で車を走らせていると、随所に馬乳酒販売を行っている牧民の看板を頻繁に目にするのが現状である。なお、馬乳酒の生産・販売は1990年代にも細々とではあるが存在していたことも事実である。社会主義崩壊以後、統計的資料がないのでモンゴル国全体での馬乳酒の生産量を把握することは困難であるものの、筆者らのフィールドの実感としては、馬乳酒の生産は郊外化の進行と並行して増大している。これは馬乳酒の流通において、以前は都市の購入者が生産者の元に出向かなければ買い付けができず、また現地へ行って見ない限り必要な量や質が確保できるか不確かであったのに対し、近年は郊外を中心に携帯電話の通信可能エリアが拡大し、購入者が牧民に電話で馬乳酒を注文し、それに対応して牧民が自ら都市へ持ち込むことも可能になったことも一因であると思われる。また加えて、上述した密閉容器(ペットボトルなど)の入手が容易となったことも要因として指摘しうる。

もちろん、上述した馬乳酒の生産地は遠隔地にも存在するし、大規模家畜所有者はむしろ遠隔地に点在している。彼らは所有する家畜数が多いため、例えば馬乳酒の生産を挙げても、より大規模な生産が可能である。森永らの2013年のインタビュー調査によれば、遠隔地に属するボルガン県サイハン郡・モゴト郡の牧民も、ナーダム時期を中心にウランバートルへ相当量を販売していたが(図5)、一転して干ばつとなった2015年夏には販売を取りやめる牧民も少なからず存在した。また旧正月時期に生産した馬乳酒は2014年も2016年も自家消費や親族・友人への贈答用が中心であり、家畜の生体販売などで十分な収入源の見込める裕福な牧民に限れば、遠隔地での馬乳酒生産はあくまでも副次的な収入源の域を出ない<sup>10)</sup>。もちろん彼らは販売するとなればナーダム前など、

---

<sup>10)</sup> ヒツジ1頭の価格(オス成畜)と馬乳酒200kgの価格がほぼ等しい。1頭の牝馬から200kgの馬乳酒を得るには、70日程度の搾乳が必要である一方、成畜300頭程度の中規模ヒツジ群を所有していれば、一般に1年で150頭程度の仔ヒツジが産まれる。

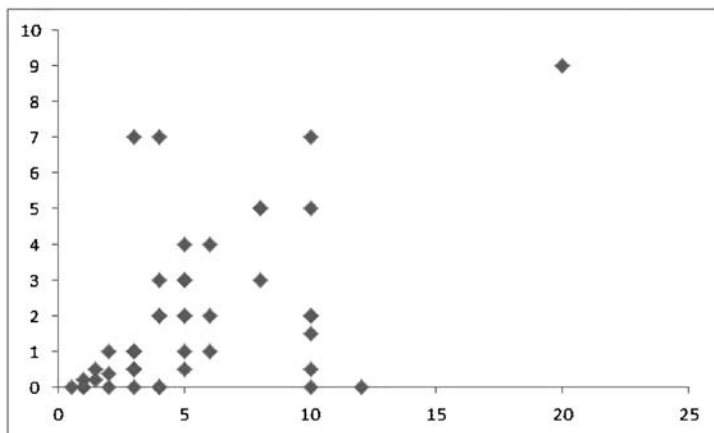


図5 モンゴル国遠隔地における馬乳酒生産量(横軸)と販売量(縦軸)(単位:トン) 2013年、ボルガン県サイハン郡・モゴト郡、n=47

確実に売り上げの見込める時期に集中して生産するというように、市場志向的な行動を取ることも事実である。

また当地は、社会主義集団化時期には農牧業協同組合を通じて大量の馬乳酒を出荷していた地域であった。現在でも流通範囲は農牧業協同組合が開拓した地理的範囲を踏襲するように、都市部への直送が主となっている。なお2000年代より、モンゴル国の舗装道路網整備が進行し、舗装道路へのアクセスが容易である限り都市部への運搬時間は大幅に短縮されたことも事実であるが、遠隔地の牧民の多くはこうした舗装道路から距離を置いて居住しているため、馬乳酒を容易に都市へ出荷できるとは言い難い状況に基本的な変化はないと言えるだろう。冬季は馬乳酒を凍結させて運搬することが可能なため、運搬条件としては比較的容易ではあるが、現状では冬季に積極的に流通させるという傾向はみられない。

## VI 内モンゴル自治区における歴史的展開と牧畜戦略

一方、内モンゴル自治区に関しては乳酒が流通する条件の歴史的展開が異なっている。中華人民共和国成立以降、政府は都市への人口流入を

厳しく制限しており、基本的には現在に至るまで戸籍制度を通じての都市人口のコントロールは継続している。特に文革時代（1968年～1978年）には「下放」などを通じて、都市人口の増加抑制が図られた。その後、改革開放政策下の経済成長に伴い正規の都市人口も都市への出稼ぎ者も増加するが、一般に内モンゴルを含む中国で都市域の拡大が顕著になるのは2000年以降の積極的な開発政策の導入以降である。ただし内モンゴルの場合、シリントホのように元来は寺院しかなかった場所に中華人民共和国成立以後、都市が建設された事例もあるため、都市への人口流入が皆無であったとは言い難い面も存在する（図6）<sup>11)</sup>。

さらに、内モンゴル自治区の場合はモンゴル国と異なり、区都のフフホトが全自治区の物流・人口流動の唯一の中心地となることはなく、また自治区レベルでのモンゴル族の文化的標準化の度合いはモンゴル国と比べてはるかに低いいため、乳酒の生産域が拡大したり、乳酒の広域的流

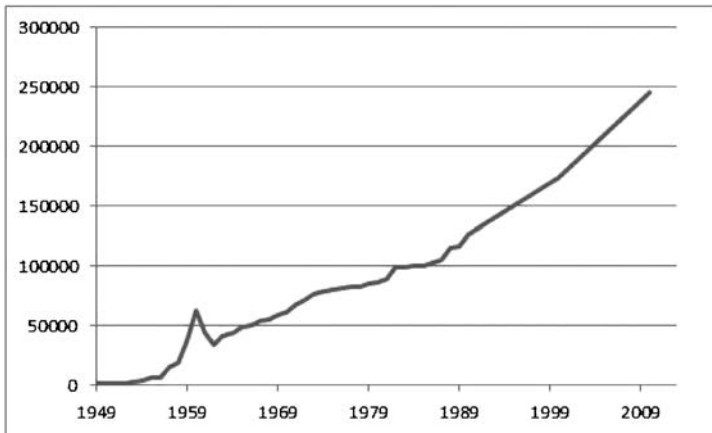


図6 シリントホ市の人口変化 (1949-2010年) (単位: 人)

出典: 錫林浩特市誌編纂委員会(編) 1999: 92, CITY POPULATION (<http://www.citypopulation.de>)

<sup>11)</sup> 1959年と1963年は行政区画が変化しているため、ここでのデータは連続していない。また人口データには牧民人口も含まれており、1990年の都市人口は10万人である〔錫林浩特市誌編纂委員会(編) 1999: 45, 91〕。なお、2000年と2010年については人口センサス(普查)の数値を利用したが、これは現地の戸籍を持たない外来人口も含まれている。

通が開始したりする契機に乏しかったと言えるだろう。なお、モンゴル国と同様、内モンゴル自治区でも 1950 年代後半から 1970 年代後半は社会主義集団化が実施され、牧畜地域の物流は人民公社（アルディン・ネグデル）や国营農場が担っており、1980 年代初頭より始まる人民公社の解体によって物流が民営化されるというプロセスをたどっている。また人民公社の解体は牧民にとって家畜の私有化をも意味しており、後述の事例から、馬乳酒の流通も 1980 年代より開始することが確認できる。

無論モンゴル国と同様、内モンゴルでも乳酒のうち馬乳酒のみが流通の対象となった背景には、何らかの前史が存在したものと想像される。一つの可能性は、小長谷が言及したシリントのモンゴル医学研究所など、医薬品としての利用である [小長谷 1992: 218]。また上述した、シリントの町の成立過程なども影響している可能性がある。後述するように、現在の馬乳酒の流通も大まかにはシリント盟内部にフフホト、オールドス、通遼などの都市を加えた程度の範囲であり、前史としての流通エリアも、シリント盟をカバーしていれば十分に説得的であると思われる。

なお尾崎は先行研究から、現在の内モンゴル自治区における牧地も、モンゴル国と同様に「郊外」と「遠隔地」に相当する空間の二分法が成立することを示唆した（尾崎 2011）。これは言うまでもなく、都市空間からの距離によって牧民の実践する牧畜戦略が異なっていることを示しているが、その背景についてはモンゴル国とは異なる。というのも、内モンゴルでは 1980 年代以降の「改革開放政策」により牧地も世帯単位に分与され、厳密には有期（30 年など）の利用権ではあるものの実質的には私有権に等しく、自由な季節移動も他所への移住も行えないのが現状である。さらに、政府が定める牧養力を超えて家畜を飼養してはならないとする「草畜平衡」政策の存在や、牧民に対する補助金の多くが世帯の牧地面積に基づいて支給されていることから、内モンゴル自治区において牧畜戦略に本質的に影響を与えている最大の要素は政策と牧地面積であると言える。

牧民世帯が保有する牧地面積は、人民公社解体時における各行政単位の人口密度とその後の相続・婚姻等の状況で左右される。その中で前者は、社会主義集団化時代に外部からの移民を受け入れた地域<sup>12)</sup>などで特異に人口密度の高い地域が見受けられるものの、一般的な傾向としては交通が相対的に便利な都市（旗中心地以上の定住地）に近い牧地は人口密度が高く、モンゴル国との国境地域に代表される遠隔地域の牧地は人口密度が低くなっている〔尾崎 2013 : 113, 116-118〕。さらに現在では、ツーリストキャンプなど都市の郊外でなければ選択しえない収入源があることも明らかになっている〔尾崎 2011 : 11-14〕。以上のような理由より、内モンゴル自治区の牧畜空間に関しても郊外と遠隔地という空間類型は意味を持つと考えられるが、本論で取り扱う内モンゴルの馬乳酒流通はモンゴル国におけるそれと同様、基本的に郊外の牧地に関わる現象となっている。

## Ⅶ 内モンゴル自治区における流通事例概要

本論で取り上げる内モンゴル自治区における馬乳酒の流通事例は、尾崎が2015年8月にシリングル盟シリンホト市およびアバガ旗で実施した訪問調査データに基づいている。すでに述べたとおり、シリンホト市とアバガ旗は古くより馬乳酒の生産が確認されている地域であり、また逆に内モンゴル自治区の他地域では家畜の搾乳そのものが行われなくなっている場所も少なからず存在するため〔尾崎 2013 : 117-118〕、当該地域を調査地として選定した。なお、シリンホト市はシリングル盟の中心地として17万人（2011年現在）<sup>13)</sup>の人口規模の都市と1.5万平方kmの土地を、アバガ旗は中心地に人口2万人（2011年現在）の小都市と2.7万平方kmの土地を擁する行政区画であり、土地の大部分が牧地と

---

<sup>12)</sup> 尾崎の調査地域では、人民公社ではなく、国営農牧場が設立された地域でこうした傾向が顕著である。

<sup>13)</sup> ここで挙げた人口は登録人口なので、実態とは多少なりとも乖離している可能性がある。

して利用されている内モンゴル自治区でも典型的な牧畜地域である〔内  
 蒙古自治区統計局(編) 2012: 684,686〕。

訪問世帯は、シリンホト市では共同調査者である内蒙古大学のバト氏  
 の知人1世帯、アバガ旗では現地案内人であったアバガ旗民族中学校の  
 オール氏の紹介による5世帯である(図7)。シリンホト市やアバガ旗  
 で馬乳酒を生産する世帯が多いとはいえ、オール氏や訪問世帯の人々に  
 よれば生産世帯は「1つのガチャ<sup>14)</sup>で数世帯から10世帯程度」であり、  
 外部に販売するほどの生産規模の世帯はさらに少ないとの認識であっ  
 た。1つのガチャにおける牧民世帯数は、尾崎の四子王旗・西スニト旗  
 の調査事例では80~200世帯程度と幅があるが、数世帯から10世帯と  
 いう数字は10%を下回るレベルであると考えられる。



図7 内モンゴル自治区における調査世帯等の分布および主要道路

<sup>14)</sup> ガチャは内モンゴル牧畜地域における行政単位の末端に位置づけられ、「村」と訳されることが多い。モンゴル国では「バグ」と呼ばれる。

なお、こうした馬乳酒生産世帯の少なさは、馬群を所有しているにもかかわらず搾乳しない世帯の存在も一部では存在するとはいえ、むしろウマそのものが飼養家畜として選択されにくい内モンゴル自治区の現状を反映している。世帯番号5の事例では2008年より乗馬クラブと馬乳酒の生産、および馬の生体販売を開始しているが、これは婚姻により妻の牧地を継承した同世帯の主人が、現地のウマの減少を危惧して着手した事業であり、同氏も「ウマはあまり儲かる動物ではない」と述べている。また騎乗用としてのウマの活用も、現在ではバイクなど内燃機関を利用した移動手段の普及と牧地の固定化により、「ウマに乗っていく場所がない」が「雪が降る冬だけはウマに乗る」（世帯番号1）程度の利用にとどまっており、すでにウマは牧畜生活に必須の家畜ではなくなっている<sup>15)</sup>。

図7で示している「ツェンゲルボラグ」は、世帯番号2の牧地が存在する場所で、馬乳酒の生産世帯が比較的多い地域であると現地では認識されている。世帯番号2の所在地として示してあるのは旗中心地にある自宅兼店舗（馬乳酒バー）の場所である。ただし自宅はツェンゲルボラグにもあり、夏は旗中心地、それ以外の季節はツェンゲルボラグで生活している。なお世帯番号2の馬群は、夏はアバガ旗中心地から30kmほど離れた友人の牧地で放牧しているとのことであった。

各世帯の牧地の所属行政単位および生産・販売履歴をまとめたものが表1である。大まかな傾向として、都市空間から離れると馬乳酒の販売傾向が下がること、本格的な販売は過去10年の傾向であり、また販売世帯の中には従来馬乳酒を生産していなかった牧民の新規参入も認められることが看取される。1980年代から馬乳酒を販売していた世帯番号1によれば、1990年代までは自前で輸送手段を持っていなかったため、都市から買い付けにやってくれば売っていたが、2000年に自動車を買って自前の輸送手段を持ち、また携帯電話の電波が届くようになって本格的な販売を開始したという。また2010年から馬乳酒の販売を開始した

---

<sup>15)</sup> 同様の現象はモンゴル国の郊外でも発生している [尾崎 2013: 115]。

表1 各世帯の牧地の所属行政単位および生産・販売履歴

世帯	牧地の所属行政単位	製造開始	販売開始
1	シリント市バヤンシル牧場	昔から	1980年代から。本格的に売り出したのは2000年代から
2	アバガ旗バヤントグ=ソム	昔から	2012年に旗中心地で馬乳酒バーを開店、それ以前はナーダムや宴会の時に販売
3	アバガ旗ビリグト鎮	昔から	2010年
4	アバガ旗ビリグト鎮	昔から	基本的に自家消費用だが、頼まれて売ることもある
5	アバガ旗ビリグト鎮	2008年	2008年、乗馬クラブも併設
6	アバガ旗イフゴル=ソム	2015年	自家消費のみ

表2 世帯主の年齢および各世帯の基本的な生産状況

世帯	年齢	機械化	搾乳頭数	製造期間	日販売量	備考
1	35	あり	30	6月～10月初	100 kg	自家搾乳のほか馬乳を購入
2	46	あり	75	6/1～9/1	85-90 kg	製造はアバガ旗中心地の店舗内
3	28	あり	13	6/7～11月初	50-55 kg	
4	70	なし	4	6/20～10月	自家消費	日産15 kg
5	38	なし	25	6/20～19/4	75 kg	
6	63	なし	1	7月～終了未定	自家消費	日産2 kg

世帯番号3は当初ウマの生体販売を目論んでウマを増やしたが、結局ウマの相場が下落したために利益の見込める馬乳酒の生産に切り替えたという。なお世帯番号2の牧地が存在するアバガ旗北部のツェンゲルボラグには馬乳酒の生産者が数世帯存在するが、現地で馬乳酒を生産しても売れないため、馬乳酒を販売している牧民は全て市場である旗中心地の近くへ移動して生産しているとのことであった。

表2は、世帯主の年齢および各世帯の基本的な生産状況を示したものである。すでに述べたとおり馬乳酒の生産で重要な労働は搾乳と攪拌であるが、現在の内モンゴル自治区では販売を目的として大規模に生産している牧民においてはメスウマの搾乳と放牧を担当する労働者の雇用と、15分で1000回攪拌できる馬乳酒製造機の導入が常態化していることがわかる。牧畜労働者に関して近年はモンゴル国から労働者を雇用する傾向が見られるが、これは過去2～3年で広まった現象であり、それ以前は内モンゴル自治区内で労働者を確保するのが一般的であったという。なおモンゴル国から労働者を雇用する最大の理由は牧畜労働者の不足であり、一般に人づてに労働者を見つけてくるという。

表2では自家消費となっている世帯番号6の事例ではメスウマ1頭を息子の友人に預託しているが、預託先では20頭のメスウマをモンゴル国の労働者を雇って搾乳しており、攪拌は手作業で行っているという。世帯番号6の主人は、生産された馬乳酒を必要に応じて貰い受け、自家消費に供している。なお世帯番号6がメスウマを預託している理由は、ウマが搾乳に慣れるまでは搾乳が難しいためだという。この世帯は馬乳酒の生産には2015年から関与しているが、400頭近くの馬群を所有しており、ウマの生体販売で主たる収入を得ている。つまりウマはいたが搾乳はしていなかった、というケースである。

一方、自家消費を主目的として馬乳酒を生産している世帯番号4については世帯主人が高齢なこともあり、高血圧治療など健康目的に飲むことが強調されており、また旧正月での飲用にも言及するなど、いわゆる伝統的な生産者の馬乳酒に対する意識を垣間見ることができた<sup>16)</sup>。この世帯も現在は20頭ほどのウマしか所有していないが、2000年の寒雪害で被害を受けるまでは70頭の馬群を持っており、メスウシの数も多く牛乳から蒸留酒も製造していたという。ただし現在でも牛乳の醸造酒は製造しているため、馬乳酒を選択的に残したというよりは蒸留を止めたと理解すべきだろう。また今回の調査データから、一般に若い世代の牧民ほど馬乳酒の販売に熱心である傾向がうかがわれる。

モンゴル国からの労働者の出身地について、調査事例に関しては東部のヘンティ・スフバートルや北部のセレンゲといった、モンゴル国の中では馬乳酒の大産地とはみなされない地域である点が興味深い。むしろ彼らはウマの搾乳や馬乳酒が作れるということで雇用されているわけであるが、出身地が馬乳酒を大々的に販売する長期生産地でないことや、あるいは彼らの出身地での家畜所有状況などが影響していることが想像される。労働者の年齢層は30歳前後から40代半ばであり、世帯番号3

<sup>16)</sup> 一般に内モンゴル自治区における馬乳酒の名称は「チェゲー」であるが、世帯番号4のみが「(メスウマの) アイラグ」という名称で言及していた。世帯番号4は牛乳を原料とした乳酒(メスウシのアイラグ)も生産し、世帯番号4の主人は「アイラグが(醸造した乳酒に対する)元来のアバガの語彙である」と述べていた。

の事例では4歳と2歳の子供を連れて来ていた。世帯番号5の事例ではスフバートル在住の男性とウランバートル在住の姉が2人で来ており、家畜の扱いは心得ているものの、モンゴル国内では必ずしも家畜の飼養で生計を立てている人々ではない可能性がうかがわれた。なお、搾乳方法については必ず最初に仔ウマによる催乳を経るモンゴル国式と、個体によっては催乳なしで搾乳を行うアバガ式の違いが認識されており、モンゴル国出身の労働者はモンゴル国式で搾乳を行っていた。一方、馬乳酒の生産方法についての地域差は認められず、彼ら自身も全く同じであると認識していた。

一方の馬乳酒製造機も導入は2014年頃からである。これは人力による攪拌作業を動力に置き換えただけの単純な機械であり(写真3)、価格は2000元(約4万円)と安価であるが、電線が引き込まれていないと使えないため、すべての牧民が購入しているわけではない<sup>17)</sup>。世帯番号2の事例では、ウマを放牧している牧地ではモンゴル国からの牧畜労働者が搾乳に従事しているが、そこには電線が引き込まれていないため、自動車で馬乳のまま夜間に旗中心地まで運び、店舗裏手に設置した製造機で馬乳酒に加工している。内モンゴル自治区では一般的に販売用の馬乳酒は搾乳間もない発酵の進んでいないものが好まれる傾向があり、世帯番号6の主人は「今日搾った馬乳は明日出荷しなければいけない」と述べ、世帯番号5の主人は「都会の人は乳の香りがするくらいの弱い発酵のものを好む」と述べていた。また世帯番号4以外の事例では、馬乳酒を大型の電気冷凍庫に保存することで発酵を止め、モンゴル国で一般に見られるような発酵の進んだ酸味の強い状態になる前の味を保持しようと努めていた。もちろん、電気冷凍庫も電線の引き込みが必須である。なお冷凍庫での保存は、旧正月時期の馬乳酒の販売も容易にする。世帯番号5によれば、旧正月期の販売価格は夏季のおよそ1.5倍

---

<sup>17)</sup> 電線の引き込まれていない世帯では風力や太陽光で発電し、バッテリーに蓄電している。牧民宅への電線の引き込みは内モンゴル自治区で定住化が完了した1990年代後半より始まっているが、一般的に電線や電柱など引き込みに必要な費用は牧民の自己負担である。



写真3 作動中の馬乳酒製造機

であるという。

また生産期間については、2015年より生産を開始した世帯番号6を除けば6月に生産を開始しており、終了期間にばらつきが存在する点も含めてモンゴル国と大きな差は見出しがたい。ただし終了の理由づけについては、特に早期に終了する事例において「ウマを太らせるため」（世帯番号2）、「草が乏しい」（世帯番号5）に加え、「9月になると学校が始まるので牧畜労働者が帰国する」（世帯番号2、5）と、労働者側の都合にも言及がなされていた。むろん長期間の生産を目指していれば、世帯番号3のように当初から長期の契約に応じる労働者を確保すれば良いだけであるが、逆に言えば自身が搾乳して細々と自家消費用の馬乳酒を製造するよりは家畜の栄養状態や牧地の保全が優先されると解釈すべきだろう。

## Ⅷ 内モンゴル自治区の郊外牧民にとっての馬乳酒の位置づけ

表2の日販売量と馬乳酒の生産日数より、牧民の年間販売量が推計可能である。積極的に販売を行っている4世帯の場合、年間で5~12t程度が販売されている。内モンゴルでの卸値は500g(1斤)で10元であり、モンゴル国における卸値(1ℓで1000トゥグルク:2014年尾崎調べ)の6倍以上(円換算による比較)<sup>18)</sup>となっている。以下では世帯番号1を例に、馬乳酒生産の収支を試算してみる。

世帯番号1に関する資産の収支条件は以下のようにになっている。ここでは6月初めから10月初めまで、約120日間馬乳酒を製造・販売している。居住地はシリント市内であるが、主な販売先はアバガ旗の乳製品店である。他にフフホト市のレストランにも販売しており、こちらは売値が500gで12元と若干高価であるが、出荷量が少ないため試算ではすべて上述の500gで10元という価格を適用する。買い手の電話注文に応じて出荷しており、1日の平均出荷量は100kg(200斤)、シリント市内まで自身が自動車で運び、そこから運送業者に委託してアバガ旗もしくはフフホト市まで輸送している。また馬乳が不足するため、1日40kg(80斤)ほど近隣の牧民から馬乳を購入し、世帯番号1で発酵させている。近隣の牧民が自身で馬乳酒を生産せずに馬乳を売る理由は馬乳酒の販売先の確保が容易でないことや、運搬手段や時間の都合で馬乳酒を出荷できないためであるという。なお、馬乳の買値は500g(1斤)で9元である。上述した馬乳酒の運搬代(燃料代および業者への輸送量)と馬乳の購入費のほかに、目立った経費としては労働者の人件費がある。人件費は月に3500元であり、世帯番号1では搾乳の有無を問わず馬群の管理のために通年で雇用している。

まず粗収入を計算すると、 $10\text{元} \times 200\text{斤} \times 120\text{日} = 24\text{万円}$ である。一方、支出はアバガ旗までの輸送費が500g(1斤)で1元なので2.4万円、シリント市中心部への往復(120km)のガソリン代は平均燃費を1ℓ

<sup>18)</sup> 双方を単純に円換算すると、モンゴル国では1tで約6万円、内モンゴル自治区では150kgで約6万円となる。

10 km、価格を  $1\ell$  6.23 元<sup>19)</sup> で 120 日分と計算すると  $6.23 \text{ 元} \times 12\ell \times 120 \text{ 日} = 8971.2 \text{ 元}$  となる。また人件費は  $3500 \text{ 元} \times 12 \text{ か月} = 4.2 \text{ 万元}$ 、馬乳の購入費は  $9 \text{ 元} \times 80 \text{ 斤} \times 120 \text{ 日} = 86400 \text{ 元}$  となる。粗収入からこうした支出を差し引くと、78628.8 元が純収入となる。なお世帯番号 1 の主人は、馬乳酒は 1 日 600 元くらいの純収入をもたらすと語っており、この試算 ( $78628.8 \div 120 = 655.24 \text{ 元}$ ) はインタビューのデータとも大きな祖語はない。また彼らの収入は半分がこの馬乳酒から、半分が家畜（ヒツジ 300 頭、ウマ 70 頭所有）の生体販売からもたらされるとのことであったが、年間の純収入が 15 万元を超える世帯は、現地の牧民としては比較的裕福な部類であるという。彼らが馬乳酒の販売で収入を倍増させているという事実が、馬乳酒販売の重要性を如実に示していると言えよう。

他の牧民においても馬乳酒の主な売却先は世帯番号 1 と同様、都市部の乳製品店であると回答していた。乳製品店と牧民の間にはある程度固定的な関係が存在し、持続的な関係を維持することが志向されている<sup>20)</sup>。無論、場合によっては馴染みのない業者ないしは消費者が生産者の元に直接買い付けに来るケースも存在する。この場合は購入者が知り合いである場合も、そうでない場合もあり、特に親しい友人などの場合は一般の市価より安い価格で売却することもあるという（世帯番号 4）。また乳製品販売店は仕入れた馬乳酒に 500 g（1 斤）あたり 3-5 元程度の利益を乗せて販売するため、消費者にとっては卸値で購入するより安価である。ただし燃料代などを考慮すると、消費者レベルで利益が出るほどの大量購入をするケースは少ないと思われる。例えば尾崎の調査中、世帯番号 2 の店に個人客がテイクアウトで購入したが、購入量は 12.5kg（25 斤）、価格は 500 g（1 斤）15 元であった。これをアバガ旗中心地郊外の牧民世帯まで直接購入に行くと 500 g（1 斤）12 元で購入できるが

<sup>19)</sup> 調査時のシリンホト市でのガソリン価格に基づく。

<sup>20)</sup> 辛嶋はモンゴル国の牧民が肉の売却において知り合いの商人との取引を優先させる傾向を、機会費用の引き下げを目指したものであると指摘している [辛嶋 2010 : 198-206]。内モンゴル自治区においても牧民は取引相手との信頼関係の有無を重視しており [児玉 2000 : 294]、本論で論じた馬乳酒の取引についても同様の傾向として理解できるだろう。

(世帯番号3、5)、差額75元のうちガソリン代で30-60元程度必要である(世帯番号3、5の場合)ことを考慮すれば価格での説明は難しく、味などの品質や人間関係(例:親族、友人、知人)といった要素が大きいと想像される。

一方、販売先の広がりについても人間関係は欠かせない要素である。世帯番号1のフフホトへの出荷先は知人を通じて確保したものであるし、世帯番号3は旗中心地に居住していた経歴がある上に漢語も流暢に話すため、個人の買い付けが多いと語っていた。世帯番号5は内モンゴル自治区南部のオルドスや東部の通遼などへも馬乳酒を出荷しており、またモンゴル国スフバートル県の知事を迎えた経験などもあるが、妻がシリングル盟の人民代表大会委員であることと無関係ではないと案内人は解説していた。また世帯番号2の馬群が夏に放牧されている草原は仲の良い友人から無償で借り受けているとのことであり、旗中心地での馬乳酒バーの経営も人間関係抜きには成立困難であることが示唆される。

もちろん、世帯番号3が語るように近年は過当競争気味で馬乳酒の価格が下落気味であることや、馬乳酒の味で生産者が選別されて誰でも売れるわけではないというのも事実だろう。その意味で、すべてが人間関係の論理で構成されていると理解するのも早計である。ただ現時点での解釈として、馬乳酒販売を目的とした大規模生産者になれる条件として、販売先に関する見通しは重要であり、それゆえに誰でも参入できる市場ではなく、結果として地域社会レベルで見れば生産者は少数に限られていると解釈すべきだろう。ただし、参入できる層に限って言えば、馬乳酒販売はやはり郊外でのみ成立する収入源であり、コストに直結するという面で立地が重要となる。

これをモンゴル国の郊外と比較すると、郊外への参入の自由度においてモンゴル国の高さが際立っているが、これは土地制度の違いに由来するものである。馬乳酒の生産規模は内モンゴル自治区と比較して小規模のケースが多く、あまり豊かでない層の現金収入獲得手段という意味合いが強いものと解釈できる。これは一定の資産(例:家畜、現金)や人間関係を持っている内モンゴルの馬乳生産者とは対照的である。またモ

ンゴル国の遠隔地居住者に関して馬乳酒は主たる現金収入の手段とはなっていないものの、売却可能性については内モンゴル自治区より高いと思われる。これは現状では馬乳酒購入者としての都市在住者がモンゴル国に多くマーケットが大きいこと、もしくはナーダム時期の需要が極めて大きく零細な郊外の生産者だけでは同時期の供給が追い付かないこと、旧正月前に馬乳酒を売ろうと思えば凍結状態で運べるため夏場より容易に運搬可能であることなどが理由として考えられるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

## IX 本論のまとめと今後の展望

本論での主要な論点を簡単に振り返ってみると、以下のように整理できるだろう。

- 1) モンゴル国および内モンゴル自治区で生産されている乳酒は、乳を乳酸菌発酵およびアルコール発酵させた醸造酒と、醸造酒を蒸留した蒸留酒に大別される。
- 2) 前近代における乳酒の生産と消費については、空間的な偏差が大きかった。乳酒は種類を問わず生産された地域で消費されており、交易など流通の対象とはなっていなかった。地域によっては、乳酒は儀礼食としての役割も担っていた。
- 3) 近代以降、モンゴル国においては社会主義体制下で醸造酒の一種である馬乳酒の流通が開始した。その背景には、都市化の進行とともに生産地域外で馬乳酒を購入する人々が出現した点や、農牧業協同組合などの政府組織が流通を担った点が考えられる。
- 4) またモンゴル国においては、近代国家としての文化的均質化の過程で馬乳酒の生産地域が拡大したが、内モンゴル自治区では生産地域の拡大は発生せず、また医薬品などとしての馬乳酒の流通も社会主義体制下では限定的であった。
- 5) モンゴル国では社会主義崩壊後、市場経済の浸透に伴い牧民の郊外化が発生した。地域郊外の牧民にとって、少なくとも馬乳酒を

大量に生産する地域においては、馬乳酒が家畜生体やカシミアと並ぶ重要な収入源となっている一方、遠隔地においても副次的な収入源としてではあるが都市への販売に伴う流通がみられる。

- 6) 内モンゴル自治区においても 1980 年代以降、馬乳酒を都市部へ流通させる牧民が出現し始めたが、本格的な流通は過去 10 年の現象である。生産地域はシリンホト市とアバガ旗に限定され、その中で都市に近い少数の牧民が販売目的で生産している。
- 7) 内モンゴルにおいては、牧地面積を主要因として郊外および遠隔地の牧畜戦略に二極化しているが、馬乳酒は郊外の富裕な牧民にとっての選択肢の 1 つとして位置付けうる。遠隔地での馬乳酒生産も継続しているが、生産地域が限られるうえ、地域内でもごく少数の牧民が自給的に生産しているのが現状である。

最後に、今後の乳酒の流通の在り方が牧畜戦略、特に遠隔地におけるそれに与える影響についての展望を試みたい。現状では、モンゴル国の遠隔地では注文等に関わる通信および都市への輸送手段がネックとなり醸造酒の出荷は盛んではなく、また理由は不明であるが蒸留酒に関しては社会主義時代も社会主義崩壊後も商業的な流通の対象とはなっていない。前者については、単に自家消費や贈与で消費したものを交易品に転化するだけなので牧畜戦略の在り方に変化を与える可能性は低いが、内モンゴルで指摘したのと同様の嗜好の変化は発生しうる。例えば森永による 2013 年のボルガン県・アルハンガイ県での調査では、地方政府などが主催で実施される「馬乳酒コンテスト」で入賞する馬乳酒として、しばしば低発酵のものが選ばれていたことが観察されている。

これは潜在的に、馬乳酒の生産・流通の在り方に影響を与える可能性がある。場合によっては冷蔵貨物車などで馬乳を都市などの定住地域へ運搬し、そこで馬乳酒を生産し始める可能性がある一方、そうした資本のない生産者が「売る手段がない」という理由で自家生産を最小限に抑える、もしくは生産を取りやめる可能性が中長期的には想像される。そうした場合、特に小規模生産地では牧民による生産がなくなり、馬乳酒生産の空間的な偏差が現在より拡大するだろう。

また仮に蒸留酒が流通の対象となった場合はどうだろう。その場合、影響を受けるのはウシの頭数であろう。例えば、尾崎の調査地であるスフバートル県オンゴン郡（Region I、遠隔地）を例に挙げると、1999年の寒雪害以降、ウシの頭数は減少してヒツジ・ヤギの小家畜に重点がシフトしている。その背景として、ウシは自家消費用の乳製品づくりか肉用に売却されるのみで用途に乏しく、一方のヒツジについては当地がモンゴル国内では美味な肉の産地の一つ<sup>21)</sup>という認識がされており高値で売れ、ヤギはカシミアの現金収入が確保できるので重宝されているという事情がある。無論、こうした社会的条件は他地域にそのまま適用するものではないが、全国的な傾向からもウシの頭数回復は概して緩慢であることから、消費面から見て食生活の重点が乳製品（ウシ）から肉（ヒツジ）へシフトしている可能性がうかがわれる（図8）。蒸留酒が流通対象となれば、遠隔地でウシを増やすという戦略がオプションとして加わる可能性はあるだろう。

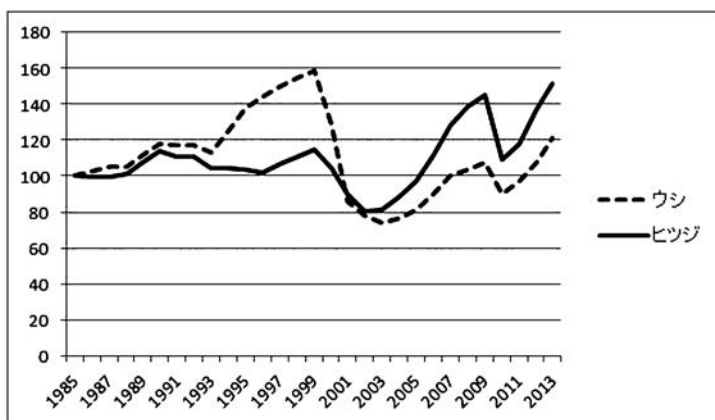


図8 モンゴル国におけるウシとヒツジの頭数変化(1985-2013年)(1985年値=100)  
出典：モンゴル国家統計局資料

<sup>21)</sup> モンゴル国では、一般的に乾燥度の強い地域のヒツジは美味であるとされている。なお近年は、他地域から運んできたヒツジをウランバートル郊外でスフバートル県のナンバーが付いたトラックに積み替えるという一種の産地偽装も行われているという。

一方、内モンゴル自治区ではどうだろう。既に同地では、都市近傍では乳用に特化してウシを飼養する牧民が存在する一方、遠隔地でのウシ飼養は肉用に特化し、仔畜の成長を重視した結果すでに搾乳を停止している牧民も珍しくない。さらに蒸留酒となると、生産者そのものが稀である。牛乳の価格下落に伴い、郊外の牧民が蒸留酒を復活させる可能性が皆無ではないものの、問題は出荷先の確保であり、乳製品店やモンゴル料理店などで蒸留酒を扱ったとして購入者が確保できるかは未知数である。馬乳酒に関しては今後フフホトや中国内地などのマーケットが拡大し、郊外と遠隔地の輸送コストの差が小さくなれば遠隔地の牧民にとっても選択肢として開かれる可能性はある。ただし既にウマが少ない現状<sup>22)</sup>で、牧畜戦略に大きなインパクトを与えうるかは疑問である。

なお、本論では取り上げなかったが、ウマ・ウシと並ぶ大型家畜としてラクダも存在する。1990年代以降、モンゴル高原のラクダは減少しているのが現状であるが、ラクダの乳酒（醸造酒）も薬効があるとして、モンゴル国のゴビ地域からウランバートルへ出荷している事例が存在する<sup>23)</sup>。こうした他家畜の乳酒への研究対象の拡大は今後の課題である。

## 付記

本論は平成27年度科学研究費助成金基盤研究(B)「モンゴルのアイラグ（発酵馬乳）の製造法の地理学的・生態学的検証」（代表：森永由紀）の成果の一部をなすものである。

---

<sup>22)</sup> 内モンゴル自治区におけるウマの頭数は1975年の239万頭をピークに減少傾向が続いており、2011年には77万頭となっている〔内蒙古自治区統計局(編)2012:298-299〕。

<sup>23)</sup> 尾崎は2009年8月に、ウムヌゴビ県ハンボグド郡中心地で、ラクダの乳酒を生産する小規模な工場を実見している。ただしここでは、加熱し発酵を止めてレトルト容器に密閉していた。

## 参考文献

- Batoyun, T., D. Erdenetsetseg, M. Shinoda, T. Ozaki and Y. Morinaga  
2015 Who is making airag (Fermented Mare's Milk)?: A nationwide survey on traditional food in Mongolia, *Nomadic Peoples* 19(1) : 7-29.
- 陳潮・陳洪玲(主編)  
2003 『中華人民共和國行政區劃沿革地圖集』中国地圖出版社。
- Эрдэнэсүрэн, Б. ба Бадрах, Ц.  
2013 *Монгол Улсын Хүн Ам Зүйн Түүхэн Товчоо*. ВСИ.
- 後藤富男  
1968 『内陸アジア遊牧民社会の研究』吉川弘文館。
- 平田昌弘  
2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店。
- 石毛直道  
1997 「モンゴル高原に白いご馳走を訪ねて」石毛直道(編著)『モンゴルの白いご馳走』17-52。
- 石井智美  
2010 「モンゴル遊牧民の職の変容—1 家庭の事例から—」『沙漠研究』19(4) : 537-543。  
2011 「内陸アジアの遊牧民の動物性食品と植物性食品の利用」『酪農学園大学紀要 自然科学編』35(2) : 17-31。
- 上村明  
2002 「馬の搾乳儀礼『ゲーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス』再考—儀礼の政治性と身体性をめぐって」小長谷有紀(編)『北アジアにおける人と動物のあいだ』pp.285-325、東方書店。
- 辛嶋博善  
2010 「機会費用の引き下げ方—モンゴル遊牧民と市場」中野麻衣子・深田淳太郎(編)『人=間的人类学—内的な関心の発展と誤読』、pp.191-209、はる書房。
- 柏原孝久・濱田純一  
1919 『蒙古地誌 下巻』富山房。
- 児玉香菜子  
2000 「現代都市モンゴル族の文化変容と社会経済的動態—中国内モンゴルにおけるある都市民モンゴル家族の暮らしから—」『沙漠研究』10(4) : 287-300。
- 小長谷有紀  
1992 『モンゴル万華鏡 草原の生活文化』角川書店。
- 水谷潤  
1997 「内モンゴル紀行一次調査」石毛直道(編著)『モンゴルの白いご馳走』pp.53-72、チクマ秀版社。
- 内蒙古自治区統計局(編)  
2012 『内モンゴル統計年鑑 2012』中国統計出版社。

- 野沢延行  
1991 『モンゴルの馬と遊牧民』 原書房。
- 小貫雅夫  
1985 『遊牧社会の現代』 青木書店。
- 尾崎孝宏  
2008 「モンゴル牧民社会における郊外化現象—ポスト「ポスト社会主義」的牧民の出現に関する試論」高倉浩樹・佐々木史郎(編)『ポスト社会主義人類学の射程(国立民族学博物館調査報告78)』pp.481-499、国立民族学博物館。
- 2011 「内モンゴル牧畜における土地利用の現状—四子王旗、農牧境界地域の事例」『人文科学論集』73:1-25。
- 2013 「自然環境利用としての土地制度に起因する牧畜戦略の多様性」『沙漠研究』23(3):111-118。
- 高倉浩樹  
2012 『極北の牧畜民サハ—進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭和堂。
- 梅棹忠夫  
1990(1952) 「モンゴルの飲みものについて」『梅棹忠夫著作集 第2巻 モンゴル研究』pp.353-379、中央公論社(初出:ユーラシア学会(編)『遊牧民族の社会と文化—ユーラシア学会研究報告』177-200)。
- Vreeland, H. H.  
1953 *Mongol Community and Kinship Structure*, New Haven: HRAF.



---

---

# 運転手からみた自動車輸送

## —モンゴル国西部の零細業者による 輸送経路の形成と維持—

寺尾 萌

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

### I はじめに

現代社会において、自動車がつなぐ輸送網とそれによる生活や生産・流通・消費の流れにおける移動性が距離・速度ともに高度化していることは、いうまでもない前提になりつつある。われわれが利用するものは国外を含む遠隔地から運ばれてきており、その生産にも複数の地域が常に関わっている。われわれ自身も常に高速で移動して様々なものを利用・消費している。

現在のモンゴルでも、国内の自動車による人・物の移動が急激に活発化しているが、それを支えているのは個人で輸送業を営む零細の運転手たちによる、小さな輸送経路のあつまりである。彼らは、人に加えて、個人の手紙や書類、急に必要になった日用品、小売店の店先に並べる商品、地方の人びとが遠く離れた都市に注文して購入した電化製品、そして牧民が街で売の家畜や屠畜した肉まで実に多様で大量なものを運ぶ。東西約 2400 km、南北約 1300 km にわたる広大な国土に約 300 万人という少ない人口が分散して暮らしているモンゴル国においては、人や物の移動そのものが長大な過程となる。そのなかで長距離輸送を行う運転手たちは、運転技術や社会関係など様々な資源を動員して長い道のりを乗りこなしている。本章では、モンゴル国において人・物の長距離輸送を行う零細の運転手たちの輸送実践を記述することにより、ローカルな輸送網の構築と維持において、彼らの活動がいかにかに寄与しているのかを明

らかにする。

### 1 長距離自動車輸送に関する先行研究

道路や高移動性にまつわる問題は、常に近代化やグローバリゼーションとの関係において議論されてきた。2012年に雑誌『モビリティ』で「道路と人類学 (Road and Anthropology)」と題する特集が組まれた。そのなかで、編者であるダラコグロウとハーヴェイは、道路というインフラが情報と物の流通および労働者の創出をめぐって、中心と周辺の間で生じる収奪的経済の基盤となっていることを認め、道路がそれまで社会的意味を有さない「無-場」[Auge 1995]としてポストモダンの懐疑の対象となってきた動向を指摘しながらも、しかし道路は社会的コネクティビティを保証するのみならず、多様な諸関係性を形成する場であって、そこに場所性を見出す潮流が存在すると主張した [Dalakoglou and Harvey 2012 : 463]。

長距離輸送業者に関する人類学的研究も数は多くないものの、上記のような研究に位置づけることができる。例えばアルヴァレスとコリアーは、アメリカのカリフォルニア州とメキシコの国境を行き来するトラック運転手たちの相互行為に注目した研究を行った。二人は、北部メキシコの企業家たちによる輸送業が相互監視的な環境で運転手を酷使しながら国境を越えてマーケットを拡大する一方で、マヤの先住民シナカンタンによる企業は協力的で互助的なエスニック・コミュニティを国境地帯に広げることで運転手を酷使しない長距離輸送を実践していることを明らかにし、国境を貫く道において展開する輸送ネットワークを、政治経済的な、またローカルな状況に即して意味づけた [Alvarez and Collier 1994]。

また、今日の人類学的研究においては、移動が発着地を結ぶ固定的なネットワークとしてのみならず、まさしく「動く」ということそのものの動態性において見直されてもいる [祖田 2008 : 13]。その点において、マルチサイト民族誌 [Marcus 1995] に端を発し、移動する人々と、時空間を含む様々な対象との間の諸関係性とともな絶え間なく移動する

フィールドを対象とした「移動人類学 (mobile anthropology)」[Watts and Urry 2008] に自身の研究を位置づけるスタインは、南アフリカの長距離トラック運転手たちの日々の「探検」[Steyn 2015 : 62] に関する魅力的な民族誌において、運転手たちを、熟練の技術者や「ヒーロー」のように長い道の真っ只中を冒険する、自由でロマンチックな存在として描いている [Steyn 2015 : 69]。

これらの諸研究は、生産から消費までの諸地点における経済的諸役割の間隙で看過されがちな輸送業者の実践について、取引と取引の間にある存在として焦点化し、その政治経済的な意味づけを行い、さらに動くことそのものから彼らの生のあり方を明らかにした点で意義がある。一方で本稿の問題意識に沿って上記の先行研究の課題を指摘するならば、それは輸送ネットワークの中のインフォーマルな領域に関する視座の不在である。上述したような長距離輸送を扱った人類学的先行研究 [ほかに Rothe 1991] は、グローバル化や資本主義経済のただ中で生きるトラック輸送運転手たちの相互行為や主体的営為を、輸送行程のマネジメントとして意味づけるものであった。そこでは、運転手たちの実践におけるリスクや不安定性は、雇用する会社やオーナーの不利益や、それに起因する減俸、過労による事故といった問題に帰結する。一方で、オーナーや会社から与えられる輸送経路や輸送物、そして輸送用のトラックなどが環境として用意されているという点で、彼らのおかれている状況は固定的であり、安定しているのである。

これに対して、本章でとりあげるインフォーマルで極めて零細な運転手たちにとっては、安全な車や輸送経路そのものが自ら獲得する対象なのであり、彼らの主体的に選択していく自由な実践は、流動的で不安定なものとなる [cf. 関本 1980 : 379-381]。彼らは結果として輸送網の集合体を形成しているのであるが、実際には、そもそも「動く」ためのセーフティネットも自ら築かなければならない。したがって、本章では零細の長距離バス・トラック運転手たちの具体的な実践において、そうした不安定性に対処するため、あるいは運行を安定させるための諸方法に注目する。

## 2 調査地と調査方法

本章のもととなるデータは、モンゴル国西部の4地点において、2015年11月から2016年2月にかけておこなったフィールドワークに依拠している。4つの調査地は、ホヴド県の中心地ホヴド市、ホヴド県アルタイ郡、オヴス県の中心地ウランゴム市、オヴス県マルチン郡である。その間に運転手10名から聞き取り調査をおこない、6本の短・中距離乗合タクシー、4本の長距離バスに乗車して参与観察をおこなった。調査した運転手は全て男性であった。

最初に、本章に関わるホヴド県およびオヴス県の地域的特徴を述べておこう [図1、図2参照]。ホヴド県とオヴス県は、モンゴル西部に位置している。東部に比して乾燥地帯であるモンゴル西部では近年極端に降雨量が減少し、干ばつや雪害が多発するようになった。さらに、中部に集まる諸都市との距離が大きい西部地域は、すなわち中央市場との距離も大きく、中・東部との間で経済格差が生じている [藤田ほか2010: 416-435]。そのため、牧畜や雇用等のより良い環境を求めて都市部への大規模な人口流出がおこり、それに伴って人・物の移動性も高まってきた。また、一時的に都市部の市場や中心機能にアクセスするために、最も長距離を移動しなければならない地域でもある。本章では、そのなかで



図1 調査地の位置関係（線描したのは2県の中心地から首都ウランバートルとの間を自動車で行く際の経路）

出典：Google map に基づき筆者作成

も地方（郡）と都市（首都）を結ぶ輸送経路が、不安定で閉ざされているオヴス県マルチン郡と、比較的安定的につながっているホヴド県アルタイ郡の事例を比較する。

最新の道路事情を反映させた『交通道路網地図』によれば、ホヴド県の中心地から首都ウランバートルまでは 1446 km、オヴス県の中心地からウランバートルまでは 1382 km の距離があり、現在では道程の 9 割以上がアスファルトまたはコンクリートの舗装道路である [Zurag zui XXK 2015]。

各県の中心地と各郡の中心地を結ぶ道路の舗装状況は場所によって様々である。たとえば、オヴス県の中心地ウランゴムからマルチン郡へ向かう道路約 140 km のうち、8 割以上が未舗装であるが、ホヴド県の中心地からアルタイ郡の中心地へ向かう道路約 270 km は 2014 年に完全な舗装道路となった。また、ホヴド県は南に中国の新疆ウイグル自治区と接する国境があり、オヴス県は北にロシア連邦トゥヴァ共和国との国境をもっている。

各県には公共機関である「自動車運輸課」があり、人輸送部門と物輸送部門にそれぞれ 2～3 社の民間企業が登録されており、フォーマルな運行を行っている。これとは別に、インフォーマルな個人経営として、県内外の各地を結ぶ短・中・長距離輸送業者も存在する。



図2 オヴス県の中心地ウランゴムとマルチン郡の位置関係  
出典：Google map に基づき筆者作成



図3 ホヴド県の中心地ホヴドとアルタイ郡の位置関係

出典：Google map に基づき筆者作成

## II 現代モンゴルにおける自動車利用と長距離輸送

### 1 道、車、流通

モンゴルにおいて自動車利用が急激に増加したのは、2000年代後半に入ってからのことである。首都ウランバートルの登録自動車数は毎年数万台の単位で増加しており、自動車利用の増加速度に道路整備が追いつかずに主要道路では慢性的な渋滞が発生するようになった。首都における桁違いな増加を除くと、都市近郊2県およびそこから最も遠いモンゴル西部5県の自動車登録数には同程度の増加がみられ、地方部においても自動車の増加が顕著であることがわかる [表1]。首都と地方を結ぶ道路についても、2000年代初頭から道路の整備が進み、近年は舗装道路が著しく増加している [図4]<sup>1)</sup>。

<sup>1)</sup> 2000年からモンゴル国政府は東西を結び人・物の移動を活発化させるための道路整備、いわゆる「ミレニアム道路計画」を進めてきた。2004年から2005年には全国各自治体の創立80周年、2014年から2015年にかけては同様に創立90周年の記念事業が相次いだため、その一環として全国各県内の道路整備が急激に進行したという背景も、図1に示したグラフから読み取れる。

表1 モンゴル西部各県および首都近郊の登録自動車数の経年変化

県	2006	2008	2010	2012	2014
バヤンウルギー	4,581	4,623	5,152	5,763	9,120
ゴビアルタイ	2,553	3,451	3,453	4,430	5,013
ザヴハン	2,684	4,683	3,467	4,297	5,275
オヴス	2,563	3,472	3,947	4,903	6,753
ホヴド	3,096	3,263	4,777	5,736	6,831
トウヴ	3,578	5,242	5,175	5,488	6,996
ダルハンオール	3,499	4,793	5,296	8,237	9,177
ウランバートル	79,135	106,848	162,710	228,952	297,008

出典：National Statistical Office (2015) により筆者作成

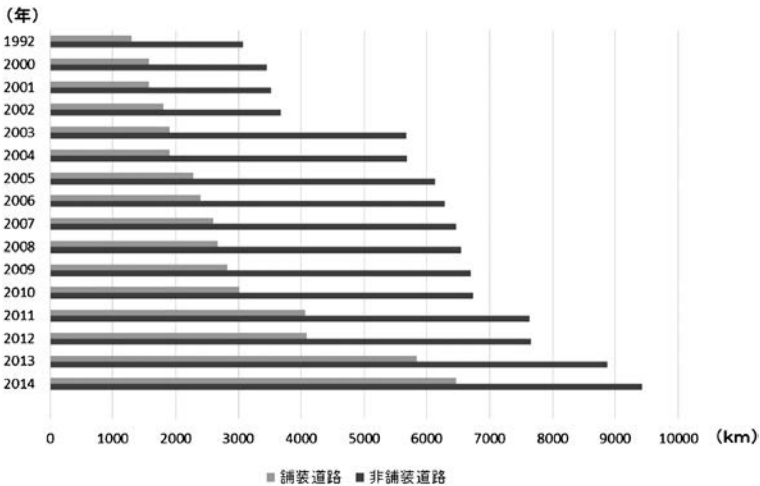


図4 モンゴルの国内整備道路全長

出典：National Statistical Office (2015) により筆者作成

このような状況において、モンゴルでは諸個人が人・物の輸送をかつてより簡単に、頻繁に行うことができるようになった。公共交通機関としては、各県と首都ウランバートルを往復する高速バスが運行され、個人営業のマイクロバスや、「ミクロ」(mikro) と呼ばれるワンボックスカーを用いた乗合タクシーも、双方向へ運行している。各地の市場や長距離輸送車の停車場では毎日、フロントガラスに行き先を示したカードを貼ったトラックやバス、ミクロが隙間なく停まり、運転手たちが行き先を叫んで客を集める声が飛び交っている。

各県とウランバートルの間だけでなく、近隣の複数の県や郡の間を往還する乗合タクシー経路も発達し、モンゴルの人々はそれらの交通網を複合的に利用して、より広範囲を短いスパンで移動する。また、公共機関、個人営業の双方においてバス・タクシー運転手は荷物の輸送も行っており、積載可能なものはなんでも運ぶため、遠隔地間で個人同士が物資をやり取りすることも容易である。

以上をまとめると、人・物の大規模な輸送を行うのは首都と地方の間（以下、首都間とする）で公共機関が運行するバスや食品加工業等の大企業が直接雇用して運行するトラックの運転手であり、その隙間でローカルかつ個人的なニーズに応え、小規模な輸送を行っているのが個人経営の長距離輸送車運転手であるということが出来る。前者はフォーマルな輸送網、後者はインフォーマルな輸送網をなしている。そして、後者の個人による極めて零細な輸送業に大きく依存することによって物流全体がうまくいっているというのが、広大な土地に分散して暮らすモンゴルの人・物輸送の特徴であるといえよう。

モンゴルにおいては個人による運輸業には長い歴史がある。社会主義的発展のための政策の一環として、1934年の国会において運輸業のほか商業、手工業などの個人経営を認める決議がなされ、政府は非資本主義的な経済発展のために小規模個人経営の積極化を図った〔モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) : 344-345〕。牧民たちは大型家畜（ラクダ、ウシ、ヤク）による輸送を個人事業として行い、自動車の導入による近代的運輸における大転換の兆しが見えていた傍らで、それは長く中心的な役割を果たし続けていた〔モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969) : 346〕。民主化を経た現代においても、個人による運送業は自動車輸送へと形をかえ、モンゴルにおける人・モノの輸送の大部分を担っている。このことの背景には、社会主義体制崩壊後の移行期において、市場経済化に伴う支援政策を実施しない「ショック療法」が採用され、その結果としてインフォーマルセクターが拡大したことが関係していると考えられる〔西垣 2009 : 415-416 ; ロッサビ 2007 (2005) : 113〕。

本章の問いをくり返し述べるならば、それは以上のようなモンゴルの

ローカルな経済を支えるインフォーマルな領域が、運転手たち自身によっていかに築かれているのかというものである。その流通網は運転手たち個々の努力によって、柔軟で利用しやすい便利なものとして成立している。以降では、その輸送網のなかで、彼らがいかなる実践をしているのかを具体的にみていこう。

## 2 インフォーマルな輸送業を営む運転手たち

まず、西部モンゴルにおける人・物の輸送を個人で行う運転手たちについて理解するために、オヴス県およびマルチン郡を例にその概略を以下に示す。なお、その全体像を地方における輸送状況のモデルケースとして図5にまとめた。

人・物の輸送ができる運転手の基本的な条件として、自動車輸送にかかわる特殊免許の取得、車の所有、故障した車の修理能力が挙げられる。モンゴルの運転免許には6種類があり、バイク運転(A種)、普通自動車運転(B種)、3tまでの荷物の輸送(C種)、8人以上の人の輸送(D種)、3t以上の大型トラック運転(E種)、そして国際運転免許に分けられる。運転手たちが所有する車種も、それぞれが取得している免許に対応しており、このうち、マルチン郡に居住して個人運送業を営んでいる運転手たちは、おおむね普通免許に加えてC免許とD免許を取得している。

運転手たちが所有する車は、用途に応じて①バンもしくはワンボックス、②バス、③トラック、④トレーラーの3種類があるが、その中でも大きく分けてロシア製の車、韓国製または日本製という二種類がある。ロシア製の車はモンゴルにおいてもっとも歴史が古く、とくに年長者がその構造を熟知しており、また、修繕にかかわる情報や部品の共有が容易であるという利点もある。しかし、隙間風、故障しやすさ、燃費の悪さ等のデメリットもあり、都市部や市街地では韓国製や日本製のワンボックスカー、トラック、大型バスへの乗り換えが進んでいる。そのなかでも「マイクロ」とよばれて親しまれているワンボックスカーは、人・物の自動車による軽輸送の象徴となっている。

長距離の移動や悪路での運転による道中での車の故障には運転手自身

が対応しなければならない。長距離を移動すれば車の消耗も激しく、広い国土に分散して暮らすために集落がまばらなモンゴルでは、街も家庭もなく整備環境のないところで立ち往生するリスクが高い。したがって、運転手たちはそれぞれに自動車の構造に通じており、補修技術も独学で身につけている。

このように、免許の取得、自動車の所有、修理技術という条件をクリアした者が自動車輸送業を営むことができる。次に、運転手の基本的な仕事の仕方として、モンゴルの地方部における輸送業の全体像を、マルチン郡を例にしながら簡単に理解しておきたい。

### 【郡－県間の人輸送】

マルチン郡とオヴス県の中心地ウランゴムを往復する乗合タクシーの運転手は、出発日の前日に同乗希望者を募ったうえで、翌朝乗客を乗せてウランゴムへ向かう。そして、同日夕方にウランゴムから出発するときには、注文されて市場で買い付けた商品や、ウランゴムからマルチン郡へ向かう人たちを乗せる。マルチン郡から同乗する客が集まらなければ出発を見合わせることもあるが、たいていの場合は一台につき最小運行人数である5人程度はすぐに乗客を集めることができる。運転手たちの多くは、「ボルガン」と呼ばれるロシア製のバンを所有している。荷物を多く載せるときには後部座席は取り外し可能で、人を乗せるときには最大12人分の座席を装着できる。

ウランゴムとの間は片道130km、3時間程の道のりである。運賃は大人ひとり片道10,000トゥグルク（約600円）と決められていて、誰の車に乗っても同じ金額を支払う。大きな荷物を載せる場合は1包1,000から3,000トゥグルクで請け負う。

現在マルチン郡で日常的に輸送業を営んでいるのは、筆者の知る限りマルチン郡全体で10名、毎日3～5人の運転手であり、彼らは自身の都合に合わせて交代でウランゴムとの間を往復する<sup>2)</sup>。

---

<sup>2)</sup> 人々は郡から首都へ直接アクセスする手段を日常的にもっているわけではない

一方で、全ての運転手が上述したような日常的な仕事をするわけではない。他のほとんどの運転手は日常的に仕事をするわけではなく、依頼があったときに単発で仕事をするためその全体を量的に把握するのは困難である。彼らは、本業の傍らで輸送の仕事をしている場合もあれば、副業のない場合もある。以下に示すのは、そのような、必要なときのみ単発で仕事を行う「潜在的な」運転手たちによって支えられている4ルートである。

### 【郡－県間の物輸送】

郡と県間の物輸送を行う運転手たちは、日常的に仕事をするのではなく、知人の依頼を受けて定期的に物の輸送を請け負う。典型的な依頼は食品・日用品の小売業を営む店主からのもので、市場や卸売店から大量の商品を運ぶ。運賃は往復のガソリン代+手間賃であり、トラックの燃費にもよるが、一回で300,000トウグルク（約18,000円）程の支払いが発生する<sup>3)</sup>。手間賃は任意だが20,000から40,000トウグルク程度が上乘せされ、それに加えて余ったガソリンが運転手側の利益となる。小売店の店主は、仕入れする商品が少なければ乗合タクシーの運転手に輸送を依頼するが、商品が多い場合にはトラックの運転手を雇って運ばせる。

また家畜所有者が大量の生きた家畜を市場で換金する際には、トラックを所有する運転手がそれを県の市場まで運ぶ仕事を依頼される。羊毛やカシミヤを換金する春季には、ウランゴムや近隣の県から獣毛の買い取り商人が訪れ、冬には暖房用の石炭を売る運転手や、屠畜した肉を買い取る運転手がやってくる。これらも収益の見込める時期を狙ったトラック所有者の仕事である。この郡－県間の物輸送は単発で行われるも

---

が、ウランゴムを経由して運転手に物を預けるなどすれば大抵の用事を済ませることができる。しかし筆者の知る限りでは、人々がそのようなして物を送るのは、よほど急いでいるときに限られる。たいていの場合、彼らは郡から首都へ向かう予定のある人について噂話をとおしてよく知っており、親族や友人が首都へ行くと聞くなり、送りたいと思っていた物を託す。

<sup>3)</sup> これはマルチン郡における平均的な月収に相当する金額である。

のであるが、家畜所有者や生活者と市場とを結ぶ経路であるために利用頻度は高い。大抵は利用者からの依頼に応じて運転され、そうでなければそれぞれの商品需要が増加する繁忙期のみ運転する季節性のものである。モンゴルの一大産業である牧畜と密接な関係がある仕事であるが、公共事業としてのフォーマルな季節便や定期便がないことも合わせて記しておく必要があるだろう。

#### 【郡－首都間の人輸送】

マルチン郡では、郡－首都間の人輸送は夏季にのみ運行されている。夏になると、首都で暮らす大学生が夏休みで帰省したり、夏祭り「ナーダム」の開催に合わせて首都で暮らす郡出身者やその家族が故郷を訪れるため、首都間を移動する人が増える。マルチン郡ではその時期に、数名の運転手が郡と首都を直接往復する乗合タクシーの運行がある。2015年の夏は、ナーダム後の8月末に35人乗り中型バス1台と、12人乗りのロシア製バン1台がそれぞれ1往復ずつ首都との間を行き来した。運賃は片道65,000トゥグルク（約4,000円）で距離は1320km、2日間かけて首都へ到着する。2日間ひとりで運転するのは危険なので、助手の運転手1名を雇い、2人で運転を交代する。

郡－首都間の運転手は、原則として同乗する客個人の荷物以外は原則として請け負わないが、往路と復路で立ち寄る食堂の店主などに頼まれた物があれば買って積んで行く。

#### 【郡－首都間の物輸送】

一方で、郡－首都間の物輸送は、晩秋、屠畜した肉が完全に凍る頃に、短期集中的に運行される。秋の間に肥えた家畜をまとめて屠畜し、首都で暮らす学生や親族に冬越し用の肉を送るのである。郡から首都に直接ものを送るのは困難であるが、肉を子に送ることは必要不可欠であり、運転手がその需要を見込んで運行をするのである。2015年には合計5人の運転手がそれぞれ1往復した。その時期になると、掲示板に出発日を知らせる広告が貼りだされる。首都へ肉を送りたい人々はその広

告をみて運転手に依頼する。荷物は1kgにつき500トゥグルク(約30円)で、車種は様々だが、近年では韓国製の1tトラックや2tトラックがスタンダードになった。

### 【国外からの人・物輸送】

モンゴルの西部は新疆ウイグル自治区との国境が近いために年に数回国境近くに開設されている市場に買い付けに行く店主もいる。その場合には、店主たちは共同で、国際免許を取得している乗合タクシーの運転手を雇い、さらに仕入れる見込みの商品量に合わせて1tから5t程度のトラックを所有している運転手を連れて仕入れに行く。ホヴド県南端にある国境までは1日で到着し、国境外の市場で2泊から3泊して買い付けをおこなうという。マルチン郡から国境までの距離は700kmで、乗合タクシーの運賃はひとりにつき片道30,000トゥグルク(約1,800円)、トラック運転手には燃費に応じてガソリン代+ $\alpha$ を支払う。また、ウランゴムの市場からも定期的に新疆との国境へ向かうタクシーやトラックが待機しているため、それを利用することもあるという。トラックの運転手にはC免許に加えて国境の出入国のためのパスポートと国際免許が必要である。

2014年11月にはロシア連邦諸国へのモンゴル人の入国にかかるビザが免除され、さらにルーブルの価値が暴落した影響で、零細の小売店を経営する個人がオヴス県の北端で国境を接しているトゥヴァ共和国へ買い付けにいくルートを開拓しつつある。トラックを利用して大量に買い付けるといった例は確認しておらず、大型の乗合タクシーで数人の店主が同行する。運賃は片道10,000トゥグルクである。

以上に示したオヴス県およびマルチン郡で展開されているインフォーマルな人・物輸送の概要は、地方における零細輸送業の大まかな見取り図と考えて良いだろう。恒常的な利用者が獲得できる郡-県間の乗合タクシーは常時運行されている一方で、その他の輸送は全て単発運行である。必要となきのみ単発で仕事をする運転手たちは、潜在的な存在ではあるものの、モンゴルの輸送業の大きな裾野を形成している一群であ

		運行状況	輸送対象
郡-県間の人輸送 	距離:140km 時間:2-3時間	毎日複数台運行。 大人1名片道10,000T。 物輸送も行う。大きな荷物を載せる場合は1包1,000-3,000T。	乗客、個人の依頼による単品の日用品、小売店の依頼による商品(小口)、家畜(少数)など。
郡-県間の物輸送 		依頼や必要に応じて運行。 たいていは小売店の店主から依頼がある1回につき約300,000Tの支払い、利益は20,000-40,000T。	小売店等の依頼による商品(大口)、家畜(多数)など。 運転手は個人で石炭や獣毛の行商をすることもある。
郡-首都間の人輸送  	距離:1320km 時間:0泊2日	需要が増加する夏場のみ運行。 大人1名片道65,000T。 乗客の荷物以外は原則として運ばない。	乗客、乗客の持ち込み荷物など。
郡-首都間の物輸送  		需要が集中する屠畜の時期に複数台運行。 運賃は500T/kg。 その他、依頼に応じて単発で運行することもある。その場合は依頼主と交渉のうえ、燃料費+ $\alpha$ の支払いを受ける。	肉、小売店等の依頼による商品、個人の依頼による日用品など。
国外への人輸送 	<ロシア側> 距離:170km 時間:3-4時間	国境の市場で買い付けをする小売店経営者らの依頼により運行。 運賃はロシア側まで片道10,000T、中国側まで片道30,000T。	買い付けをする小売店経営者など。
国外からの物輸送 		<中国側> 距離:700km 時間:15-18時間	国境の市場で買い付けをする小売店経営者らの依頼により運行。 依頼主と交渉のうえ、燃料費+ $\alpha$ の支払いを受ける。

clipart by illpop.com

図5 マルチン郡で運行されている中長距離輸送車の概要  
出典: 筆者作成 (クリップアートは illpop.com による)

る。インフォーマルな運転手たちの立場は安泰ではなく、需要を超える供給が発生すれば、安定した収益は見込めない。また、首都との間を行き来する長距離移動は、常に多数の利用者がいる経路ではないうえに、車の消耗が激しいためにメンテナンスに手間をかけ、補助の運転手を雇

う必要がある。そのため、マルチン郡では現在は恒常的に首都と郡を結ぶ人・物輸送経路が存在せず、確実な需要が見込める一定期間のみ運転手が自発的に経路をつないでいる。その他の場合は、利用者が高額なガソリン代と運転手の手間賃を全て負担しない限り、フォーマルな長距離輸送を利用するために県の中心地を経由する必要がある。

#### IV インフォーマルな経路の獲得と維持

上述したように、運転コストの高い長距離輸送は、恒常的な運転が行われにくい不安定な経路であるといえる。しかしながら、本節で取り上げる長距離輸送業の運営を継続して行えるアルタイ郡の運転手たちは、そうした不安定な環境において自己自身のもつ様々な資源を導入し、恒常的な輸送経路を確立している。は。本節では、長距離輸送を営んでいる運転手たちの具体的な実践をとりあげ、彼らがいかにして経路と運営を維持しているのかをみていく。

##### 1 安定性と不安定性

以下に、不安定ながらも運行を続ける運転手たちの継続努力の例を示す。

##### 【事例 1】 安定から不安定へ

現在オヴス県マルチン郡で夏季限定の人輸送を行っている運転手 GN は、かつてマルチン郡から近隣の数郡を周り首都へと向かう乗合バスの運転を、オヴス県の公共機関である「首都間旅客輸送」の契約運転手として行っていた。

現在 42 歳の GN は、学校を卒業してから木工品製作をして資金を貯め、2004 年にロシア製のトラックを購入して C 免許と D 免許を取得、運転手の仕事を始めた。2004 年から 2011 年までの 7 年間は、仕入れに出かける小売店の店主たちを集めて新疆へ出て、仕入れた商品を輸送していた。また、冬季には石炭を首都から購入してきて、マル

チン郡で個人向けに小売りする仕事もしていた。

この頃、妻の妹の夫がオヴス県の中心地で「首都間旅客輸送」の契約運転手をしていた。2011年、彼が使用したバスを買い替えたために、GNは彼がそれまで使っていたバスを買い取り、同じく「首都間旅客輸送」と契約して、マルチン郡と首都を往復する人輸送の仕事を始めた。金曜日にマルチン郡を出て、日曜日に首都に着き、月曜日に首都を出て水曜日にマルチンに着くという往復の旅程で、ひと月に4往復する契約の仕事を、2年間続けた。

その仕事を辞めた理由は、「首都間旅客輸送」の規約にある。公共機関が運行する人輸送用のバスは、10年以上使用してはならないという決まりがある。バスを売ってくれた本人が新品で購入した後に8年使用していたので、残りの2年間だけ運行することができた。現在でも当時の契約が残っているから新しくバスを買えば運行が可能だが、高価なので諦めたという。

2011年以前に使っていたトラックが古くなり、修理や買い替えも難しいので放置している。現在は、教師をしている妻の収入で暮らし、依頼があれば所有しているロシア製のバンで人・物を輸送するし、夏にはウランバートルの間を数回往復する人輸送を行う。年に1度か2度しか郡-首都間の人輸送を行わないが、利用者たちはみな知り合いで、集客をせずともどこからか噂を聞きつけて電話をかけてくる。

GNが単発のインフォーマル輸送業へと転じたことによって、マルチン郡では首都間に定期的にアクセスする人輸送経路がなくなった。一方で次に取り上げるのは、現在恒常的な長距離人・物輸送を行うアルタイ郡の運転手EBの事例である。

## 【事例2】安定への希望

EBは、ホヴド県アルタイ郡とウランバートルの間を20人乗りのマイクロバスで往復する個人輸送業を行っている。現在31歳で2014年に結婚したばかりである。ウランバートルで生まれ、現在も母親がウ

ランバートルで暮らしている。

EBは、2000年に韓国製のワンボックスカーを購入してC免許とD免許を取得し、10年間首都の街中を走る公共乗合タクシー運転手として働いた。2010年に同じ車を使用してアルタイ郡との間を往復する輸送業を始め、2013年に現在運転しているマイクロバスを購入、事業を拡大した。2014年までは、弟であるOGと交代で運転しながら一緒に仕事をしていたが、OGは現在首都で別の仕事を見つけ母と暮らしているため、一人で休みながら首都間を往復するようになった。道路の舗装が進み片道に要する時間はかわらない。発着は不定期だが、月に3往復か4往復をする。

乗客への発着日の告知は、掲示板ではなく全て電話で行う。自分で集客することはないが、「アルタイ郡のすべての人が自分の仕事と携帯電話の番号を知っているの、利用したい人は電話をかけてくる」という。アルタイ郡とウランバートルの間で頻繁に多くの人が行き来するわけではないので、乗客が少ないときや全くいないときもあるが、その場合にはアルタイ郡の小売店の店主から首都で仕入れる商品の希望を募り、郡の人々から預けられた荷物を積んで出発する<sup>4)</sup>。首都の卸売店等への商品は、小売店主自ら携帯電話で直接首都の卸売店へ発注する。自分は首都の市場の駐車場で待ち、卸売店から商品を受け取るだけである。

より安定した運営と収入のために、EBは今後、公共機関である「首都間旅客輸送」と契約したいと考えている<sup>5)</sup>。運転だけでも大変なので、自分で客と電話のやりとりをして運転日を決めるなどの余計なことを考えたくないと思っている。公共機関で運行すれば、乗客ひとりにつき5,000トゥグルク（約600円）を納めるだけでよい。しか

---

<sup>4)</sup> EBは、小売店主の商品については1kgあたり300トゥグルク、一般の利用者については1kgあたり500トゥグルクで荷物の輸送を請け負っている。乗客が2、3人であっても荷物を積み毎回は毎回利益が見込める計算である。

<sup>5)</sup> EBは、公共機関と契約してアルタイ郡から首都へ向かうバスを公式に運転するつもりはないのか、という筆者の質問に「なくてどうする！」と声を大にして答えた。

し、中古でも過去 10 年以内に製造されたバスを所持している運転手でないと契約できない。現在運転しているバスは製造後 10 年経過しているのので、2005 年以降に製造されたものへ買い替える必要があるが、手がでない。

上記 2 つの事例から、マルチン郡における首都直行便が運転手 GN の事情によって開通した後にもたまたま閉ざされた一方で、アルタイ郡で現在恒常的な首都間輸送経路が確立されているのは運転手 EB の生活の安定を求めるが故の努力の結果であるということが分かる。

GN は、運転の工夫によっては需要を期待できるのだが、本人にはそのつもりはない。「首都は遠いし、大変だから」といって、公共機関との契約によらずに定期的に運転することもなく、妻も働いているために生活の心配はしていない。しかしながら、マルチン郡の他の運転手も同様に定期便を出そうという意思をもたないために、郡と首都を直接結ぶような長距離輸送便は、確実な需要が見込まれる一定期間のみ運転するのである。

一方で EB は現在の彼自身の仕事のやり方に満足しておらず、より安定した経営を目指している。アルタイ郡と首都の間の人の往来は少ないため、EB のようにマイクロバスで運転するのは非効率的であるように思える。しかし彼は乗客が少ないときも空いた空間を利用して一定の荷物を輸送することによって、一度の輸送で得られる利益の極端な減少を防いでいる。

こうした努力は地域からの要請や需要の大きさに依るわけではなく、働き盛りで結婚したばかりの EB は、彼自身の運転 (= 経営) を安定させるために主体的な努力を行い、その結果として今のところの運行を維持し得る需要を呼び込んでいる。しかしながら、もしも EB の希望がかない、彼が公共機関との契約をすれば、発着地はアルタイ郡ではなく、首都でも市場から遠い長距離バスターミナルで荷を積んだり降ろしたりしなければならぬ。つまり、現在のような便利な輸送経路としては機能しなくなり、アルタイ郡と首都を直接結ぶ恒常的な経路は閉

ざされてしまうのである。

安定した運転と不安定な運転の境界は曖昧で、単発的な運転から自己の努力による定期的な運転、そして公的なサポートを受けた運転へと、あるいはその逆方向へと移行可能である。そして、それらの移行は、運転手が自己の置かれた状況に合わせて、主体的に選択するものなのである。

## 2 自動車の消耗への対応と「良い車」への需要

自動車の消耗は、長距離輸送を行う運転手たちにとって常に憂慮すべき要素のひとつである。関本が中部ジャワの零細バス運転手と雇い主であるバス所有者の取引が潜在的にもつ不安定性について触れたなかで、「運転手が走行距離を高め乗客を増して収入を増した分だけ、バス所有者には車両のより早い消耗という損失が返って来ることになる」[関本1980:380]というジレンマに言及したが、モンゴルの輸送業においては輸送用車の所有者と運転手が同一であることがほとんどであるため、それを運転手自身が抱えることになる。

### 【事例3】ボンコツの中古車とその修理

筆者が調査のためアルタイ郡に滞在中、EB（【事例2】と同一人物）はちょうどウランバートルからアルタイへ向かっている道中にいた。滞在していたDJ（男性、50代）の家庭では、筆者の他にも長距離トレーラー運転手BH（男性、40代、【事例4】に登場）がEBを待っていた。到着予定日の2日後に郡で行われることになっている結婚式に参列するための装身具を、首都に暮らす妻がEBに託して送ったためである。また、自身が運転するトレーラーの暖房が壊れたので、新しい設備をEBが運んでいる。ところがEBは予定日を過ぎててもアルタイ郡へ到着しない。彼はそのとき、アルタイ郡に隣接する県境で車が故障し、足止めされていた。BHは装身具に対する諦めを表明し、DJは自身が所有する装身具のなかから、BHが身に着けられるものがあるかを探し始めた。

結局、EBは結婚式が終わった翌晩にアルタイ郡に到着した。EBはバスのほとんどを個人の預かり荷物と小売店の注文した商品で満たして来たために、当時の乗客は2人と少なく、車が故障した地点からほど近い遊牧民家庭に泊めてもらうことができたのだという。「どうやって直したのか」という筆者からの質問に、EBは「特別なことはなにもない。とにかくトゥムル（金属製の部品）を叩いて直すんだ。」と答えた。

後に筆者がEBのマイクロバスでウランバートルへ行くことをDJに伝えると、DJは「EBの車は『悪い』（*muu*）。小さいバスは悪路では疲れるし寒いから、大きいバスで行きなさい」と近接するボルガン郡を発地としてアルタイ郡を經由してウランバートルへ向かうバスを手配しようとした。

筆者がこれまでに幾度かEBの運転する乗合タクシーを利用したなかでも、度々故障する車をその度に速やかに直す姿を見ており、筆者はその自動車修理技術の高さを信頼していた。しかしそれは彼の運転する車が消耗して壊れやすくなっている事実と表裏一体のものでもある。EBが月に何度も郡と首都を往復し、収益を増すことによって自動車はどんどん傷んでいく。一方で、【事例1】でみたように夏にのみ乗合タクシーを運転するGNのような運転手は、車の消耗を防ぎ、極寒の冬季に道中で車が故障するというリスクを負わない。

長距離輸送の道中は、まさに「何もない」道中で故障する可能性をつねに孕んでいる[写真1]。運転手は、いつでも車を直せなければならず、自分の腕を頼りに運転を執行・維持できるEBは腕の良い運転手であるといえる。しかしながら、その評価はときに矛盾したかたちで表れる。そこにあるのは、運転手の腕の良し悪しにかかわらない、「良い車」(*sain mashin*)に対する評価である。DJの発言のように、人の輸送を依頼する際により良い車を選ぼうとする態度は、しばしばみられるものである。良い車の条件は、広くて座席が良いとか、隙間風がなく暖房がきちんと効いて暖かいといった車内の環境に関わり、目的地に短い時間で

到着することも重要である。つまり、IV-1で述べたような地域や人脈に根差した運営が、即ち長期的で安定した顧客関係を築く理由になっているわけではなく、利用者は時々の状況に合わせて最も「良い車」を選び取る<sup>6)</sup>。

#### 【事例4】「良い車」を整備する努力

BHは現在ウランバートルに居を構えるアルタイ郡出身者であり、双方の地での人脈を活かして西部モンゴルと首都を往復し、首都との間を最大積載量30tのセミトレーラーで往来し、卸売用小麦や米の大規模な輸送を個人で請け負っている。BHのトラックは2012年に新品で購入したもので、「ドイツのベンツと中国の合弁企業が製造する



写真1 何もない道中で故障した車を修理するEBと弟のOG（筆者撮影、2013年8月に筆者がEBとOGの運転する「マイクロ」で首都からアルタイ郡へ向かっていたときのもの）

<sup>6)</sup> 「良い車」を選べない場合には「悪くない (gaigui)」とか、「悪い」という評価をする。

トラック」<sup>7)</sup>だとBHはその品質を保証する。

BHは、現在はウランバートルとモンゴル最西端のバヤンウルギー県の間で小麦の輸送を行うとともに、ホヴド県ツェツェク郡にある炭鉱と国境近くの中国企業による石炭加工場の間で、石炭および精製した石炭の運搬を行っているが、筆者の調査中にもう一件の仕事の依頼があった。それは、ホヴド県とバヤンウルギー県の燃料貯蔵所まで、首都から定期的に軽油を運んでほしいというものであった。BHは、一通り話を聞いて「可能だ」「私の車は非常に『良い車』(*sain mashin*)だ」と表明した後で、依頼の積載量に鑑みて全体の運送費を決定した。仕事を受けると通話を切り、次に別の人物へ電話をした<sup>8)</sup>。その電話では、軽油の運搬に必要な新しいタンクを新疆から注文する諸手続きを交渉のうえ、購入した。

BHは依頼者との電話での交渉ではっきりと積載量に鑑みた燃費を割り出して電話口で契約を取りつけた。その他の人・物輸送を行う乗合タクシーの場合もまた、区間ごとに運賃が固定されていて運転手ごとや車種ごとの値段に違いはない。そこで、個人で運転手が利用者に安心を与えたり、信頼を得ようとするときには、車の良し悪しに重きが置かれるのである。依頼主はBHが自分の依頼内容に適切な運転手であると考えて電話をしてきているのだが、BHは、自分を信頼に足る運転手であると伝えるために、「良い車」の所有者であることをまず述べた。そして、良い車の所有者であるために、取引が成立するとすぐに、必要なタンクや新しいトラックを購入する。

彼が3年前に購入した新品のセミトレーラーは積載量が大きいため、一度に沢山運べるために車の消耗が小さいというメリットもある。一方で、BHは柔らかくて消耗が激しい冬用タイヤを使わずに、普通タイヤのみで運転している。その点では、事故リスクを負いながら効率を優先

<sup>7)</sup> BHのトレーラーは、ダイムラー・ベンツ社との合弁企業である中国の北奔社製である。

<sup>8)</sup> 依頼主の発言の内容は、通話後BHが解説したものによる。

しつつ依頼者にとっての「良い車」であろうとしている。

### 3 故郷から離れることの利

最後に、輸送経路の確立という、輸送業の大前提における彼らの戦略をみてみよう。

#### 【事例 5】 首都在住二世の活躍

EB はウランバートル出身だが、彼のルーツはアルタイ郡にある。2010 年にアルタイ郡との間で輸送業を始めてから、アルタイ郡に泊まるときは母方の叔父の家の敷地を利用しており、2014 年に結婚したことを機に住民票もアルタイ郡に移し、新しいゲルも建てた。しかし、バスのナンバープレートはウランバートルの車であることを示す「UN」ナンバーのままであり、その理由を EB は「UN ナンバーのままだとウランバートルに入る検問所でのチェックが簡単になるから」と話す。

#### 【事例 6】 首都移住した牧畜成功者

アルタイ郡の人々は、郡の中心地を定住集落ごとまとめて移転するという経験をしている。2006 年から郡の中心機能の移転を進め<sup>9)</sup>、2007 年には完全に移行が完了、旧定住地に暮らしていた人々も移転を余儀なくされた。

もともとはアルタイ郡に 2000 頭近くの家畜をもつ牧民であった BH も、旧中心地から移住することになる。そこで新しい家を首都ウランバートルのゲル地区に建設し、妻と 3 人の子どもを首都へ送りだし

---

<sup>9)</sup> アルタイ郡の旧中心地は湿地帯であった。日干しレンガやコンクリートによる固定家屋が建てられるようになると、その地質のために建物が歪み、倒壊するという問題が多発した。そこで郡の議会は中心地の移転を決定し、まず中心機能を現在中心地がある場所へ移転した。それが 2006 年のことである。その後、中心機能の周りに人々が移りはじめ、完全に郡の中心地の移動が完了したのは 2007 年のことであった [2015 年 11 月 17 日アルタイ郡長 BT および運転手 BH からの聞き取り]。

た。自身はアルタイ郡に近接するボルガン郡に移り、そこで3年の間に増やした家畜を2010年に一部売り、その金で5tトラックを買った。残りの家畜は友人に預託し、自身も首都へ移住したという。そして、隣県で家畜を仕入れ、首都で売るといった輸送で生計を立てていた。

2012年に父方のオジが社長を務める輸送企業が、ホヴド県のツェツェク郡の炭鉱から石炭を輸送する計画を打ち出し、7台のセミトレーラーを購入したときに、BHは自分でも「1台のセミトレーラーを買ってやった」。それが現在行っている仕事で、合計8台のトレーラーで石炭輸送を行っている。

ただし、炭鉱の準備が整い、実際に計画を実行に移したのは2014年のことで、それまでのBHは新しいセミトレーラーで、ウルムチで買った米をウランバートルまで運ぶなどの個人輸送を営んでいた。現在は、石炭を運ぶ仕事は長男GTとその友人に任せることがほとんどで、自分では息子の仕事の合間に個人的に依頼された輸送の仕事（【事例4】参照）を行っている。

宿泊場所については、BHは首都の自宅の他に、アルタイ郡の中心地、バヤンウルギー県、ホヴド郡の中心地に、気兼ねなく滞在できる親族・知人宅を確保している。アルタイ郡の中心地が移転したときに、姉夫婦（姉の夫はDJである）の家を建てたのはBHであった。現在でもDJ宅の修理や改装を全て任されており、ツェツェク郡の炭鉱への経由地として一年の半分以上をDJ宅で過ごしている。また、DJは、BHやGTに頼み、新疆との国境にある市場で塩や砂糖、米といった必要品を安くまとめ買いする。小麦の輸送などでバヤンウルギー県に行くときには、BHは学生時代の友人宅に泊まり、ホヴド郡の中心地に泊まるときには親族のマンションを利用する。

【事例5】および【事例6】からは、二人の運転手がアルタイ郡と首都ウランバートルの双方に拠点があることを利用して輸送業を始めたことがわかる。そして、双方の事例の背景には、アルタイ郡の中心地の移転

やそれに伴う人口流動の高まりがあると考えられる。

BHと同様に、中心地への移転をきっかけとして都市部へ移住した人々は少なくなかった。都市部への移住の進行は近年のモンゴル全体に共通することであるが〔小長谷 2007 : 38-40〕、アルタイ郡ではとくに中心地の移転を境に人口が減少傾向に転じている〔図5〕。しかし、モンゴルにおいて都市への移動が一方向的なものではなく、彼らが都市と草原の双方にアクセスしながら機会主義的な生活戦略をもとに暮らしていることを風戸が明らかにしたように〔風戸 2009 : 236 ; 2013 : 156-157 ; 2014 : 125〕、アルタイ郡においても、人々が都市部に生活の本拠地を移すことはアルタイ郡と首都との間を往還する人の流れを生み出した<sup>10)</sup>。BHは首都に新しく居を構えたことによって自ら都市と地方を往還する人・物の流れへと身を投じることになり、そうした人の流れに着目して、父母の故郷であるアルタイ郡との間で人・物を運び始めたのがEBであるといえよう。

さらに、二人が発着地の双方に利用できる滞在場所をもっていることは、すべての実践の前提として、経路に容易にアクセスできる環境につながっている。この発着地における滞在場所、宿泊場所は、日帰りで運行できる短距離乗合タクシーやトラック輸送を除いて、中・長距離の人・物輸送を行う運転手たちが確保しなければならないものである。それは親族の家である場合がほとんどだが、友人宅の場合もある。【事例1】においてとりあげた運転手GNもまた、首都では父方オバの家に滞在しており、助手で運転する友人もまた妹の家に滞在している。

---

<sup>10)</sup> アルタイ郡の人口は減るばかりでなく、近年では小さいながらも増加がみられることにも注目したい。都市への人口流出が全国的な問題となっているなかで、近年人口が上昇しはじめているのは、アルタイ郡がインフラの整備や福祉サービスの改善をはかり、若い世代を積極的に呼び戻そうとしているためである。最近では携帯電話の3G電波が導入されたり、上下水道の整備が始まったりと、郡の定住地における「発展」が進んでいる。



図6 アルタイ郡の人口推移  
出典：National Statistical Office (2015) により筆者作成

## V 考察：不安定な輸送経路をつなぐ運転手たちの能力と資源

### 1 長距離輸送業の基盤と不確実さ

前節までにモンゴルの人・物輸送を支える運転手たちが、いかにして輸送経路や経営を維持しているのかをみてきた。モンゴルの運転手たちは輸送車、特殊運転免許、自動車の修理技術をもつことによって輸送業に参入できる。各県に設置されている公共機関や、都市の企業と契約して人・物輸送を行う運転手は、輸送経路と顧客を与えられるが、その条件として運転年数が少なく消耗していない、すなわち故障しにくい車を所有していなければならない。そして、その輸送は大量の人や物を決められた日時に、決められた場所へ運ぶという、太くて固定的で輸送経路である。この輸送をより速く、確実なものにするために、近年では各地で首都につながる道路の舗装や整備が推進されてきた。

一方で、その太い輸送経路の隙間を縫うように個人の需要に即した柔軟な輸送を行う零細の運転手たちは、公共事業として整えられた舗装道路などの自動車利用環境の改善の恩恵を受けながらも、自助努力によっ

て運営を行っている。ことに、郡と首都を直接結ぶ輸送経路は、公共の、または企業によるフォーマルな輸送網の及ばない、最も不安定な経路である。県と首都を結ぶ輸送経路は、人・物部門双方が公共機関によって運行されているため、乗り換えを行えば輸送を完了できるが、手間がかかる [注2 参照]。特に、小さい子どもを一人で乗せる場合や荷物を送る場合は、送り主が顔見知りの運転手に直接依頼できることは、郡-首都間輸送の大きなメリットになる。

しかしながら、郡-首都間の人・物輸送をはじめとする長距離区間の輸送は、常に十分な利用客が見込めるわけではなく、また自動車が消耗するという点で運転手にとって安定した運行を維持するのは困難である。IV-1 に示したように、GN は利益が見込めるときにのみ運転するという方法でそのリスクを回避し、EB はより大型の車を購入して一度により多くの人・物を運ぶという方法で利益を確保していた。

## 2 ソフトの資源としての「タニル・タル」

IV-2 では、長距離輸送における最大の困難である車の消耗と故障への対処と、「良い車」の維持に関する運転手の取り組みを示した。車とそのメカニックに対する知識は、彼らが運転手たる所以であり、その気概は「特別なことは何もない」という EB のことばや、「私の車は非常に良い車だ」という BH のことばに表れている。彼らは、生活の一部として日々目の前にある機械の不全に向き合い、手をかけて、自らの車と付き合っているのである。フォーマル、インフォーマルの別なく、モンゴルの運転手たちは自分で壊れた車を直す。広大な大地に分散してくらすモンゴルにおいては、一番近い家庭まで数百キロの場所で立ち往生することもしばしばであるため、その場で具合の悪い箇所を直せる技術は、運転手が運転 (= 経営) を安定させるための一番の基本となる。その能力は、車の構造についてよく知っていることのみによらない。

IV-3 では、アルタイ郡から離れることにより、その距離を利として仕事を得た二人の経緯を示した。モンゴルの国内を移動する運転手たちは、目的地で親族や友人宅に宿泊する。本稿で示したすべての運転手

も、目的地では親族宅や友人宅で疲れを癒し、数日滞在する。長距離を移動し、都市と地方の双方を生活の場とする運転手たちにとっては、離れた場所に在るものこそが資源であり、離れることによって生じる関係こそが重要なのである。このように、モンゴルにおける長距離輸送網の維持には、運転手たち個人の技術や「良い車」の所有というかたちで現れる資金力といった諸能力のみならず、もうひとつの資源がモンゴルらしいかたちで動員されている。それは「タニル・タル (*tanil tal*)」すなわち「知り合い」ということばで表すことができる。

モンゴルでは、どこで何をすることもそこに「知り合い」がいることが重視される。運転手でなくても、とくに遠出をするならばそこに親族や友人などの知り合いがいることが大事であり、各所に居住する親族や知り合いは、移動のためのベースキャンプとなり住居や食事、情報を提供する。スニースはこの「タニル・タル」を動員して様々な便宜を得ることが当たり前になっている状況を汚職と関連付けて批判したが、その一方で、それが元来は、社会主義時代から長く続く家族と友人をとおして商品やサービスの授受を行う相互扶助のネットワークを意味していたことも強調している [Sneath 2012: 156]。

モンゴルの運転手たちにとっても、「タニル・タル」は零細で不確実性をもつ自身の輸送プロセスの一助となっている。GN は年に1度か2度しか郡-首都間の人輸送を行わないが、利用者たちは集客をせずともどこからか噂を聞きつけて GN の携帯電話にかけてくると言った。アルタイ郡の人々はみな EB の携帯電話の番号を知っていて、長い旅路のどこにいても携帯電話に次の仕事を依頼してくる。2日間彼の到着を待った時も、彼の家族を経由して彼がどこにいるのかという情報をすぐに得ることができた。BH もまた、現在行っている大きな仕事は全て、友人や親族から依頼されたものであり、【事例 6】において新しい仕事を依頼してきたのも、知り合いの紹介によるものであった。遠隔地での滞在中にも、親族や知り合いの存在はかかせず、また道の途中であっても、携帯電話で仕事の経過や今後の予定を家族や知り合いに知らせる。その情報は運転手たちが不在の発着地でも人から人へと伝わり、共有されてい

くのである。彼らは、資金や車、輸送経路といったハード面を整えて運行しているのみではない。彼らが自助努力によって獲得、確立したハード面の隙間を満たすように、ソフト面では「タニル・タル」による相互扶助が、運転手たちの長い旅に安定をもたらしている。

### 3 おわりに

本章では、モンゴルにおいてインフォーマルな自動車輸送を行う運転手たちの実践、とくに最も長距離で不安定な首都間の輸送が、彼らの努力によって活用可能な経路として構築、維持されていることを明らかにしてきた。

公共機関や会社に登録してフォーマルな輸送業を営む運転手たちは、会社からの配分によって、決まった経路と定期的な仕事を獲得することができる。運営企業や公共機関にとっては、輸送サービスや収益を持続的に安定させることが重要であり、運転手にはそのための確実な運転が求められる。一方で、インフォーマルな輸送業には、それとは逆方向の流れがある。そこに最初に存在するのは運転手自身であり、彼が集客と運転を行うことによってそこに輸送経路ができるのである。サービスや収益の安定が持続するかどうかは運転手の選択や努力に委ねられる。

長距離運転手たちは移動性の高いモンゴル社会のなかでも殊に高移動性をもって暮らしている。故障やそれに伴う立ち往生という不確定要素を抱えながら、自ら広い国土を行き来することでモンゴルのインフォーマルな輸送網の一部となっている運転手たちは、独自のペースで長い道を日々往還する、自由でありながら非常に不安定な冒険者かもしれない。しかしその一方で、彼らは自己の輸送経路や輸送車のコンディションを整備し、情報網やベースキャンプを確保する。そうして、もちろん不確定要素を残しながらも、十分に目的地までたどり着ける万全な準備をしたうえで、長い道のりへ乗り出していく。

また、先に風戸の論に触れながら述べたように、都市部への人口移動が進んでいるモンゴルにおいて、その移動性は地方から都市へという一方的な流れではなく、ライフコースにおけるその時々状況に合わせ

て、機会主義的に地方と都市を往還するなかで生じるものであった。本章で取り上げた運転手たちの経営戦略もまた、地方から都市へと移住した親族を宿泊先として頼ったり、運転手自身が都市に本拠地を移すことによって地方との間で輸送に携わるなど、動的で機会主義的な生活戦略を基盤としている。資金、交渉力、運転とメカニクの技術、「タニル・タル」ということばに象徴されるような社会的ネットワークなど、利用可能な資源があれば、彼らは経路の維持が可能であるが、一方でそれらがなければ、経路は閉ざされ、運転手は潜在的な存在になる。潜在的な運転手は別の仕事をしたり、妻の収入に頼ったりしており、運輸業務は実は運転手世帯の生活戦略全体に埋めこまれている。モンゴル国におけるインフォーマルな人・物輸送は、とりわけ長距離輸送において、需要の有無や利益の大小よりも、運転手の生活と、それを安定させ得るだけの諸能力、社会的資源の有無を背景として成り立っている。すなわち、モンゴルのインフォーマル輸送は運転手の人生に付随しているのである。

### 謝辞

本章のための調査では、ホヴド県およびオヴス県の運転手たちに大変お世話になった。本稿に登場しない運転手たちからも様々な経験を聞かせていただいた。また、執筆にあたっては、北星学園大学の風戸真理先生が重要な指摘を多くして下さった。ここに記してみなさんに感謝申し上げます。

### 参考文献

- Alvarez, R. R. and G. A. Collier  
 1994 The long haul in Mexican trucking : traversing the borderlands of the north and the south. *American Ethnologist* 21 (3) : 606-627.
- Auge, M.  
 1995 *Non-places : towards an anthropology of supermodernity*. trans. John Howe. Verso.

- Dalakoglou, D. and Harvey, P.  
 2012 Roads and anthropology : ethnographic perspectives on space, time and (im) Mobility. *Mobilities* 7(4) : 459-465.
- 藤田昇ほか (編著)  
 2010 『モンゴル：草原生態系ネットワークの崩壊と再生』 京都大学出版会。
- 風戸真理  
 2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌』 世界思想社。  
 2014 「草原と都市を往還するノマド：20世紀モンゴル国における居住地と職業選択」 楊海英編 『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』 pp.147-160、名古屋大学文学研究科比較人文学研究室。  
 2015 「時空を超えて暮らしを包む住居：モンゴル・ゲルのフレキシビリティ」 佐藤知久ほか編 『世界の手触り：フィールド哲学入門』 pp.109-127、ナカニシヤ出版。
- 小長谷有紀  
 2007 「モンゴル牧畜システムの特徴と変容」 『E-journal GEO』 2(1) : 34-42。
- Marcus, G. E.  
 1995 Ethnography in/of the world system : The emergence of multi-sited ethnography. *Annual review of anthropology* 24 : 95-117.
- モンゴル科学アカデミー歴史研究所編  
 1988(1969) 『モンゴル史 2』 田中克彦監修、二木博史ほか訳、恒文社。
- National Statistical Office  
 2015 *Mongolian Statistical Information Service*. (<http://www.1212.mn/en/>、2015年1月30日最終閲覧)。
- 西垣有  
 2009 「ポスト社会主義のストリート—モンゴル・ウランバートル市における都市空間の再編」 関根康正編 『ストリートの人類学 下 (国立民族学博物館調査報告 81)』 pp.405-429、国立民族学博物館。
- ロッサビ、モリス  
 2007(2005) 『現代モンゴル：迷走するグローバリゼーション』 小長谷有紀監訳、小林志歩訳、明石書店。
- Rothe, J. P.  
 1991 *The Trucker's World : Risk, Safety, and Mobility*. Transaction Publishers.
- 関本照夫  
 1980 「二者関係と経済取引：中部ジャワ村落経済生活の研究」 『国立民族学博物館研究報告』 5(2) : 376-408、国立民族学博物館。
- Sneath, D. Anthony  
 2012 Constructing Socialist and Post-Socialist Identities in Mongolia, *Mongolians after Socialism : Politics, Economy, Religion*. Bruce M. Knauft, Richard Taupier Lkham Purevjav and Gerelmaa Amgaabazar (eds.), pp. 147-164. Admon Press.
- 祖田亮次  
 2008 「東南アジアにおける農村—都市間移動再考のための視角：サラワク・イバンの事例から」 『E-journal GEO』 3(1) : 1-17。

Steyn, A. S.

2015 The truck driver's watch- time and the working lives of long haul truck drivers in southern Africa. *Anthropology Southern Africa* 38(1-2) : 61-74.

Watts, L. and J. Urry

2008 Moving methods, travelling times. *Environment and Planning D : Society and Space* 26(5) : 860-874.

Zurag zui XXX

2015 *Mongol uls avto zamin suljeenii zurag*. Ulaanbaatar.

---

---

# モノの流通と消費にみる モンゴル遊牧民の生存戦略

堀田 あゆみ

(国立民族学博物館)

## I はじめに

本稿では移行期<sup>1)</sup>を経た現代のモンゴル国において遊牧を営む人々が、どのように市場に接合しながらモノを消費しているのかを、日常生活におけるモノの流れから明らかにする。

モンゴル国は1921年に社会主義政権が誕生して以降、ソ連に次ぐ世界で二番目の社会主義国家として約70年間計画経済を進めてきた。ソ連型社会主義体制下の遊牧地域では、1950年代後半から1990年代初頭まで「ネグデル」(*negdel*)と呼ばれる協同組合が全国各郡に組織されていた。遊牧民は組合員となり、家畜や畜舎はネグデルの共有財産とされた[風戸2009:7]。国はネグデルを通して、遊牧民が生産した肉や羊毛などの畜産品の回収、輸送、販売を統轄すると同時に、遊牧民に給料を支払い、生活用品の流通も担っていた[ロッサビ2007(2005):150]。ネグデルが設立されたのを機に、ポリタンク、トランプ、絨毯、かまどといった工業製品がソ連を中心とするCOMECON<sup>2)</sup>経済圏から流入するようになり[辛嶋2010:192]、遊牧生活における物質文化の第一の転換期を迎えた。

---

<sup>1)</sup> ソ連型の社会主義体制の崩壊から市場経済・民主化への移行期をさして、ポスト社会主義期という。「ポスト社会主義」は、「人類の壮大な歴史の実験であったソ連の社会主義体制の評価と、社会主義体制崩壊後の旧社会主義国家の行方」[佐々木1998:6]を対象とする、1991年のソ連の崩壊後に旧社会主義国家で起きた社会変容や、変化への対応として現れた現象を通文化的に研究するための概念である。

<sup>2)</sup> COMECON (経済相互援助会議)。

一党独裁を放棄し、民主化、市場経済化へと舵を切った1990年以降、輸入の8割を占めていた独立国家共同体（CIS）からの物流が途絶え、都市部では燃料、原料、交換部品の品切れのために工場は閉鎖を余儀なくされ、失業が深刻な問題となった〔ロッサビ2007（2005）：69〕。砂糖やバターなど主要な食品が入手できなくなり、肉、米、マッチなどの必需品は配給制となった。遊牧地域では、肉や乳製品はあっても、小麦粉、砂糖、アメなどが手に入らなかったほか〔ロッサビ2007（2005）：70〕、衣類、茶、煙草、紙、電池、陶器類、歯磨き粉などが不足した〔三秋1995：61〕。耐用年数を過ぎたコメコンの工業製品が、安価な中国製品へと置きかわっていき、モンゴル国がグローバルな資本主義経済に接合されていった〔辛嶋2010：193〕1990年代前半が物質文化第二の転換期といえる。

第二の転換期から20年以上が経過した現在の遊牧地域には、携帯電話、ソーラーパネル、パラボラ・アンテナなどかつてなかったモノが次々と流入している。中国製品だけでなく、韓国や欧米製の新品・中古品が流通するようになり、消費者の選択の幅を広げている。安価で軽いプラスチック製品が木製や革製の台所用品に取って代わり、韓国製の中古トラックの普及にともなって、これまで季節移動の際に用いられてきた荷車が姿を消しつつある。家畜の放牧や家族揃っての外出に中国製のオートバイが利用されるようになると、相対的にウマが乗用される機会が少なくなった。このように、新たなモノの普及は遊牧民の物質文化だけでなく、生活にも変化を起こしている。

1991年にネグデルが解体されたあと、民営化により遊牧民は完全な自営となり、国は家畜の購入を保証せず、生産物を市場へ輸送することもなくなった〔ロッサビ2007（2005）：156〕。それゆえ、遊牧民世帯が畜産品や収穫物の販売によって現金収入を得、小麦粉・砂糖・茶などの食料品、生活用品を購入するためには、市場への直接的な接合が不可欠になった。市場から遠く、インフラの整備されていない地域の遊牧民ほど条件が悪くなり、自ら市場にアクセスする手段をもたない場合や相場の変動に疎い人々は、行商の言い値で買ったたかれることもあった。市

場へのアクセスを求めて、遊牧民が都市部や定住地域、幹線道路の近く  
に宿営するようになった結果、家畜の過密による草地の荒廃が進むとい  
う問題も生じている [森他 2002; ロッサビ 2007 (2005)]。

このような市場への接近を生存戦略として採用する人々がいる一方、  
本稿で扱う遊牧地域の人々は都市部に近接するのではなく、祖父母の代  
から遊牧を続けてきた地元に留まりながら生計を立てている。前者を市  
場志向型と位置付けるならば、後者は遊牧志向型といえよう。市場を介  
してグローバル経済の一端へ接合することになった遊牧志向型遊牧民の  
生存戦略を、日常生活におけるモノの入手や消費の実態を通して明らか  
にしたい。

## II 遊牧民世帯の生計

本節では調査地域の概要を述べたうえで、調査世帯 E 家の事例を参  
考にしながら主だった収入源と支出用途について述べ、家計を維持する  
ためにどのような経済活動が行われているのかを概観する。

アルハンガイ県 (Arkhangai aimag) はモンゴル国中西部の森林ステッ  
プ地帯に位置する比較的降水量が多く緑豊かな地域である。2009 年の  
データによると人口 9 万 2,500 人の内、ほぼ 20% が都市部 (定住地)  
で、80% は草原で生活している。家畜頭数はウマ、ウシ、ヒツジ、ヤ  
ギ、ラクダを合わせて 361 万 9,100 頭であり、ウマ、ウシ、ヒツジの保  
有頭数では全国第一位を占めている。農牧業が県の GDP に占める割合  
が 77.7% と全国で最も高い、モンゴル国有数の遊牧地域である<sup>3)</sup>。

アルハンガイ県の中心地はエルデネボルガン郡 (Erdenebulgan sum) の  
ツェツェルレグ市 (Tsetserleg khot) にあり、約 1 万 7,000 人が暮らす。こ  
のツェツェルレグ市から南東へ 91 km の位置にホトント郡 (Khotont sum)

<sup>3)</sup> 2009 年度におけるアルハンガイ県の GDP は 1,427 億 3,730 万トゥグルクで、  
モンゴル国の GDP 6 兆 5,906 億 3,710 万トゥグルクから首都ウランバートルの  
GDP を差し引いた 2 兆 6,767 億 3,460 万トゥグルクの 5% を占め、首都ウラン  
バートルを除く全 21 県中第 5 位であった [National Statistical Office of Mongolia  
2011]。



図1 アルハンガイ県ホントント郡サント・バグにおけるE家の宿営地  
 出典：ХАНГАЙНХАН КЛУБ 2003：367より作成

の中心地がある。ホントント郡には、17万5,502頭の家畜があり、4,874人が暮らしている〔2006年時点〕〔Baatarbileg他2009〕。郡の中心地には、役所、銀行、小中学校、ガソリンスタンド、携帯電話会社2社の受信アンテナ、商店などが設けられており、定住区も広がっている。ホントント郡はさらにバグ（bag）と呼ばれる六つの下位行政単位に分けられ

る。ホトント郡の中心地から南西に約 30 km 進むとサント (Sant)・バグの中心地が見えてくる。9 年制学校や商店があり定住する人々の家屋もある。サント・バグにはおよそ 300 世帯が暮らしている〔2011 年時点〕。バグの中心地から、さらに道なき道を南西に 12 km ほど進むと、E 家が暮らす地域に到着する (図 1)。ツァガーン・スミーン川 (Tsagaan sūmiin gol) とその支流に広がる平野部で E 家を含む 22 世帯が遊牧生活を営んでいる。

E 家の家長は、E で 1977 年生まれ、妻の M は 1978 年生まれである。サント地域で遊牧民の家庭に生まれ育った二人は 2000 年に結婚し、Z (2002 年生まれ) と U (2004 年生まれ) 二人の息子がいる。ウマ、ウシ (ヤクおよびハイナク<sup>4)</sup> を含む)、ヒツジ、ヤギを合わせ約 200 頭の家畜を放牧している。アルハンガイ県の保有家畜頭数を県内の遊牧民世帯総数 (1 万 5,858 世帯、2008 年) で割ると、平均して一世帯当たり 213 頭の家畜を有している計算になる。従って E 家は県内で標準的な遊牧民世帯であるといえる。

E と M の両親は双方とも他界しているため、兄姉世帯との交流が盛んである (図 2)。E は 8 人兄姉の末っ子である。5 人いる兄のうち、上から二番目と四番目の兄 H 世帯はウランバートル市 (Ulaanbaatar khot : 以後 UB と表記する) に、一番上と三番目の兄世帯はツェツェルレグ市に住んでおり、すぐ上の兄 B 世帯が同じくサント地域で遊牧をしている。二人の姉のうち D はツェツェルレグ市に住んでおり、もう一人の姉は同じくサントで遊牧していたが 2007 年に他界した。その亡姉の夫 F と長男世帯の A 家、長女 I 家はサントで遊牧しており、未婚の次男 N は UB の建設現場へ出稼ぎにしている。

一方、妻 M も 6 人兄姉の末っ子である。4 人いる兄のうち、K 家はツェツェルレグ市に、W 家はハラホリン (Kharkhorin : ウヴルハンガイ県北部にあるソム中心地) に住み、あとの L 家と C 家はサントで遊牧をしている。姉世帯の R 家もサントの中心地の側で遊牧をしている。

---

<sup>4)</sup> ハイナク (khainag) はヤクとウシの混血種。

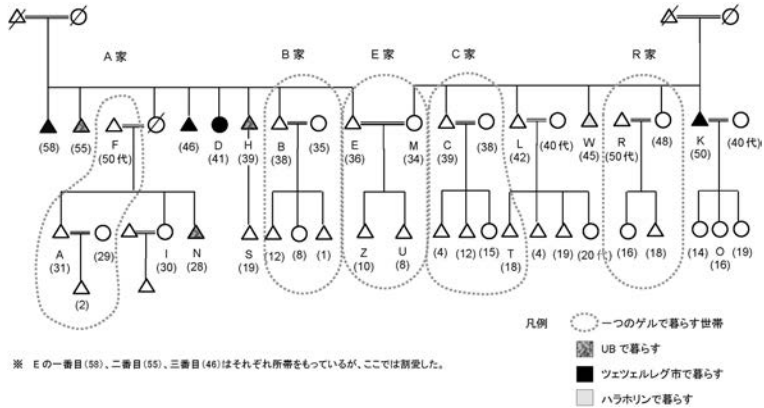


図2 E家の親族関係図(2012年)

ツェツェルレグ市に住む兄世帯とも、夏休みや通学の折りに子どもを預け合ったり、年に数回お互いを訪ねあうなどして交流もっている。

Eは結婚以前の1998年ごろ、一時期兄の子ども達の世話をするためにUBで暮らしていたことがあり、教育や物流面における都市生活のメリットを熟知している。と同時に、現金収入がなければ食事にさえありつけないというリスクも理解しており、遊牧で生活できるのならその方がよいと考えている。Mも結婚前にダルハン市(Darkhan-uul khot: モンゴル第三の工業都市)の絨毯製造工場で働いた経験があるが、都市部の生活は自分にはあわず、UBは怖くて行くのも嫌だという。

遊牧民が現金収入を得る手段には、畜産物の販売のほかに、定期的を支給される子ども手当や年金の受給、観光客の受入や収穫物の販売による季節収入などがある。

一年で最も多くの現金収入をもたらすと期待されているのが、カシミヤの販売である。春に梳いて集めたカシミヤは、その年によって変動するが1kgあたり5万4,000トゥグルク(tögrög<sup>5)</sup>: 以後₮と表記)で業者に買い取られる。2010年の5月にE家では50頭のヤギからとれたカ

<sup>5)</sup> モンゴル国の通貨。1円=15.85₮ [2010年9月時点]。

シミヤで80万₮(約5万円)を得た<sup>6)</sup>。

カシミヤに限らず、羊毛や毛皮の買い付け額も時期によって大きく変動する。調査期間を通じて羊毛は1kgあたり200~500₮の値で取引された。ヤギの毛皮は最も安くて1枚500₮、高い時には1万₮を超えることもあった。ヒツジの毛皮は1枚300~2,000₮の間で推移していた。そのため、遊牧民は常に先で情報を集め時価の動向を注視している。刈り取った毛や毛皮は一時的に蓄えておかれ、現金の必要が生じた時や、買い取り業者が来た時、価格が上昇するのを待って売却される。

生きた家畜の販売もまとまった収入をもたらす。E家では、自家消費が中心であり、ウマ以外で生きた家畜が売却されることはほとんどなかったが、目安として聞き取った額によると、雄ウシが50万~130万₮、雌ウシが20万~70万₮、ウマは25万~70万₮である。E家では2009年の8月に61万₮で種ウマを売却した。大型のヤギや雄ヤギは8万₮、小型のヤギや雌ヤギおよび仔ヤギは2万~6万₮、子持ちのヤギは4万5,000₮である。そして、雄ヒツジが8万₮、雌ヒツジが6万₮ということであった。

搾乳が行われる夏季には、乳を加工してタラグ(*tarag*: ヨーグルト)、ウルム(*öröm*: クリーム)、アールツ(*aarts*: 高発酵半乾性チーズ)、エーズギー(*eezgii*: 低発酵凝固チーズ)、アールール(*aarul*: 高発酵乾性チーズ)、アイラグ(*airag*: 馬乳酒)などが作られる。大量に作った乳製品から自家で消費する分を残し、余剰分を販売している。販売は世帯ごとに行うのではなく、トラックをもつ世帯か車を調達できた人が地域の各世帯を回って乳やアイラグなどを買い取り、都市部へ運んで販売し利鞘を稼いでいる。

<sup>6)</sup> この年ヤギが50頭しかいなかった理由は、2009年暮れから2010年春にかけて気温の低下による家畜の大量死ゾド(*zud*)が発生したことによる。モンゴル全土で840万頭の家畜が死んだ。E家もサントの他の世帯同様に被害を受け、17頭いたウマが6頭に、96頭のヤギが40頭に(その後10頭を購入)、70頭のヒツジが12頭に、4頭いたウシ(ヤク・ハイナク含む)は0頭になった。もし、ゾドに見舞われず順調に家畜が増え150頭のヤギがいれば250万₮(約15万8,000円)が得られるはずであったという。

表1 乳製品価格

〔2008年冬季〕

乳製品	価格
乳(冷凍)/ペットボトル1本	800~1,000
ウルム/1枚(一鍋に張った分)	2,500
アールツ/ℓ	1,000
ヨーグルト(冷凍)/kg	1,500
アーロール/kg	1,500
エーズギー/kg	1,500

単位トッグルク〔1円=10.80₯〕

乳製品の価格は、乳の採れなくなる冬に上がるため、夏にこしらえたものを保存しておき、11月末から12月の頭頃にUBへ売りに行く。表1は2009年に聞き取った前年の小売業者への卸価格である。サントからUBまでは約450kmであり、天候と路面の状態にもよるが自動車で8~10時間とアクセス条件として悪い方ではなかった。しかし、ここ数年で自家用車をもつ遊牧民世帯が増加し、それぞれがUBの市場へアクセスするようになったため、もはや長距離輸送してまで販売するメリットはなくなったという。

月に一度、遊牧民がおめかしをしてホトントの中心地へ出かけていく日がある。子ども手当を受け取るためである。政府から毎月子ども一人当たり3,000₯<sup>7)</sup>が、18歳以下の子どもがいる家庭に支給されている。各世帯には、人間開発基金<sup>8)</sup>と書かれた手帳が人数配布されており、それを持って銀行に行くとお金が受け取れる。

もう一つの定期的な現金収入に年金がある。男性は60歳、女性は55歳から受給できる。受給資格は20年以上働いていることであり、働いた年数によって受給額は異なるが、国の家畜を預かっていた場合には多くもらえ、個人の家畜を放牧していた場合は安いという。最低でも月に

<sup>7)</sup> 2012年以降は、子ども一人当たり約2万₯が毎月支給されている。

<sup>8)</sup> 人間開発基金(khūni khōgjił san)は、地下資源収入を全国民へ平等に還元することを目的とした政策により誕生した。国民一人当たり150万₯を現金や株式などで支給する〔津江2013〕。

8万₮が給付される。これらの定期収入は、遊牧民にとって確実に手に入る現金収入として家計の重要な位置を占めている。

森林資源の豊富なハンガイ地域において、サマル (*samar*) の採取・販売も非常に重要な季節収入源になっている。サマルというのは、クルミヤクリのような硬い殻に覆われたホシ<sup>9)</sup>の木の実のことであり、炒った後に歯で殻を割り、中の実だけを食べる嗜好品である。採取はホシの木をゆすって枝についているサマルを落とし拾い集めるという方法で行う。業者の買い取り価格は近年上昇し1kgあたり2,300₮である〔2012年時点<sup>10)</sup>〕。E家もバイクで山に何度か入り朝から晩まで拾い集め、2012年は400万₮以上を稼いだという。

これらの方法で得た現金の主な支出用途は食料品、衣料品、日用雑貨の購入や、交通・通信費などである。サントの遊牧民が食料品、衣料品、日用雑貨を購入するのは、バグや郡の中心地にある商店、およびツェツェルレグ、ハラホリン、UBの市場などである。夏季には月に二、三回ほどの頻度でやって来るナイマー (*naimaa*) と呼ばれる行商も利用する。具体的な支出の内容と物価の事例を以下にあげる。

サントには、観光客を対象とした季節営業の宿泊施設（複数のゲル、トイレ、シャワー、商店などを備えている）がいくつか存在する。E家の夏营地から5~6kmのところにある宿泊施設には電気が通っており、商店や診療所が併設されていることから地元の遊牧民もよく利用している。この商店では、アメ、ジュース、茶菓子などの食料品や子ども服、靴、パンツ、石鹸、および仏具が売られている。Mがロウソクを買いに訪れた時、ビスケット（350₮）と金たわし（500₮）を購入したもののロウソクがなかったため、宿泊施設の側にある丘上の商店へ足をのばした。商品棚には衛生用品という表示があり、石鹸、粉末洗剤、下着（パンツ）、軍手、生理用品、セロハンテープ、歯磨き粉、トイレットペーパー、御香などが置かれていた。UBでは700₮のジュースが900₮で売られており、全体的に200~300₮ほど高い値がつけられていた

<sup>9)</sup> ホシ (*khush*) はシベリア松 (*Pinus sibirica*)。

<sup>10)</sup> 2016年現在は、1kgあたり7,000₮に上昇。

[2009年8月当時]。しかし、この店にもロウソクはなく、結局その日は手に入らなかった。翌日、E家と共営していたG家が折よくバグの中心地へ出かけるというので、Mはロウソクを頼んだ。

ツェツェルレグ市には、大きな市場や中古衣類専門店、家具、絹布、小物、洋服などを扱う各種商店が立ち並び、警察署、インターネットカフェなどもある。サントの中心地から約75 km、夏場ならばジープで片道3時間ほどのところにある。家畜の世話を人に任せていかねばならないため、頻繁に行き来することはないが、ツェツェルレグ市の学校に通わせている子どもの学期ごとの送迎や、親戚訪問のために年に数回訪れている。

2009年8月31日、Mは夏休みをサントの自宅で過ごした長男（7歳）を9月の新学期にあわせて送り届けるために、次男（5歳）を連れ、知人の車に同乗して出発した。Eは家畜の世話をするために残った。ツェツェルレグ市に到着すると、早速子ども達を連れて市場へ向かい、翌日の始業式に備えて学用品一式を揃えた。制服用のズボン、カッターシャツ、革靴、スニーカー、古着の長袖シャツ、リュックサック、ハサミ、ノートカバー（10枚）、ボールペン（2本）、ボールペン用替え芯（10本）、鉛筆削りなどを次々と購入ししめて4万6,800円の買い物であった（表2）。

Mは翌日も市場へ出かけ、小麦粉25 kg、米5 kg、茶葉5 kg、砂糖3 kg、塩500 g、チョコ各種500 g、揚げパンなどの食料品や、トイレットペーパー、歯磨き粉、洗濯用石鹼（10個）、粉末洗剤800 gなどの消耗品を購入した。25 kgの小麦粉を親戚の家まで運んでもらうために1,000円支払った他、商店で板チョコ（1,050円）、アイス（650～700円）、ジュース（700円）などを子ども達に買い与えた。この日Mが食料品と日用雑貨の購入に費やしたのはおよそ5万円であった。

ツェツェルレグ市の物価はほぼUBと変わらず、サントよりも安いいため、まとまった買い物をする際には重用される。新学期に合わせた今回のツェツェルレグ市訪問の出費は、交通費を含めると10万円を超えた。

ナイマーというのは本来「商売、貿易、取引」という意味であるが、サントでは車に商品に乗せてやって来る行商や家畜・畜産品の買い付け

表2 ツェツェルレグの市場価格

〔2009年8月〕

市場の商品	価格
子ども用ズボン	8,000
子ども用カッターシャツ	6,000
革靴	12,000
スニーカー	10,000
長袖シャツ (古着)	2,000
リュックサック	6,000
ハサミ	300
ノートカバー	30
ボールペン	200
ボールペン用替え芯	150
鉛筆削り	300
小麦粉 25 kg	16,000
米 5 kg	6,500
茶葉 5 kg	3,500
砂糖 3 kg	4,500
塩 500 g	200
チョコ各種 500 g	2,500
揚げパン	1,200~2,200
トイレトペーパー	450
歯磨き粉	1,100
洗濯用石鹸	400
粉末洗剤 800 g	3,000

表3 ナイマーの商品価格

〔2009年8月〕

ナイマーの商品	価格
女性用ズボン	3,000
女性用ジーンズ	13,000
女性用下着 (パンツ)	1,500
男性用ジャージ	9,000
子ども用カッターシャツ	5,000
スニーカー	15,000
バスケット・シューズ	20,000
エナメル靴	14,000
合皮リュックサック	9,000
ノート (12 頁)	200
ノート (24 頁)	400
ノート (60 頁)	500
ノート (96 頁)	800
水性ボールペン	200
ボールペン用替え芯	150
クッキー	800
ウエハウス	400
小麦菓子	1,200
マッチ (10 箱)	400

単位トウグルク [1円=14.85₮]

にやって来る人々を総称してナイマーと呼んでいる。月に二回ほどアルハンガイやUBから不定期にやって来る。

2009年7月24日にE家らの宿営地にナイマーの車がきた。トラックの荷台には車の部品、座席には食料品が積まれており、その日はヒツジの毛皮を1,500₮/kgで買い取っていた。Mは1,200₮の小麦菓子を2袋、ウエハウス(400₮)、クッキー(800₮)、砂糖1kg(1,500₮)、マッチ(40₮×10)、計5,500₮を現金で購入した。

2009年8月22日に最寄りのCA家の宿営地にナイマーのワゴン車がきた際には、Mは次男を連れて歩いてCA家まで出かけた。衣類を中心にツェツェルレグの市場と同じかそれより少し高い値段で売られていた。商品の値段を聞き取ったものが表3である。筆者が確認したところ全て中国製品であった。カッターシャツ、ブラウス、ズボン、タイツ、靴下、パンツ、ブラジャー、革靴、スニーカーのほか、学用品もあ

り、学校に通う子ども達が買いに来ていた。Mも長男のためにノート10冊と、Eの兄Hから預かっている甥っ子S（16歳）のためにズボン（3,000円）を購入した。しめて5,000円であった。

遊牧民の日常的な交通手段は、ウマ、バイク、車のいずれかであり、目的や移動人数に応じて使い分けている。家畜の放牧や他家の訪問などサント地域内を移動する際には、ウマかバイクが活用される。両親と子ども3人くらいまでならば一台で移動することができるため、最近ではどの世帯にも中型バイクが見られるようになった。トラックや自家用車を持っている家はまだ限られているため、車で移動が必要な場合は、乗り合いバスを利用するか、知人の車に便乗させてもらうことになる。乗り合いバスの料金は、サントーUB間が片道1万5,000～2万円〔2009年9月時点〕、サントーツェツェルレグ間は片道7,000円である〔2010年6月時点〕。

Mが長男をツェツェルレグ市に送って行く際には、知人の車に同乗させてもらっており、その時は片道7,000円に値上がりする以前の5,000円で清算した。親戚や知人に乗せてもらう方が乗り合いバスより安くなるのは確かであるが、車の持ち主に出かける予定がないと便乗も頼めないため、必要時に折よく調達できないという難点がある。

トラックやバイクを自家で所有している場合は、燃料代が出費となる。ホトントの中心地にあるガソリンスタンドでは1ℓあたり1,455円であり〔2010年6月時点〕、UB（1,380円/ℓ）に比べ割高になっている。携帯電話を利用していれば、ネグジ（*negj*）と呼ばれる通話料を入金するためのカード（および通話可能度数）をあらかじめ購入しておく必要がある。カードには500～1万5,000円までの六つの価格帯が設定されており、ネグジ（通話可能度数）がなくなるとその都度カードを購入する。

ここまで、遊牧民が現金を介して市場やサービスにアクセスしている部分だけを提示してきた。しかし、個人間の交渉の余地がある場面においては物々交換による取引も行われている。ナイマーとの取引において、Mは飾りのついたハーフパンツを、エーズギー（低発酵凝固チーズ）12個と交換したと見せてくれた。Eは以前所有していたバ

イクを2007年に知人に75万₮で売却したと話す一方で、以前乗っていた白いトヨタ車は仔持ちのヤギ6頭と交換したという。このように交渉可能な個人間の取引においては、現金だけでなく家畜や乳製品による交換が行われており、その時々の手や自家の状況に応じて柔軟に交換方法を使い分けている様子が窺える。

### Ⅲ 市場を介さないモノの流通

E家の事例を参考に、遊牧民が生計を維持するために機会を捉えて市場へアクセスしている状況を見てきた。ところが、実際に彼らの生活の中に取り込まれているモノの来歴を聞き取ってみると、必ずしも市場を介して入手したモノとは限らないという実態が浮かび上がった。そこで、本節ではE家で行った聞き取り調査を基に、モノがいかなる方法で入手されているのかを示し、次節において消費の実態を探る手掛かりとしたい。

来歴の聞き取り調査と並行する形で、E家の許可を得て、2009年7月から2010年6月にかけて断続的に生活の中に取り込まれているモノの悉皆調査を行った。調査は食料品を除くすべてのモノを対象に、ゲル内、ゲルの周囲や家畜囲い周辺、およびE家の冬营地と夏营地の中間地点に設置されている固定式物置小屋で実施した。その結果、E家には1494点<sup>11)</sup>のモノが存在していた<sup>12)</sup>。

<sup>11)</sup> モノの総数に関しては以下の方針による。梁や組壁といったゲルの構造に関わるモノは、それぞれ一つのまとまりとする。76本ある梁も、5枚の組壁もそれぞれ一つとして数えている。また、大量の釘、洋ボタン、端布、金属部品などもひとまとまりとして数えた。ただし、収納場所が異なれば別に数えた。

<sup>12)</sup> 1967年に調査されたアフリカの狩猟採集民ブッシュマンは79品目で生活を営んでおり [Tanaka 1980 : 39-44]、佐藤らが2002年に韓国ソウルで実施した5人家族の暮らすアパート（車内も含む）における悉皆調査の結果は、およそ10,000点であった [佐藤 2006 : 38]。このように、生業や居住環境が異なればモノの在り方も異なるため、量的側面だけに着目した単純な比較は意味をもたない。本調査の目的は現代遊牧民の生活におけるモノの在り方を明らかにすることであり、その手掛かりとして導き出した1494点という数字は、全体と部分を相関的に捉えるための指標として用いる。

E家の住居（ゲル：ger）は結婚した二人の新居として2000年に建てられた5枚壁のもので、天窗の直径が1 m 50 cmと少し大きめである以外、ごく一般的なゲル構えである。遊牧という生業上、狩猟・牧畜関連用具<sup>13)</sup>が多数を占めるイメージがあるが、実際には100点に満たない。一方、E家には戸棚が二つ、長持は大小あわせて四つあり、その中には衣類、雑貨、道具類が収納されている。衣類だけでも244点、モノ全体の約16%を占めている。360点以上ある雑貨（約24%）には、歯ブラシ、化粧品、プラスチック袋、マッチ、トイレットペーパーなどの消耗品の他、梁飾りや置物といった装飾に特化したモノも含まれる。その他にも、洗濯板、双眼鏡、ナイフ、懐中電灯、斧といった身の回りの道具類、台所用具、書類や写真、学用品、儀礼用具・仏具、装身具などが収納されている<sup>14)</sup>。さらに、ゲルの外にはソーラーパネル、バイク、小型ゲル、物置小屋などが存在し、物置小屋の中には使用していない家財道具が保管されている。

このように、現代の遊牧民の生活には多くの衣類や雑貨が、中には一年に一度も使われないうま取り込まれているのが実情である。基本的に移動の妨げにならない程度という制約は存在するものの、トラックの普及による運搬規模の拡大と固定式物置小屋の増設によってその制約は緩和傾向にあると考えられる。

1494点のモノの中からE家の人々に「それはどうしたのか」と尋ね、来歴が特定された540点について入手経緯で分類したところ、(1)購入・交換、(2)贈与・譲与、(3)作製・転用、(4)借用・混入、(5)拾得・収獲

<sup>13)</sup> 猟銃、銃スタンド、銃弾、差し油、目出し帽、鞍、鞭、おもがひ、はみ、端綱、仔ウマつなぎ用ロープ、ウマ留め、ウマとり竿、家畜囲い、糞泥運搬用桶、糞泥掻きシャベル、飼料桶、バケツ、馬乳酒発酵容器、注射器、浣腸器、薬液など。

<sup>14)</sup> 書類とは家畜健康手帳や身分証、処方箋などを指す。儀礼用具・仏具とは、ハダグ（qadag）と呼ばれる絹布や初物を天に捧げるための木杓ツァツァル（tsatsal）、仏壇に安置された仏画、マニ車、香炉、燈明台、燈明台の芯にするための綿などのことである。装身具には、帽子、カバン、指輪やピアスなどのアクセサリ類、眼鏡やサングラス、嗅ぎ煙草、ベルト、履物など衣類以外で身につけるモノが該当する。

のいずれかとなった。

### (1) 購入・交換

市場や商店、職人や友人・知人との間において、現金もしくは家畜や畜産品など何らかの代価を支払って入手したモノがこれに該当する。購入・交換されたモノを見てみると、マッチ、トイレットペーパー、歯磨き粉などの消耗品、ノートや筆記用具などの学用品、洋服や下着などの衣料品、帽子、アクセサリ、ブーツなどの装身具、デールの生地、ボタン、ほうきなどの雑貨、あるいはゲルの組壁、天窓、扉、かまど、家具や仏具、車、バイク、電化製品、猟銃、銃弾など、自作できないモノであった。

来歴の聞き取りを行った 540 点中、購入・交換によって入手されたモノは 163 点で、全体の 30.2% を占めた (図 3)。ただし、これは生活財に限った場合である。悉皆調査の対象に含まれていない小麦粉、砂糖、リンゴ、ジャガイモなどの食料品やアメ、チョコ、ビスケットなどの菓子類は、ほぼ購入・交換によって入手されていた。

### (2) 贈与・譲与

贈与・譲与に該当するのは、親戚・友人・知人から代価の授受を伴わずに入手したモノである。やり取りが行われた場面と受けとったモノによって贈与は二種類に分けられる。一つは、結婚や年中行事における親戚訪問など特別な機会に行われる贈与である。E 家では、結婚の際に親から継承した銀杯や仏具、親戚から贈られた食器棚、調理器具、絨毯、ミシン、寝具、デールなどが現在でも活用されており、新学期になると、子ども達は親戚から贈られた学用品を持って登校する。また、友情の記念や何らかの事物に対する返礼として友人・知人から贈られた懐中電灯やガス灯、帽子、キーホルダー、バイク、ナイフなども大切に使われている。もう一つの贈与は、親戚や親しい世帯による古着や不用品の提供である。E 家では、親が使っていたナイフ、木皿、柄杓、フライ返し、アルミ容器、小麦粉貯蔵容器などを修繕しながら使っている。親戚

間では、余分にある、サイズが合わないなどの理由で中古の蓄電器、大型ポリ容器、トランク、ボストンバッグ、アクセサリ、子どもの衣類、玩具、学用品、履物のお下がりなどが贈与される。

他方、譲与としたのは、交渉を持ちかけることによって相手から無償で譲り受けたモノである。E家では、家畜の飼料桶を作るための古タイヤや壁に掛けるビニールシート、ソーラーパネル、掛布団、石鹸、乾電池、Tシャツ、ズボン、望遠鏡、葉などを地元の知人や都市部の親戚、時には筆者といった社会関係を活用して入手していた。このような贈与や譲与の対象には原初的に市場から得たモノだけでなく、製作や収獲によるモノも含まれる。贈与・譲与が全体に占める割合は27.6% (149点)であった。

### (3) 作製・転用

作製というのは、山から伐り出した木材や、建物・機械・既製品などの廃材・部品、家畜の毛皮や革、骨、腱など生活の中にあるモノで作られたモノである。ゲルの梁や床板、家畜囲いや家畜関連用具、あるいは包丁、燭台、麺棒、板盆、火バサミ（ハサミ型の火箸）、塵取り、敷布団などの生活用具、デール、子どものズボン、履物などが自家で製作された。

また、何らかの方法で入手した後、本来の目的に使用できなくなったモノを加工したり、別の用途に使用している場合を転用とした。例えば、5,000円<sup>7</sup>でナイマーから購入したポリバケツが部分的に破損したため、上部を切り取ってその縁をビニールテープで覆って割れを防ぎタイヤとして利用している場合などである(2009年8月23日、M;聞き取り年月日、話し手)。作製・転用が占める割合は24.8% (134点)であった。

### (4) 借用・混入

借用・混入に該当するのは、調査時点でE家にあったが、他家の所有であるモノである。例えば、糞泥運搬用桶と櫓、シャベル、ハサミ、麺棒、鍋、保温瓶、板盆、ボウル、蒸留器、教科書、ビニール製の長靴

などE家が他家から借用したモノや、猟銃、蓄電器、糸など他家から一時預かりを頼まれたモノ、または器、帽子、デールなど来訪者が置き忘れたモノである。文化的なタブーがあるモノを除いて<sup>15)</sup>、何からの理由で混入したモノも利用することができる。借用・混入は全体の12.6% (68点) を占めた。

#### (5) 拾得・収獲

拾得というのは地面に落ちていたモノを見つけて自分のものにするものである。路地や草原に落ちているモノ、廃棄されたモノは基本的に見つけて拾った人の所有物となる。ナイフや帽子のように慣習的に拾ってはならないとされているモノもあるが、現金や携帯電話などの拾得物は実際に見つけた人の所有物として扱われている。

収獲したモノとしては、山から伐り出す薪材、自家の家畜の毛、骨、腱、毛皮、狩猟で仕留めた野生動物の角や毛皮、松脂（ガムのように噛む嗜好品）、薬草などがある。拾得・収獲によって得たモノの割合は4.8% (26点) であった。

来歴を聞き取った540点の事例から明らかになったのは、遊牧民が市場との直接交換（購入・交換）によって入手している生活財は3割に過ぎず、7割はそれ以外の方法によっているという事実である。上述した入手方法の内、自家調達が可能で作製・転用、拾得・収獲を除くと、生活財の4割相当が、親戚・友人・知人といった社会関係を基盤とする贈与・譲与 (27.6%) と借用・混入 (12.6%) によって流通していることになる。

## IV 世帯を越えた消費

悉皆調査と来歴の聞き取りによって、モノが遊牧民世帯に取り込まれる経路が判明したところで、次に、それらのモノがどのように消費され

<sup>15)</sup> 他人の帽子やベルトの装着は、運気が乱れる、あるいは運命が変わるとして敬遠される。

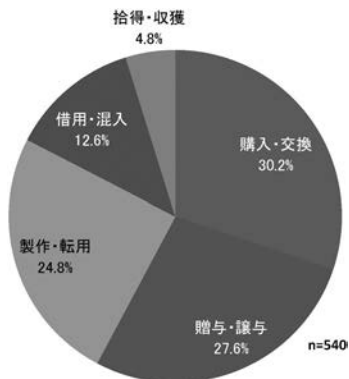


図3 生活財の入手方法

ているのかを探っていきたい。第Ⅲ節で明らかにした通り、E家には借用・混入という形で他家の所有物が混在していた。12.6%と全体に占める割合こそ小さかったものの、それは定点調査の限界に由来するものであり、他家のモノが世帯を越えて使用されているという実態は注目に値する。そもそも、悉皆調査によって記録されるモノというのは、その時点において存在したストックに限定され、連続的な時間の流れの中で生起するモノの動態（フロー）を捉えることはできない。E家では、毎日何らかのモノが共営世帯<sup>16)</sup>や親戚世帯との間でやり取りされており、時々刻々と状況が変化していた。しかも、自家と他家の所有物の扱いに違いが認められないため、他家から戻って来たのか、他家から借りて来たのか見ただけでは判断がつかなかった。

例えば、Mがたわしで家族の靴を洗っていたので、そのたわしはどうしたのかと尋ねたことがあった。すると、「二年前にナイマーから500円で買ったのよ。買った時はたわしの背の部分に手を通す輪っかがついていたの [今は取れて無いけどね]」と木製の部分を指で示しながら答えた（2009年8月28日）。すっかりE家のモノだと思いをきい

<sup>16)</sup> 共に宿営する世帯であり、家畜の放牧、搾乳、毛刈り、家畜囲いの清掃などさまざまな作業を協力して行う。季節移動の度に組み替えが行われるが、一般的に親戚・姻戚関係がある世帯との共営が多い [日野 2001]。

ていたが、よくよく確認したところ共営世帯 G 家のモノであることが判明した。このような状況を踏まえたうえで、実生活に即したモノの動きを観察し、消費の実態を明らかにした。

2012 年の 7 月 29 日から 8 月 6 日までの九日間に、E 家が他家との間で行ったモノの貸借を記録し、その結果を示したものが表 4 である。九日間で計 63 件の貸借（失敗含む）があり、そのうち E 家（筆者含む）の貸与が 39 件、借用が 24 件であった。対象となったモノをみると、ハサミ、懐中電灯、斧、ミシン、火バサミ、タライなどの道具類、保温瓶、蒸留器、茶碗などの台所用具、糸、石鹸、髭剃り、耳かき、セロハンテープなどの雑貨、机、長椅子などの家具のほか、衣類、履物、家畜関連用具であり、遊牧生活に欠かせないモノが多岐にわたって貸借されていることがわかる。ハサミ、火バサミ、ミシンのように同じモノが一日に何度も世帯間を往来している様子や、ハサミのように E 家で所有しているにも関わらず X 家や筆者から借用している状況も見てとれる。

貸借の相手は、E の実兄でありこの夏の共営世帯である B 家を中心であった。元来広大な土地で分散独居する遊牧民にとって共営世帯というのは家畜の協同管理以外に、モノを融通し合う最も身近な相手として認識されている<sup>17)</sup>。E 家からの貸与 39 件中、23 件は B 家に対するものであり、E 家が借用した 24 件中、12 件は B 家からの借用であった。その他、たまたま近くに宿営地を設けていた（便宜上、準共営世帯としている）X 家、J 家や、友人、知人との間でも貸借が行われており、筆者も例外ではなかった。

他家のモノを借用する感覚について E は次のように語った。「冬営地では各世帯が離れて宿営するから簡単にモノを借りに行けなくなる。〔この夏営地のように〕世帯が多いとモノを取りに来る人が増える。た

<sup>17)</sup> 物理的な近さを反映して共営世帯に期待される役割が次のような E の語りにも現れている。E 家には首都に住む知人から譲り受けた双眼鏡があった。それを E が右と左のレンズに分割して望遠鏡にし、一つを親戚の R（M の姉婿）にあげた。R のもっていた望遠鏡が雨に濡れて見えなくなったからだという。「R に頼まれたわけじゃないけど、春営地では R 家が一世帯だけで宿営していたので、すぐに借りられる相手がいなくて不便だと思ったからあげた」（2010 年 7 月 31 日）。

表4 E家の貸借記録

日付	対象	貸し手	借り手	日付	対象	貸し手	借り手
7/29	ハサミ	E家	B家	8/3	髭剃り	E家	B家
	糸	E家	B家		斧	E家	X家※
	ハサミ	E家	B家		ハサミ	X家※	E家(失敗)
	懐中電灯	筆者	E家		机	B家	E家(失敗)
7/30	保温瓶	B家	E家	猟銃スタンド	E家	JN*(失敗)	
	デール(着物)	E家	G家*	8/4	糞泥用シャベル	X家※	E家(失敗)
7/31	ブリキ桶	B家	E家		糞泥用シャベル	X家※	E家
	斧	E家	B家		火バサミ	E家	B家
	ハサミ	E家	B家		腰掛	E家	B家
	石鹸	E家	B家		机	B家	E家
	蒸留器	J家※	E家		カミソリ刃	E家	X家※
	吊るし鍋	X家※	E家		金たわし	E家	B家
	8/1	机	GD家*		E家	猟銃スタンド	E家
腰掛		B家	E家		ネグチ	G家*	E家
斧		E家	B家		電話	OL家*	E家
火バサミ		E家	B家	8/5	鋸	E家	B家
長椅子		B家	E家		ハサミ	筆者	E家
汚水用容器		B家	E家		耳かき	E家(筆者)	X家※
デール関連品		E家	J家※(失敗)		調味料	E家	X家※
火バサミ		E家	B家	木椀	E家	B家	
ハサミ		E家	B家	ナイフ	E家(筆者)	X家※	
8/2		絆創膏	E家(筆者)	X家※	斧	E家	X家※
	ガーゼ	E家(筆者)	X家※	机	B家	E家	
	容器	E家	X家※	8/6	セロハンテープ	X家※	E家
	敷布団	B家	E家		懐中電灯	筆者	E家
	茶碗	B家	E家		懐中電灯	E家(筆者)	X家※
	プラスチック袋	E家	X家※		火バサミ	E家	B家
	口の小さい容器	E家	J家※(失敗)		雨用長靴	E家	B家
	ハサミ	B家	E家		ほうき	E家	B家
	机	B家	E家				
	ミシン	E家	B家				
斧	E家	B家					
ミシン	E家	B家					
のみ	E家	B家(失敗)					

※準共営  
\*友人・知人

たとえば、〔誰かの家の〕柄杓の中に何か入っていると、『E家の柄杓はきれいだったな、それを使おう』ということになる」(2012年8月4日)。つまり、自家の柄杓を使用しながら柄杓が入用になった時、中に入っていたものを移し替えて柄杓を洗って使うよりも、他家の柄杓を借りてきた方が「手っ取り早い」と考えるというのである。では具体的に、どのように貸借が行われているのかを事例でみてみたい。

## 【事例 1】

E家で蒸留酒を作ることになり、Mが器具を借りるために準共営世帯J家へ出かけた。お茶を振る舞われたあと器具の一部であるブルフル（*bürkhüül*：鍋を覆う筒状器具）を借りてJ家をあとにし、今度は蒸留器の内部に吊り下げる容器を借りるために準共営世帯X家へ向かった。丁度家畜の所へ行こうとしていたX家の夫人に声をかけると、夫人がゲルに引き返してきた。ゲルから出てきたX家の息子は、J家から借りてきたばかりのブルフルを見て、「なんて小さいブルフルだ」という。夫人も「いつ蒸留するの？明日？なら、明日の朝うちのを借りて行ったらいいじゃないの」といいながら吊り容器を貸してくれた（2012年7月31日）。

## 【事例 2】

Mが親戚に頼まれたデールを作っており、ミシンを使う段階になったのでミシンをのせる机を借りるために共営世帯B家を訪ねた。B家の夫人は夕食の準備をしているところで、しばらくの間二人は雑談をしていた。そこへ準共営世帯X家の夫がやってきて、B家の棚の上にあったハサミを手にとると出て行こうとした。そのハサミを見たMが、「そうそう、そのハサミ、私に貸して」と声をかけると、「うちも今、縫い物してるとこなんだ」とX家の夫が振り向いて答えた。それを聞いて「それ、実際のところ誰のハサミなの？」と尋ねるMに、「うちの」と答えると、X家の夫はハサミを持って出ていった。そのうちMは「出よう」と筆者を促すと、机の事は何もいわずにB家を出た（2012年8月3日）。

事例1は、E家が恒常的に所有していないモノを他家から借用した事例である。一時的・恒常的に所有していないモノの必要が生じた際に、所有している人物のところへ出向いて利用を求めることが一般的に広く行われている。事例1では、蒸留酒作りに必要な器具の一部を、別の世帯から同時にそれぞれ借用しており、利用する側がいくつかの候補の中

から対象物や交渉相手を選好していることが窺える。事例2は、交渉が空振りに終わり機とハサミを借りられなかった例であるが、登場する三世帯を通して日常的な貸借の様相が示されている。まず、E家は諸事情によって機を一時的に所有していなかったため<sup>18)</sup>、Mが機を借りにB家を訪れた。B家はこの夏自家のハサミを何らかの事情で失っており、共営するE家から毎日のように借りていた。結婚式が集中するこの時期には、親戚に頼まれた晴れ着を作るため、どの家でもハサミの需要が高まっており、E家ばかりに頼めないB家は準共営世帯X家からハサミを借用していた。B家を訪れたMがこの時目にしたのはX家のハサミであった。切れ味の良さそうなハサミを見たMは借用を求めたが、X家でも晴れ着作りの最中でハサミが必要だったため、X家の夫によって回収された。

ここで提示されているのは、借用を求める動機は、モノの所有・所持如何に関わらないこと、貸借関係は複数世帯との間に同時並行的に成り立っていること、また、借用の際にはタイミングが重要であるということである。所有者と使用のタイミングが重なってしまった場合には、所有者が作業を終えるのを待って再度交渉する、別の世帯へ借りに行く、自家の作業日を変更するなど利用者が柔軟に調整を行うことでモノの利用を図っている。

他家のモノを利用する動機には、機能・性能が優れているという他にもさまざまな個人的理由があった。例えば、デザインが異なるからという理由によって他家の帽子を借用した事例である<sup>19)</sup>。実のところE家には、Eが結婚式や都市部に行く際に愛用しているラクダ色のテンガロン

---

<sup>18)</sup> E家がゲルを新調し家財道具を新たに調達することになった諸事情については、堀田（2015：116-117）を参照。

<sup>19)</sup> E家の長持の上に共営世帯B家の夫（Eの兄）のモノだという灰色のテンガロンハットが置かれていた。B家の夫がやって来たので帽子について尋ねると、「それはハレ用の帽子だ」と答え、自分の被っているつばの浅いハット帽を指さし、「これは雨用」という。前日Eがハラホリンに出かける際にB家の夫からハレ用の帽子を借りていったのだという。道中雪に降られた帽子は一晩たった今も濡れており、B家の夫は帽子を手にとり濡れているを確認すると、再び長持の上に戻した（2010年6月7日）。

ハットがある。そのため、なぜわざわざB家のハットを借りたのかと筆者が問いかけると、「違う帽子が被りたかった」と答えたEに対し、側で話を聞いていたMはニヤッとしながら、「けちったのよ」と答えた。自分のハレ用帽子が傷まないように温存するために人のモノを借りたのだという。また、消耗品であるカミソリ刃を切らしているという理由で借用しにくる場合や、訪問先でたまたま目に付いたので、ついでに剃っていくという場合もあった<sup>20)</sup>。このように個々人の多様な動機を背景に日常的に世帯を越えたモノの利用が行なわれている。貸借という形でモノが世帯間を循環することによって、各世帯の必要が補完されているのである。

## V モノの循環を促す文化装置

ここまで、遊牧民による他家のモノの利用という実状をイメージしやすくするために貸借（貸与・借用）という表現を便宜的に用いてきたが、現地の文脈に即して理解する場合には注意が必要である。利用権の与奪である貸借と所有権の移譲である譲渡に対する姿勢を遊牧民自身があえて首尾一貫させていないためである。遊牧民が他家からモノを借用する際の常套句は「…あるか? (…*baina uu*?)」あるいは「…を取ろう (…*av'ya*)」である。これはモノの譲与を求める交渉の際にも使われており、実際に所有者からモノが手渡される場面においても、これが貸与か譲与かは言明されない。つまりその場で行われているのは「モノの融通」である。利用後自発的に返却するか所有者に返却を求められれば結果的に貸借となり、利用後返却しないままで所有者も返還を求めなければそのまま他家に置いておかれ、それが常態化すれば譲渡と追認される。たいていの場合、交渉において使用の目的や理由が告げられるため、所有者側は相手が貸与を求めているのか譲与を望んでいるのか判断

<sup>20)</sup> E家にやってきたEの友人GM（サントの遊牧民）が無言のまま、北東側の戸棚の上に置かれたEの髭剃りで髭をそり始める。掃き掃除をしていたMは特に何の反応も示さず床を掃いている（2010年6月6日）。

できる。しかし、遊牧民にとって重要なのは、必要な時に必要なモノが利用できるか否かであり、あえて貸与か譲与かを言明しないことでモノを融通しやすくしていると考えられる。求めてくる者があれば話を聞き、相手の必要性あるいは緊急性に応じてモノを融通することが望ましいとされる<sup>21)</sup>。

そのような社会において、モノ惜しみをすることは悪徳と見なされる。正当な理由もなくモノを融通しない者は「けち (*kharamch*)」と陰口をたたかれ、家の評判が悪くなる。では、他家の要求に応えられない時にはどうするかというと、所有者による説得が行われる。Eに、人がモノを取りに来た場合に断ることはできるのかと尋ねたところ、「必ずしも〔モノを〕渡さなくてもいい。相手による」と答えた。もし、渡したくなければ、「明日、遠出するので入用だ」と理由をつけて断ることができるという(2010年6月5日)。ただし、その理由とは自然の影響によるものであったり、肉親の形見や友人からの贈り物など特別なモノだからといった、やむに已まれぬ事情でなければならない。所有者だからといって単に所有権の主張によって要求を退けることはできず、要求には応えたいが、自分にはどうすることもできないという状況を提示することで、相手を納得させることが必要になる。

このように、所有者の許可なしにモノを処分(貸与・譲渡・売却・廃棄)することができない、あるいは使用のタイミングが重なれば所有者が優先されるなど所有権を明確に認めつつも、道徳観や占有に対する社会的圧力によってモノが融通されやすい環境が作り出されているといえる。

---

<sup>21)</sup> 人がモノを求めてやって来る度にそれに応じているが、モノを惜しいと思うことはないのかという筆者の問いかけに対し、Eは「モノを惜しいと思ってはいけない」と答えた後、「思う人もいれば、思わない人もいる」、「例えば、ガソリンがないから5ℓくれ、と人が言ってきたら、何かあったんだろう、困っているならあげようと思って〔自分なら〕あげる」と語った(2012年8月4日)。

## VI 消費の最終形態

モノの来歴において、生活財の4割相当が親戚・友人・知人といった社会関係を基盤とする贈与・譲与と借用・混入によって流通していることを述べたが、実際の生活においても、利用を求める者が所有者の下へ出向き、交渉によってモノの利用権（貸借）あるいは所有権（譲渡）を獲得するという形で「モノの融通」が実践されていることが明らかになった。モノの融通とは、現物が利用者の手に渡り使用されるということであり、まさに消費にあたる。つまり、遊牧社会においては、モノは世帯を越えて移動（流通）しながら消費されているのである。

世帯を越えた消費が行われているとはいえ、貸与、譲渡、売却、廃棄については処分権の範疇であり、所有者にしか認められていない。しかし、貸与によって所有者の手元から離れたモノには、弁済の不履行（持ち逃げ）<sup>22)</sup>、原状回復不可能な改変（破損、すり替え）<sup>23)</sup>などのリスクが伴うことになる。通念的には借用中に過失や故意によって紛失、損壊した場合には、同等のモノで弁償しなければならないとされている。だが、実際に弁償するかどうかは当事者に委ねられている。Eが要求を断る際に「相手による」と答えた背景にはこのような事情がある。

貸与のリスク以外にも所有者の意図しないモノの移動として遺失と盗難がある。家事や放牧の合間に他家を訪問することが遊牧民の日課の一つであるが、特に男性の場合飲酒の機会が多くなるため、訪問先に帽子

<sup>22)</sup> 昨年の秋にEの遠縁にあたるOが深夜に、車が動かなくなったから灯りを貸してくれと言ってきたので、E家にあった手巻き充電式の懐中電灯を貸した。その後「返せ」といったがそのまま戻ってこないという（2012年7月29日）。

<sup>23)</sup> E家が親戚R家に貸与していた60ℓのポリタンクが戻ってきた。タンクを調べてみると、蓋とタンクを固定する金具が別のものにすり替えられていることがわかった。Eが「金具は？」と尋ねたが「知らん」と相手は答えた。親戚が帰ったあとEは「締め具の悪い固定具だったからすり替えられたな」と不満を口にしていった。それから、「こうしておかないと危険なんだ」と言いながらタンクの腹と蓋と固定具に、ペンキで自分の名前のイニシャルを書き付けた。作業を終えると満足げに「これでもうすり替えられない」と語った（2009年9月7日）。

や携帯品を忘れてたり、道中に落として来たりすることがよくある。発見した人が取り置いてくれたり、家に届けてくれたりすることもあるが、手元に戻らないことも多い。また、モノが盗難に遭うこともある。E家では、家具の上に置いていた双眼鏡が、B家では春営地に置いてあった床板が盗まれるという出来事があった。人の出入りが多いため、誰がいつ盗んだかを特定することは困難である。

他方で、使用に耐え汚れや傷みがひどくなったモノ、いらなくなったモノは即座に廃棄の対象となる。モノの新旧によらず所有者が不要と判断したモノは焼却処分され、生活世界から排除される。廃棄が決まったモノはゲルの入口付近に人目に触れない状態で留めて置かれ、ある程度の量になるとまとめて外の糞泥置場で焼却される。タイヤ、鉄くず、陶器片、時計、保温瓶、靴などを一緒くたに燃やす。焼却処分にする目的は、モノの移動を完全に止めるためである。事例3に挙げたように、所有者が廃棄を決定したモノであっても、要求者が現われれば再び流通・消費の循環に取り込まれてしまう。また、廃棄のつもりで外に放っただけでは、誰かが拾って加工し使用することもある。そのため、個人的なモノや他家による再利用を好まないモノについては、焼却による不可逆排除を行うのである。

### 【事例3】

Mがトランクから子ども達の衣類や端布を取り出していたので、どうするのか尋ねると、傷んだので焼き捨てるという。ダルハン市に住む親戚から送られてきたボストンバッグの中からも、要るモノだけを取り、残りの古着や端布は焼却処分しようと選別していた。そこへ共営世帯G家の夫人がやって来た。床に置かれた布の山を捨てようとしているのを知ると、「こんな新品の布、捨ててどうするの?!」とって見えそうなきれいな布を数点抜き取り、それらをMが端布をいれて燃やそうとしていた透明のプラスチック袋に入れた。「こんないい布捨てるなんて!若い人はモノの価値がわからないのかしらね」などとG家夫人がぶつぶついいながら布を取っているのを、Mは微

妙な表情で見ながら、「別に、使わないし…」と小さな声で反論した(2009年8月30日)。

## Ⅶ 考察と結び

本稿では、遊牧志向型遊牧民の日常生活におけるモノの動きに着目し、その生存戦略をみてきた。彼らは家畜を自家消費に回し、カシミヤ、毛皮、乳製品の販売、およびサマルなどの収獲物の販売によって生計を立てている。また、他家に便乗したり畜産品の販売や生活財の購入を委託したりすることで市場へ出向く機会を集約し、アクセス経費の縮小を図っている。このように食料品や生活財の需要を満たすための市場の利用がみられる一方で、市場との直接交換を経ずに流通し消費されているモノの実態が浮かび上がった。親戚や共営世帯間における生活財の融通がそれである。モノに対する所有権を認めつつも、社会関係を活用した交渉によって占有権を制限し合うことで、モノの移動と消費を図っている。このようなモノの融通による流通・消費システムが市場経済に対する緩衝装置としての機能を果たしていると考えられる。急激な生活の変化や世帯間の格差を吸収し、市場でモノを獲得した世帯から他の世帯へとモノの再分配が図られていく構図である。モノを所有しなくとも利用できるという文化・社会的環境が遊牧志向型の生存戦略を可能にしているのである。

ただし、この戦略を支えるためには、消費の最終形態のところでも触れたが、モノを利用の循環の中に取り込もうとする社会的圧力が非常に強く働くことになる。貸与を拒否するための所有者による説得や、焼却によるモノの強制排除が必要となるところからもその圧力が窺い知れる。そのような遊牧生活において、占有権の主張による移動の制限がどのように受け止められるのかを示す事例を最後にあげる。

親戚であるC家一家がE家を訪ねてきた折、C家からヨーグルトのお裾わけを受けることになった。Mから二つの茶碗を託されたC家の娘が自宅へ向かって駆け出したところに、E家の次男U(6歳)が動く

わした。UはC家の娘が手にしている茶碗を見とがめると、「人の家のモノを取っていくな!」と大声で叫びながら追いかけて行き、しばらくして「茶碗が取られた。返せて言っても返さない!」とベソをかきながら戻ってきた。それを呆れながら聞いていたC家夫人は「市場経済 (*zakh zeel*) の申し子ね」といって笑い、「怖がりなさんな。モノを取りに行っただけよ」となぐさめたのである (2010年6月4日)。

ここから読み取れるのは、市場経済が「排他的な使用权 (占有権)」を意味し、社会関係を無視して発動されることで融通原理を脅かしかねないと捉えられていることである。部分的に市場との直接交換を利用する彼らは、市場における交換原理と日常生活における融通原理を相手や状況に応じて使い分けている。親戚や共営世帯という社会関係にあれば入手方法の如何によらず、交渉によってモノの融通を受けることが期待できる。そのような融通原理で展開している場面において、モノのフローを堰き止めるようなUの言動は「市場経済」、つまり逸脱と見なされたのである。

## 付記

本稿は2015年に総合研究大学院大学文化科学研究科へ提出した博士論文「モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌」の一部および既発表論文「モノに執着しないという幻想—モンゴルの遊牧世界におけるモノをめぐる攻防」『総研大文化科学研究』第8号、117-135頁、2012年の一部に加筆修正を行ったものである。

## 参考文献

- Baatarbileg Yo., Chadraa B. (eds.)  
 2009 *Arkhangai Aimag-Baigal', Tüüikh, Soyol, Khümüüis*, Arkhangai.  
 日野千草  
 2001 「モンゴル遊牧地域における宿营地集団—モンゴル国中央県ブレン郡における事例から」『リトルワールド研究報告』17: 89-125。  
 堀田あゆみ  
 2015 『モンゴル遊牧民エンフバト一家のモノ語り *Nomadic Life in Mongolia — Stories of Enkhbat Family and their Belongings*』株式会社テクネ。

辛嶋博善

- 2010 「取引費用の引き下げ方—モンゴル遊牧民と市場」中野麻衣子・深田淳太郎編『人=間の人類学—内的な関心の発展と誤読』pp.191-209、はる書房。

風戸真理

- 2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌—ポスト社会主義を生きる』世界思想社。

三秋尚

- 1995 『モンゴル遊牧の四季—ゴビ地方遊牧民の生活誌』鉦脈社。

森真一、ガントゥムル・B

- 2002 「II部 遊牧の市場経済化への試み／第3章 食肉流通革命・計画編」小長谷有紀編著『遊牧がモンゴル経済を変える日』pp.67-91、出版文化社。

National Statistical Office of Mongolia

- 2011 *Mongolian Statistical Yearbook 2010*, Ulaanbaatar.

ロッサビ・モリス

- 2007(2005) 『現代モンゴル—迷走するグローバリゼーション』小林志保訳、小長谷有紀監訳、明石書店。

佐々木史郎

- 1998 「ポスト・ソ連時代におけるシベリア先住民の狩猟」『民族学研究』63(1):3-18。

佐藤浩司

- 2006 「暮らしを支えるゴミの目立て」『繊維製品リサイクルモデル研究会公開研究報告書』pp.37-43、Rifmo 研究会。

Tanaka Jiro

- 1980 *SAN, Hunter-Gatherers of the Kalahari-A Study in Ecological Anthropology*, University of Tokyo press.

津江篤典

- 2013 「資源収入再配分の一例—モンゴル人間開発基金」『龍谷大学大学院経済研究』13:3-4。



---

---

## 結 論

### 一国家規模あるいはグローバルな流通にみる モンゴルの文化的指向性—

尾崎 孝宏・風戸 真理

(鹿児島大学法文教育学域・北星学園大学短期大学部)

本書の目的は、主としてモンゴル国と中国内モンゴルにまたがって暮らすモンゴル系の人びとの経済活動、とくに牧畜の文化に根ざしたモノである畜産物の生産・流通・消費に着眼して、モンゴル高原地域における物流システムの特徴とその変化を、国家の体制およびグローバルな経済システムとの関係のなかで検討することにあつた。ただし、執筆者は全て人類学者であり、その中でも多くが牧畜に関わる研究を行ってきた。こうしたバックグラウンドを持つ執筆者たちが、なぜ牧畜社会の経済活動を総体的に議論しようと思ひ立ったのか、まずはこの点について説明したい。

一つは、人類学における牧畜研究がしばしば分類される生業論の特性に由来している。生業論はその字義通り、基本的には生業経済による食料や物資の調達を前提とした議論であるがゆえ、生産・消費、あるいはコミュニティ内での分配に対して議論が集中し、異なる生業に携わる人々との流通などに関わる経済活動はさほど大きな注意を払われていなかったと言わざるを得ない。無論、この傾向はモンゴル牧畜に関する人類学的研究においても例外ではなかった。議論のメインは、いかに家畜を生産し、いかに消費するかであり、流通は生産者によって消費されない生産物の行先、という程度の位置づけであつて、売却後の流通プロセスに関しては等閑視されてきたと言っても過言ではない。

しかし、牧畜はそもそも人類史的に見れば新しい生業である。牧畜が成立した時、採集狩猟は当然ながら先行し、農耕も既に存在していた可

能性が高い〔藤井 1999；平田 2013：439-441〕。そうした環境で成立した牧畜が、流通という選択肢を放棄し自給的な閉じた系へと完全に撤退する可能性は皆無とは言えないが、低いと考えられる。しかも世界的に見れば牧畜民といえども多少なりとも農耕などにも携わっている事例が多い中で、モンゴル系の牧畜民は例外的に牧畜専業的である〔松井 2001：19-25〕。この専業性の高さは、自ら農耕に従事しなくとも農産物を確保できるが故の結果であると考えるのが自然であろう。例えばモンゴルの伝統食の一つとみなされる茶は、南中国で生産されたものを遠路モンゴルまで輸送して消費されてきたが、茶馬貿易は宋代（10世紀以降）から始まっている〔狩野 1963：319〕。すなわち、モンゴルは周囲の農耕社会の存在との関係の中で維持されてきた牧畜文化であると言える。そうしたモンゴル系の牧畜民の経済活動を考える場合、流通を抜きには議論は成立しないというのが本書の主張である。

また第二には、国家の体制およびグローバルな経済システムをモンゴルの畜産物の歴史にどう位置付けるか、という問題の存在である。グローバルな経済システムという、一般には1990年代以降の事象が想起されるだろう〔佐伯 2012：18〕。しかしモンゴルに関して言えば、地域的な差異はあるものの20世紀前半より近代国家への取り込みは始まっており、同時に広域的な経済システムへの接合も行われた。また前述したように、そもそもモンゴルの牧畜は、前近代においても広域的な経済システムや国家体制の中で営まれてきた営為である。さらに、英語のCattle（家牛）という語はCapital（資本）と同じ語源から派生している点を想起すれば〔リフキン 1993：26〕、牧畜はそもそも近代的な経済行為のプロトタイプであったともいえるだろう。その意味で、モンゴルの牧畜社会と国家の体制やグローバルな経済システムとの関係性は現代に限定された問題ではない、という認識が本書のもう一つの背景となっている。

そうした前提の上で本書では、主として社会主義時代から現在までを対象に、貨幣で媒介される交換経済が世界的に拡大してきたプロセス（社会主義期を含めて）の一端として、東北アジア地域における「グ

ローライゼーション」の展開にみられるローカルな特徴を議論した。なお、各論文の内容と位置づけについては、以下の通りである。

本書に収録した論文の着目点は、大まかに言って生産・流通・消費の順番に並んでいる。もちろん、各論文は多かれ少なかれ、上記3要素の複数もしくは全てに関連していることは言うまでもない。なお、本書はその作成プロセスにおいて、各章の執筆者がまとめた原稿に対し、編者が議論の統一性に関する観点などから加筆修正を要求し、執筆者がそれにこたえてリライトするという手順を踏んでいることをここで明記しておきたい。

まず、風戸論文が取り上げたのはゲルの壁や屋根として使用する住居フェルトの生産および原材料となる羊毛の流通である。風戸によれば、住居フェルトの生産方法は1930年代より半機械化がなされ、1950年代に社会主義集団化体制の浸透により羊毛の流通が国家によってコントロールされるとフェルト工場へ回される分量が増えるものの、1990年代の社会主義崩壊後の時期には手作業による住居フェルト生産の復活がみられ、2000年以降になると再び工場生産が増加するという。

その背景にあるのは工場生産と手作業の生産方法の原理的な連続性であり、ゆえに両者の相互補完性が成立しうることになる。しかしながら、モンゴル人が対外的には手製のフェルトのみを「伝統」の位相へ位置づけようとする試みは興味深い。だがそれ以上に、ゲルの居住者たちは、機械製の住居フェルトと手作業で作られたフェルトをその特性に応じて使い分けながら併用している点が注目に値する。彼らは新しくて便利なテクノロジーを生活の便宜に役立てることに長けているのである。なお、原料としての羊毛は清朝時代から域外への交易品であったし、フェルトもモンゴル内部での貢納品としては流通の回路に乗りうる物品であった。その意味で、モンゴルにおけるフェルト生産は、近代における社会主義経済や市場主義経済の浸透による経済活動の変容以前から、羊毛（原毛および製品）流通をめぐるフォーマルな制度の客体であり続けてきたとも言えるだろう。

冨田論文が取り上げた乳製品は、社会主義時代以前には基本的に家庭

内での自足的な消費の対象であり、社会主義時代の国家調達でモンゴルにおける乳利用の変化をもたらす契機となったと考えられる点で、羊毛以上にローカルな生産物であったと言える。また、乳製品の中でまず国家調達の対象となったのは牛乳の脂肪分を原料とするバターであり、ついで脱脂乳から分離されるカゼインであった。ただしその製法はモンゴルの土着的な加熱による脂肪の分離ではなく、遠心分離機を使ったクリーム分離が導入されたという点で、従来の技術との断絶が存在する。それはモンゴル人が遠心分離器による脱脂後の脱脂乳に「シンゲン・スー」（薄い乳）という、従来の製法による脱脂乳（ボルスン・スー）とは異なる語彙を当てたことにも象徴的に示されている。脂っこい食物を好むモンゴルの価値観からすれば、「薄い」という味の表現にはネガティブな意味が込められている。また工業原料としてのカゼインの生産も、このモンゴル人の価値観にそぐわない脱脂乳の用途として導入された。そして社会主義時代にも、モンゴル牧畜民の自家消費用には加熱による脱脂から開始する乳製品の系列が作られ続け、技術と流通経路の併存状態が継続したのである。

社会主義崩壊後、労働の集約化や生産・流通の組織化を必要とするバターやカゼインは生産されなくなったが、遠心分離機は都市郊外の牧畜民が都市部に販売するクリームやチーズを効率的に生産するために利用されはじめ、従来は遠心分離機を使った乳製品が消費される空間ではなかった「域内」としてのモンゴル国内に流通し始めているという。つまり市場経済原理の浸透により、単に乳製品が販売対象となるだけでなく、技術面でも外来技術の導入といった変化が発生しているといえるだろう。

尾崎論文が議論の対象としたのは乳酒であり、カテゴリー的には富田論文の扱った乳製品の一部である。ただし、乳酒はそもそもモンゴル内部でも生産地域が限定される、ローカリティの強い乳製品であった。また乳酒を含む乳製品全般が、近代以前には域外への流通の対象ではなく、モンゴル域内でも狭い空間的範囲内で生産から消費までが完結する産物であったことが想像される。そうした乳酒の中で、モンゴル国では

醸造酒に属する馬乳酒だけが二重の意味で「動く」きっかけを与えられた。一つは生産地域の拡大であり、この背景には国家儀礼としてのナーダムが全行政単位で実施されたことと関連が深い。実際、現在でも生産が盛んでない地域の特徴として、ナーダム終了後に馬乳酒の生産が終了する傾向が見られる。もう一つは旧来からの生産地に見られる特徴としての、販売目的での外部への流通の開始である。ただし流通先の外部とはモンゴル国内の都市部であり、社会主義期に進められた都市化、従来輸送が困難だった馬乳酒の輸送を可能にした協同組合の存在などが背景として挙げられる。一方内モンゴルにおいては歴史的要因により、生産地域の拡大はみられず、また都市化の進行も相対的に遅れたままで市場経済に移行したため、馬乳酒の流通においては全国展開はなされなかった。

その後市場経済の浸透により、モンゴル国でも内モンゴルでも、郊外の牧畜民にとって馬乳酒は貴重な収入源として販売・流通の対象となっており、その背景には通信・輸送手段の「利便化」や購買層としての都市居住者の存在がある。また製造法等に関しては雇用労働力や生産機械の導入、冷凍庫による長期保存などといった変化が内モンゴルでは見られるが、基本的な生産技術に関しては大きな変化は見いだせない。なお、蒸留酒に関しては現在に至るまで生産地域の拡大も、販売・流通も発生しておらず、その差異をもたらした原因としては馬乳酒の薬効や、儀礼食としての機能が推測される。つまり都市人口という潜在的な購買層の出現だけではなく、実際の購入動機が存在し、さらに継続的销售を可能とする流通体制の確立が揃って、それまで販売されてこなかった乳製品の商品としての流通が開始するのである。

寺尾論文は、モンゴル国内あるいはモンゴル国と隣国との間で流通、つまり物資や人の移動を担う長距離ドライバーに焦点を当てている。社会主義時代、流通は基本的に公的セクターが直接管理しており、バスや飛行機の乗客が手荷物として私的に流通へ関与することがあったにせよ、その運行そのものは計画経済体制から自由な存在ではなかった。一方で現状は、行政系統に沿った首都＝県中心地、あるいは県中心地＝郡

中心地の流通は恒常的に、公共交通機関としての体裁を取りつつ運行されているのに対し、郡中心地から首都への流通は公共機関である「首都間旅客輸送」の運行として実施されている地域が普遍的に存在するわけではなく、往々にして運転手個人の生活設計や才覚、そして所有する車種や車齢に依存したインフォーマルな運行によって担われている。これらは季節のない単発的であり、需要の見込める場合には国境への流通も担う一方で、必ずしもすべての運転手が恒常的な運行で安定した収入を目指しているわけではない。

つまり状況は地域社会の需給や運転手のビジョンに依存し、これら個別的事情のバランスの結果として流通は存在しているのである。モンゴルにおける牧畜の戦略には必ずしも専門化や規模の拡大を目指さないタイプが存在することは富田論文が指摘するとおりであるが、こうしたいわばフレキシビリティを活用する生存戦略は、今日のモンゴルにおいては流通においても見出すことが可能であると言えよう。またそれは、モンゴルの人口密度や人口規模と関連を有することは間違いないだろうが、単なる環境決定論ではなく、彼らのリスク分散志向、あるいは環境の激変に対する機動的対応の重視といった文化的志向性もそこには介在していると考えられるべきかも知れない。

堀田論文は、モンゴル国の牧畜民世帯における流入方向としての流通、および消費に焦点を当てて論じたものである。こうした物資は食料や日用品、耐久消費財などが挙げられ、牧畜民の日常生活に欠かせない存在であるが、これらのうち多くは畜産物の売却、もしくは各種補助金等によって得られた現金によって市場から購入されてくる。また社会主義時代に旧ソ連を中心とするコメコン経済圏から多様な工業製品が牧畜民世帯へもたらされ、彼らの物質文化に大きな変化がもたらされた。また、1990年代初頭の社会主義体制の崩壊後、モンゴル国がグローバルな資本主義経済に接合されると、牧畜民世帯におけるモノは一層多様となった。

ただし、少なくとも都市から離れた遠隔地に居住する遊牧志向型の牧畜民の事例に関する限り、彼らの世帯内に存在するモノは必ずしも自身

が直接市場から購入・交換によって調達したものとは限らず、贈与・譲与（27.6%）、作製・転用（24.8%）さらには借用・混入（12.6%）に由来しているものが少なからず存在している。無論、贈与・譲与されたものや借用・混入されたモノの起源をたどれば多くが市場に到達するわけであるが、それでも彼らはこうした経路を通じて市場の距離を保っているのだと理解しうる。さらに、モノの貸借による循環は世帯間において頻繁に行われており、これはモノの排他的な独占を伴わない消費のプロセスであると解釈しうる。彼らはこうした、旧来からの文化的装置の継続的利用により、市場やグローバルな経済システムに過剰にさらされることなく、低コストで必要な効能を手に入れることで生存を容易にしているのである。

これらの論文を通して本書が明らかにしたことは、以下の通りにまとめられる。まず、モンゴルにおいては基本的に、時代を下るにつれて流通の対象となる畜産物の種類が増加し、またモンゴルへ流入する物資の品目数および絶対量が増加している傾向が見られる。またこの増加プロセスは、社会主義体制の導入や市場経済の浸透などといったイベントを画期として、非連続的な変化を遂げてきたといえる。

ただし唯一の例外を挙げるとすればモンゴル国における家畜（生体および肉）であり、1990年代以降の市場経済の浸透と入れ替わるように流通の国内化が進行する。家畜は前近代のモンゴルにおいてほぼ貨幣と同義であったし、社会主義体制下での旧ソ連との貿易も実質的にはバーター取引であり、その意味では家畜はすぐれて貨幣的な存在であり続けてきたといえよう。その家畜の持っていた貨幣的な機能が1990年代以降に後退した理由は2つあるだろう。一つには貨幣で媒介される交換経済が浸透した結果、家畜の貨幣的機能が狭義の貨幣に取って代わられたことが考えられる。逆に言えば、社会主義体制下でも労働者の賃金などの形で貨幣の浸透は見られ、貨幣で媒介される交換経済がモンゴル牧畜社会に出現した意義は大きいものの、その一方で社会全体の家畜本位制的性格に大きな変化は見られなかったと言えるだろう。

もう一つの理由は、肉は国境を越えてグローバルには流通しにくい、

という商品特性である。現代の肉の輸出入においては、2国間での家畜衛生条件の締結が必須である。だがモンゴル国は口蹄疫という家畜感染症が頻発しており、日本など多くの国と偶蹄目（ヒツジ、ウシなど）の生肉に関する家畜衛生条件は締結されていない。ロシアは社会主義時代にモンゴルから大量に肉を輸入してきた実績があるという歴史的経緯や肉不足を背景に現在でも生肉（家畜生体を含む）の輸入をしているが、モンゴル国から中国への肉の輸出は2015年に加熱処理された肉に限って実現したばかりである。もちろん内モンゴルにおける肉も同様の問題を抱えてはいるが、中国という巨大市場の存在ゆえに現状では問題が顕在化していない。

それでは、現在のモンゴル国はグローバルな市場に何を流通させているのかという問題になるが、それは石炭や銅・鉛などの鉱産物であり、また畜産物ではカシミアであり、あるいは労働力としての人そのものであったりする。こうした対象は本書では正面から扱っていないが、おそらくそこにも本書の対象群と同様の文化的分析や解釈の余地が存在するものと思われる。特に毛や労働力というのは、モンゴル牧畜社会からの旧来の輸出品を構成しており、その意味においてもモンゴル文化内で独自の位置付けがなされている可能性は高いと思われる。また鉱産物についても、流通が関わる限り、寺尾論文のような個人に焦点を当てたアプローチでの分析は有効であろう。こうした対象の拡大は今後の課題である。

また本書の成果として、モンゴルにおける「グローバリゼーション」の展開にみられる特徴を挙げることができるだろう。まず貨幣、あるいは広域的な流通による影響を大きく受ける領域と、あまり変化しない領域が存在する点である。あまり変化しない領域としては乳酒の製法や消費の形態が想起できるのに対し、肉や乳製品は比較的大きく影響を受けているといえよう。これは、国家をはじめとする近代的制度がモンゴル牧畜民に対して及ぼす影響力の範囲は総じて拡大している一方で、牧畜民は可能な限り自らの持つ文化的ストックを利用しつつ対応してきた結果であると解釈できるだろう。

さらにいえば、モンゴルの生産・消費・流通のあり方からは、モンゴル人がグローバルな／新しいテクノロジーを積極的に受け入れて、これを彼らなりのやり方で使いこなしてきたことがわかる。その例としてあげられるのは、フェルト生産においてもっとも重要な羊毛の縮絨工程を担う輪転機の導入、モンゴルの乳加工の要である乳から脂肪分を分離する過程を著しく時短した遠心分離器の利用、そして馬乳酒を1000回攪拌するための動力攪拌機の開発、また、運輸においてはラクダや牛車による荷運びから自動車への変化、日常生活においては工業製品の活用、などである。とくに運輸については、トラック運転手たちのもっとも重要な商売道具として自動車とならんで携帯電話が不可欠であることに注目したい。ただし、彼らがテクノロジーや動力機械を取り入れるやり方には、伝統とテクノロジーを併用し、両者を併存させるような器用仕事の側面がみられた。その顕著な例は乳製品の加工にみられる。すなわち彼らは、対外的な流通用には機械で作ったバターを、自家消費用には炭火でじっくりと析出させたクロテットクリームを作ってきたのである。このように、モンゴルの人びとは動力機械やテクノロジーを進んで受け入れ、かつ、これらを伝統的な方法と併用し、ときには両者をミックスしてローカライズしてきたのである。

また貨幣や広域的な流通にもかかわらず、彼らは必ずしも専門化という形で経済効率を追求しない傾向も見て取れる。本書で言及した郊外の牧畜民しかり、運転手しかりである。彼ら自身の意識は定かではないが、フィールド研究者の目から見る限り、彼らは多様なオプションの可能性を否定しないことで来るべきリスクに備えているかのように見える。むしろ専門化の傾向が看取されるのは社会主義集団化期の農牧業協同組合や、内モンゴル郊外の馬乳酒生産者のように「持てる者」の側であるが、それとて完全に一業態に特化することは稀である。この原因として想起されるのはモンゴルの変化しややすい環境（自然環境及び社会環境）、専門化をするには希薄な人口、生計手段の変更を伴う空間的移動（例：都市と草原）の頻繁さなどであろう。これらをさしあたり、「モンゴルの」ないし「移動牧畜民的」と評することはあながち的外れではあるまい。

## 参考文献

- 藤井純夫  
1999 『『群れ単位の家畜化説』—西アジア考古学との照合』『民族学研究』64(1): 28-57。
- 平田昌弘  
2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店。
- 狩野直禎  
1963 「茶馬貿易の終末—雍正時代の茶法の實態をめぐって」『東洋史研究』22(3): 319-339。
- 松井健  
2001 『遊牧という文化』吉川弘文館。
- リフキン、ジェレミー  
1993(1993) 『脱牛肉文明への挑戦—繁栄と健康の神話を撃つ』北濃秋子訳、ダイヤモンド社。
- 佐伯啓思  
2012 『経済学の犯罪—稀少性の経済から過剰性の経済へ』講談社。

## 執筆者紹介（五十音順）

尾崎 孝宏（おごき たかひろ）

1970年生。鹿児島大学法文教育学域・教授。修士(学術)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。専門は文化人類学、内陸アジア牧畜社会論で、モンゴル系牧畜民社会を主対象として近代政治経済システムとの関係性に起因する牧畜民の社会変化について研究。主要業績に『モンゴル遊牧社会と馬文化』（共編著、2008年、日本経済評論社）、『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界』（共著、2016年、風響社）などがある。

風戸 真理（かざと まり）

1973年生。北星学園大学短期大学部・専任講師。博士(人間・環境学)、京都大学人間・環境学研究科博士課程単位取得退学。専門は人類学で、モンゴルおよび中央アジアの牧畜地域における、モノの生産・流通・消費のあり方からみた社会変化、ローカルな文化とグローバルな価値の出会い方について研究。主要業績に『現代モンゴル遊牧民の民族誌』（単著、2009年、世界思想社）、『贈与論再考—人間はなぜ他者に与えるのか—』（共著、2016年、臨川書店）、『世界の手触り—フィールド哲学入門』（共著、2015年、ナカニシヤ出版）などがある。

高倉 浩樹（たかくら ひろき）

1968年生。東北大学東北アジア研究センター教授。博士(社会人類学)、東京都立大学大学院社会科学研究科単位取得退学。専門は社会人類学、ロシア＝シベリア研究。シベリア先住民研究や日本を含む北方史などの地域研究に関心をもつとともに、近年は地球温暖化の人間社会への影響、災害対応における社会文化の役割、民族誌映像と展示に関わる人類学プロジェクトを実施している。主要業績に『展示する人類学』（編著、2015年、昭和堂）、『無形民俗文化財が被災するということ』（共編著、2012年、新泉社）、『極北の牧畜民サハ』（単著、2012年、昭和堂）などがある。

寺尾 萌（てらおもえ）

1987年生。首都大学東京大学院人文科学研究科・博士後期課程在学中。修士(社会人類学)。専攻は人類学で、主にモンゴル社会における酒宴と歌謡実践の現代的意義について研究。他の業績に「ポスト社会主義ナショナリズムと音楽：現代モンゴルの大衆歌謡にみる『モンゴルらしさ』をめぐる」（首都大学東京大学院人文科学研究科修士学位論文、2013年）がある。

富田 敬大（とみた たかひろ）

1983年生。立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構・専門研究員。博士(学術)、立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。専門は文化人類学、近現代モンゴル社会史で、モンゴル国における人間＝環境関係を、20世紀の社会経済変動と環境変化との関連に着目して研究。主要業績に、「モンゴルにおける人と自然のかかわり―遊牧民による環境利用の近現代的変容」『環太平洋文明研究』（第1号、2016年、雄山閣）、『現代モンゴルを知るための50章』（共著、2014年、明石書店）、『体制の歴史』（共著、2013年、洛北出版）などがある。

堀田 あゆみ（ほった あゆみ）

1980年生。国立民族学博物館・外来研究員。博士(学術)、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学。専門は文化人類学、モンゴル文化研究で、モンゴル遊牧社会におけるモノおよび情報をめぐる相互行為について研究。主要業績に『モンゴル遊牧民エンフバト一家のモノ語り』（単著、2015年、テクネ）、「モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌」（総合研究大学院大学文化科学研究科提出博士学位論文、2015年）、『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』（共編著、2013年、国立民族学博物館調査報告111号）などがある。

森永 由紀（もりなが ゆき）

明治大学商学部・教授。博士(理学)、筑波大学大学院地球科学研究科博士課程中退。専門は気候学、環境科学で、モンゴルの遊牧と気候の関係に着目して自然災害ゾドや、馬乳酒の伝統的製造法を研究。主要業績に『多元的環境問題論(増補改訂版)』（共編著、ぎょうせい、2006年）、“Who is making airag(Fermented Mare’s Milk)? : A nationwide survey on traditional food in Mongolia”（共著、*Nomadic Peoples*、2014年）などがある。



## あとがき

本書は、人類学ならではの直接体験に依拠するフィールドワークの感動や興奮がそのまま詰めこまれた、小さな、だが、きらりと輝く天然石のような論集になったと自負している。執筆者の多くが、モンゴルと日本を行き来しながら原稿を書きあげてきた。モンゴルの草原に本拠地をおいての長期フィールドワーク中に、郡や県の中心地に出てきてはパソコンに向かった者もいる。

編者らは、フィールドの臨場感あふれる原稿を読んで、わくわくしながらコメントを送った。これに対して著者らは、コメントに応えるために再び草原に出かけて調査と思索を深める、というプロセスを踏むことで本書はできあがった。

なお本書は、「はじめに」でも述べたとおり、2回の公募共同研究を土台として編まれた論文集である。共同研究の成果の概要は以下の通りである。

### 2014年度 第1回シンポジウム

「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」

場 所：東北大学東北アジア研究センター ラウンジ

日 時：2015年3月7日（土）10時15分～18時

主 催：東北アジア研究センター

#### 〈プログラム〉

- ・開会辞 風戸真理（北星学園大学）
- ・報告1 「内モンゴルにおける牧畜戦略に対する物流の規定性」  
尾崎孝宏（鹿児島大学）  
コメンテーター 小沼孝博（東北学院大学）
- ・報告2 「移行経済下の都市周辺地域における牧畜経営の実態とその特徴」  
富田敬大（立命館大学）  
コメンテーター 杉本 敦（東北大学）

- ・ 報告 3 「モンゴル国における羊毛製品流通の変化にみる文化の動態」  
風戸真理（北星学園大学）  
コメンテーター 塩谷昌史（東北大学）
- ・ 報告 4 「清朝治下モンゴルにおける人とモノの移動」  
中村篤志（山形大学）  
コメンテーター 尾崎孝宏（鹿児島大学）
- ・ 総合コメント  
高倉浩樹（東北大学）、岡洋 樹（東北大学）
- ・ 総合討論
- ・ 閉会挨拶 尾崎孝宏（鹿児島大学）

## 2015 年 第 2 回シンポジウム

### 「モンゴルとカザフにおけるモノの域外流通と域内流通」

場 所：東北大学東北アジア研究センター 大会議室

日 時：2016 年 2 月 20 日（土）10 時 30 分～18 時

主 催：東北アジア研究センター

#### 〈プログラム〉

- ・ 趣旨説明 風戸真理（北星学園大学）
- ・ 報告 1 「18-20 世紀ロシア=中央アジア間の隊商交易とカザフの牧畜」  
塩谷哲史（筑波大学）
- ・ 報告 2 「社会主義モンゴルにおける生産と流通の関係とローカリティ」  
富田敬大（立命館大学）
- ・ 報告 3 「現代モンゴル高原における乳酒の製造と流通について」  
尾崎孝宏（鹿児島大学）
- ・ 報告 4 「モンゴル国の牧畜社会における贈与とゲル」  
風戸真理（北星学園大学）
- ・ コメント  
岡洋 樹（東北大学）  
塩谷昌史（東北大学）  
高倉浩樹（東北大学）
- ・ 総合討論
- ・ 閉会挨拶 尾崎孝宏（鹿児島大学）

これら2回の共同研究から本書の出版企画に至るまで、3年間にわたって私たちを支援して下さった東北アジア研究センターのみなさま、また、シンポジウムにご参加くださり、貴重なご報告および重要なコメントをくださったみなさまにこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。本書を出版することができたのは、ひとえに皆様方のあたたかいご指導とご鞭撻のたまものと心より感謝申し上げます。

2016年10月5日

風戸真理・尾崎孝宏

## Summary

This book entitled, "Production, Distribution and Consumption in Mongolian Pastoral Society," is an anthropological study of economic activities of Mongolian herders. The book specifically examines the distribution of livestock products in Mongolia and Inner Mongolia, in China, by focusing on characteristics and changes in the distribution system of the Mongol Plateau in relation to national institutions and the global economic system.

Interactions among Mongolian pastoral society, national institutions, and the global economic system did not begin in contemporary times, but had been taking place since pre-modern times. Mongolian pastoral society was accepted by modern nations in the early 20th century, when it established relations with a wide range of economic systems. In this book, the term, "globalization" refers to the process in which monetary exchange economies are globally expanding. Thus, the socialist era is considered as one case of globalization. The aim of the book is to describe the development of "globalization" and to identify its local characteristic in northeast Asia. The period of study highlighted in the book is from the 1920s to the present. We have emphasized the critical role of the period after 1990s, when the Mongolian pastoral society was penetrated by market economy. Chapters 1 and 2 of the book focus on production, Chapters 3 and 4 on distribution, and Chapter 5 on consumption. Chapter 3 focuses on the geographical area of Inner Mongolia, whereas other chapters focus on Outer Mongolia.

Chapter 1 (Kazato) portrays felt, which is used for making roofs and walls of yurts. The felt production mode has changed along with changes in national institutions, from handmade to machine-made felt. Today, consumers can choose between handmade and machine-made felt as needed, which complement each other. Chapter 2 (Tomita) deals with dairy products, which were formerly consumed domestically. However, the national procurement process of the socialist era brought about changes in the use of milk. When butter and casein, which had not been consumed in Mongolia began to be produced, new tools, such as cream separators, as well as new techniques had to be imported.

Chapter 3 (Ozaki), focuses on milk liquors, or *kumis*, which were previous-

ly produced only in a few localities. However, the market economy has commercialized *kumis* production as a source of income for peri-urban herders of both Inner and Outer Mongolia. Today, *kumis* production is supported by developments in communication and transportation, as well as by the growth of urban consumers. In Chapter 4 (Terao) long-distance drivers bringing goods and people are described. In the era of socialism, the circulation of goods was directly managed by the public sector. Today, however, certain transportation routes are occasionally supported by informal services and depend on the life styles of drivers and their equipment.

Chapter 5 (Hotta) deals with consumption and distribution system of goods flowing into herder households. Herders purchase food and other daily necessities with cash provided by the sale of livestock products and various subsidies. However, they also obtain certain items by sharing, manufacturing, and borrowing, among others, which are methods of consumption that are independent of the exclusive ownership of goods.

In conclusion, we have identified three characteristics in globalization of Mongolia. Firstly, we have drawn attention to a domain that is highly influenced by money, or the wide-area distribution system, and a domain that is less affected by change. Though the modern system including nationhood has had a significant influence on herders, herders cope with it by using their own cultural stock. Secondly, we established that Mongolians positively accept the new, global technology and that they manage it in their own way by using it along with traditional methods. Thirdly, we have pointed out that Mongolians do not try to be specialists in order to pursue economic efficiency. This seems to equip them for future risks, by preventing them from denying the wide variety of possible options.

This book is the result of the Center for Northeast Asian Studies' Joint Research Projects, "Distribution of livestock products and Globalization in Mongolia" (Represented by Mari Kazato in 2014) and "How things circulate within and outside and the areas of Mongol and Kazakh steppe?" (Represented by Mari Kazato in 2015).

---

---

東北アジア研究センター叢書 第58号

モンゴル牧畜社会をめぐる  
モノの生産・流通・消費

発行 2016年12月1日

編者 風戸真理, 尾崎孝宏, 高倉浩樹

発行者 東北大学東北アジア研究センター  
〒980-8576 仙台市青葉区川内41

印刷 小宮山印刷工業株式会社  
〒162-0808 東京都新宿区天神町78番地

---

---

ISBN978-4-908203-07-7